
ワルドの日々【ゼロ魔】

ペスポチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワルドの日々【ゼロ魔】

【Nコード】

N5601K

【作者名】

ペスポチ

【あらすじ】

最低系要素をもっているワルド子爵への原作知識無し転生物です。最低系要素の部分を増やしています。

アンチトリスティン貴族風味ですが、こうやって書かないと気がつかないレベルかもしれません。

ライトノベル17巻までをベースにしています。

ライトノベル18巻でワルド子爵の母親の話がでているので、その時点からすでに異なっている作品です。

しかしながら18巻以降や、アニメ版、烈風の騎士姫の設定も含ん

であります。

ご都合主義・オリキャラ・オリ設定が多数あります。

なんとなく、四系統魔法では最強系になりつつありますので、ちょっと独房にはいって、ハンセイしました。

理由は最終輪のあとがきに書いておくとしてここで完結といたします。こちらは Arcadia でも投稿しています。

第一部 導入編 第一話 前世の覚醒

プロローグ 転生トラックじゃないけれど plus 神様

この不況期に勤めていた会社が倒産した。
実家の状況も厳しく大学に進学しないで、ようやくと入った会社ではあつたが地元ではない。

友人のつてもあつてなんとか、ここ北国の某S市某H大学そばにあるベンチャーに入社できた。
今日はその祝いもかねてもらつて、入社祝いの宴会をおこなつてもらえた。

宴会終えてまっすぐ帰宅だ。

地下鉄の駅では、最後尾の方に移動する。
地下鉄を待っているると灯りが近づいてくる。

地下鉄も目の前にせまってきたところで背中を押された感触があつて、そのままホームから転落した。
その刹那、このS市地下鉄の人身事故死亡率って低かつたよな？
つと思つたところで意識を失つた。

目をさましたところでお約束の「知らない天……」っと思ったら、
青空が広がっている。
普通、病室じゃないのか？ っと思っただ。

「ようやく気がついたようじゃの。お若いの」

「はい？」

声の聞こえた方を向くと、小柄な老人で金髪の男性が何やら長い口
ーブを羽織っていた。

「何かお世話になったようで、ありがとうございます。大空と申し
ます」

「わしは、ブリミルという。」

わしが管理している世界では始祖とか、神とも呼ばれているものじゃ」

もしかして新興宗教か、頭の中がちょっと変わった人かと思ってあらためてまわりを見回してみる。

ちょっと小高い丘の上で、まわりは草原がどこまでも続いている。はるか遠くに山と森が見えたが、今頃の時期は山の上の方は雪がつもっているはずだ。

何かおかしいと思っても手がかりが無いので、ちょっとばかりこの老人につきあってみることにする。

「はあ、神様ですか」

「そう呼ばれているだけで大した力はない。実際、きみを選んだのはキーヤンだしな。」

わしは、それを待っていただけじゃよ」

キーヤン？　なんかどこかのコミックで聞いたような気がするな。やっぱり頭の中がおかしな人か？

「それで、私はどうなっているんですか？」

「無論、死んでおるぞ」

「えっ？」

体中をまさぐってみたり、ほっぺたをつねってみて痛かったりとうやっても普通の状態にしか思えない。

「その様子だと、死んだことを認識していないようじゃの。
キーヤンも中途半端な人物を送ってくれたものじゃ」

「死んだことを認識って、私は死んでいるんですか？」

「実体があるように感じるから生きてるように思うのじゃな。ちよっとまっつてなさい」

何やら言霊か呪文のようなものを唱えてもっていた杖をこちらにつきだした。

「ほら、きみ自身の体を良く見てみなさい」

言われた通りにみしてみると、体は透けた感じになっていて足が無い。これで、白装束にかわっていたらいわゆる日本での幽霊って感じた。普通パニックに陥ってもいいよなと思いつつも、それも脳内物質の問題かと気がつくのと冷静でいられる自分に納得がいった。

催眠術とか、夢オチという可能性もあるが、夢って痛みは普通無いはずだよな。

催眠術の可能性も無いわけではないが、覚えている限り暗闇を使うとか意識を一転に集中させるとかの方法を使われるよな。

「えーっと、あまり認めたくはないのですが本当に私は死んでいるのですね。」

「しかし何故私はここにいるんでしょうか？」

「うむ。新しい人生を選択することができるのじゃ。

転生と呼んでおるが、特にきみである必要でもないので拒否権はあるぞ」

「新しい人生の選択ですか」

「そうじゃ。転生先はきみたちでいう中世ヨーロッパに似た世界になるな」

「中世ヨーロッパに似た世界ですか」

「そこで、魔法が使える領もちの貴族になるかごく普通の平民になるかだ」

特に考えかんがえなくても、貴族で領地を持つならばそっちが良い気がするけれどな。

しかも魔法っていう響きには、ちよつとあこがれるかな。

中世ヨーロッパぐらいなら、今の知識があると役に立つかもしれないな。

「確認したいことがあるのですが、転生した後って今の知識は残るのですか」

「今なら特典として記憶を残そう。」

平民ならば今の知識は無い方がよからうが希望するならばやはり記憶を残そう」

「まさか、赤ん坊の状態の時から記憶が戻っているとかという状態じゃないですよね」

『……忘却の呪文を時間制限でかければなんとかかなりそうじゃな』

ちょっと間があいてから

「そういうこともできるが、それが好みかね」

「いえいえ、どうせならある程度自由に動きまわれるころになってから」

記憶をとりもどせないですか」

「そうじゃの。6歳の誕生日に記憶が戻るようにしておこう。それで転生はよいかね」

「もう少し、細かく転生先のことを教えていたければと」

「行けばわかることじゃ。」

それとも、記憶無しの平民として転生して特典は他の者に譲るか？」

結局、転生する世界はきまっけていて貴族で前世をもっているか、単に平民かというところしか選択肢が無いのか。

「いえ、その特典を受けさせてもらいます」

「うむ、よからう。それでは、すぐに転生させてやるう」

ブリミルは呪文をとなえて、大空という名の者の魂が転生先にやどったのを見届けた。

「やれやれ。キーヤンも人間違いで殺してしまったからって、

特典つけて転生させてやってくれとはな。マイナー神のつらいところじゃな」

ブリミルはそうひとりごちをついた。

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

第一部 導入編 第一話 前世の覚醒

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

明日はぼくの6歳の誕生日。

父さまも王都トリスタニアからもどってきてくれる。

その誕生日には何か特別なことがおこりそうな予感がするんだ。

なんか、わくわくして眠れそうにないよ。

しかし母さまに言われて、メイドにつれられてベッドについたけれど中々眠れないな。

窓から見える2つの月を見て、そういえば月って2つなんだっけ？
っと思いつながらベッドで横になりながら窓の外を眺めていたらいつ

の間にか眠ってしまった。

あー、頭が痛い。二日酔いのような感じで目をさます。

えーと、昨晚はどうやって帰ったんだったかな。

変な夢を見たような……夢？

違う。昨日は2つの月を見ながら眠ったはず。

いや、月は1つだ。

混乱する意識の中で思い返してみると、夢の中であった変な老人と始祖ブリミルの名前が一致する。

どうなっているんだ？

よく思い出すんだ。

そういえば転生とか言われて、今がこの6歳の誕生日か。

今の体の記憶と多分、前世の記憶を序々にすり合わせていくとそんな結論がでてきた。

頭の中で整理できてきたところでまわりを見るといつも見ている室内だが、なにやら初めて見たような不安定な感じがする。

手を見てみるとまわりの風景とあわせると小さく、しかも前世の記憶にあった手よりも白く見える。

さてこの世界での俺の環境はどうなっているんだらうっと、今の体の記憶だと思われる部分をさぐりあてる。

父は月の半分くらいは王都であるトリスタニアに行っているようだ。今日は俺？ いや、ぼくの誕生日にあわせて戻ってくるようだ。

母は、っという美人だな。しかも結構スキンシップが好きなのかベタベタしてくるようだ。

ブリミルは中世ヨーロッパと似た世界だと言っていたが、もう少し

子どもとは距離を置くのが普通だと思っていたのだけど貴族は違っただろうか。

兄弟はいない。1人息子のようだな。

使用人たちはまあいいだろう。

まずは母だ。

素直に前世の記憶がもどったことを話すか。

いや、ブリミル教、輪廻転生にあたる概念は聞き及んでいない。

まいったな。転生するのに途中で記憶を戻すなら、ここらあたりぐらいサービスしておいてほしかったな。

そうだな。様子見だがうまく昨日までのこの体の動きをそのまま再現できるのか？

とりあえず小声で「おはようございます。母さま」と言うと子ども特有の少々かん高くて、しかも昨日までぼくが発していた声だ。

声は大丈夫だ。体はどうだろう。

ベッドから起き上がって部屋の中を歩き回る。

特に違和感も無く体を動かせる。

部屋の鏡をみると金髪姿の可愛い男の子の姿が映っていた。これが新しい俺、いや、ぼくか。

あとは魔法だ。

コモンマジックを使えるはずだが本当に魔法ができるのか。

ベッドの脇においてある杖をもち椅子にむかって「念力」を唱える。うまく持ち上がった。「ふー」

気をぬくと「ガタツ」という椅子の落下音が聞こえた。

あちゃー。幸いあまり高くもちあげなかったのでよかったが確か母に、いや、もう母さまと意識をかえておかないとな。

とりあえず、今の段階だと意識をそらすと「念力」は途中で失敗するようだ。

母さまからもそう言われているのを思い出した。
あとは、いつも起こしにくるメイドを待っているか。

いつもの通りドアからノックの音がした。

「おきているよ。オランプかい？」

「ぼっちゃま。珍しくおきていたのですね」

「うん。なんとなく早起しちゃった」

「それでは着替えましょうね」

そう言われてパジャマから普段着に着せ替えをさせられる。

なんとなく気恥ずかしいが、これがここでの日常だ。
暖かく濡れたタオルで顔を拭かれてから食堂に向かう。

今のところ、オランプには不審には思われていないようだな。

食堂には、母さまがすでに席について、もうひとりのメイドである
マリーがいた。

「おはようございます。母さま」

「おはよう。ジャン・ジャック。今日はいつもより早いね」

「うん。なんとなく早く起きちゃったんだ。

もうぼくも今日から6歳だからもっともっとがんばりたいんだ」

いや、単純にメイドに服の着替えをされたり母さまにまわりつか
れそうなのをけん制したつもりなのだが、

「あら、えらいのね。けど、ジャン・ジャックはまだ6歳なのよ。もつと色々勉強しましょね。例えば、食事もきれいに食べるのよ」

うっ、記憶にあるこの体での食べ方だが確かにお世辞にもきれいな食べ方とはいえないな。

「うん。今日からきれいに食べられるようにするよ」

「じゃあ、朝のお祈りを始めてからお食事にしましょ」

「はい。母さま」

「偉大なる始祖ブリミルと陛下よ。

今朝もささやかな糧を我に与えたもつたことを感謝いたします」

目をつむりながら祈りを唱和する。

さて食事だが、パンは硬めでスープまでは良いが肉食か。

前世の生活では、あまり朝食に手間をかけないでトーストとコーヒーだけだったからな。

よく胃にもたれないものだと思いながら食事を開始する。

メイドはこの食堂の目立たないところに立っている。

見られているようでなんか落ち着かない。

それにナイフとフォークだが思うように動かせない。

前世の記憶はもっていても体のコントロールがなれていないのか、それともこちらの体の方の記憶が強いのか思ったよりも食事に時間がかかってしまった。

母さまは、食事が終わるまで話をしない。

父さまがそろっていても話さないのだからこういう風習なのだろう。なんとか、食事を終えるがかなり残している。

前世では少々貧乏生活に突入していたので、なんとなくもつたいない感じだ。

「時間はかかったけれど、きれいに食事ができたのね、ジャン・ジャック。」

夕方には父さまも帰ってくるから、その調子できれいに食べるのよ」

「はい。母さま」

さて、このあとは少し時間をおいてから母さまと魔法の勉強からだ。うまくやっけていけるのかな。

この前世の記憶をとりもどした”ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド”の体で。

さて、このジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドという子どもとなって転生したのは良いが、どうも思っていた中世貴族のイメージと違うようだ。

ヨーロッパ人の自国自慢を聞かされたのを丸々信用したのがいけないのか、それともやはりここはあくまで似た世界でしかないのか。素直に考えるのなら、あくまで似た世界と考えるのがよさそうだな。今、こちらの子どもの記憶と思われる知識ではどうにも判断がつかない。

そうしているうちに毎日の日課になっている母さまとの魔法の勉強と練習を開始した。

「さあ、魔法のお勉強の時間よ」

「はい。母さま」

いつものように魔法の練習をしている庭へでかける。

「まずは『念力』のおさらいをしましうね。あの石を浮かす事はできるかしら」

「やってみるよ」

昨日も同じような感じでおこなっていた記憶がある。

意識を石に集中して『念力』の呪文を唱えて杖をむけた。

うまく、石が浮遊する。

「あら。昨日よりずいぶんうまくなったみたいね。しかも高くうかんでいるわね」

「うん」

一言だけ答えて、意識を母さまの方にはむけないようにする。

昨日はここで母さまに話かけられて石が落ちたのだ。

「それにしても、1日ですいぶん違うわね」

えーと、そういうものなのか？ と疑問には思っが、なにせまだ記憶ではつきりしないところがある。

何か間違いを犯しているのだろうか。

「もう、石を降ろしても良いわよ」

ゆっくり石を下降させて、音が立たないよつに着地させる。

そんな様子を見て母さまが言う。

「もしかしたら、今日ならコモンだけじゃなくて系統魔法も使えるかもしれないわね」

「系統魔法を試してみるの？」

「そうよ。誕生日だし、うまくいくかもしれないわよ。」

その前に系統魔法は4つあるけれど、全部おぼえているのかな」

「うん。地、水、火、風だったよね」

母さまが少し怪訝な顔をしている。

「あら？ その4つであっているのかしら」

「あつ。地じゃなくて土だったね。勘違いしちゃった」

どうも四大元素の方を思い出したようだ。

「そうよ、土と地はにているけれど、系統魔法では違つよ。」

きちんと覚えておきましょうね」

「うん」

「それと今は失われた系統魔法の『虚無』をあわせて5つの系統があるのよ」

「そうだったね」

あの草原でのブリミルとの会話を思い出すと、始祖ブリミルが扱っ

ていたという『虚無』の魔法だが『命』を直接左右するような魔法だったのだろうか。
若干、ボーっとしていた。

「どうしたの。気持ちでも悪いの、ジャン・ジャック」

「いや、なんでもないよ」

「それなら良いのだけれど……」

こちらの顔を見ながらの母さまは心配げにしている。
あまり、ぼやっとしているのもできないのかと思いつつも

「そういえば、系統魔法ってどうやってするの？」

「そうね。あまり使いたがる人がいないのだけれど

『マジックアロー』の色を見る方法ね。

現在どの系統が1番むいているかがわかるのよ。

今から1本の『マジックアロー』を放つから。よく呪文を聞きながら見ておくのよ」

「はい。母さま」

そうすると、聞きなれない言葉とともに最後に『マジックアロー』
と言って杖をふって、その先の空間から鮮やかな青い矢が先ほどぼ
くが浮かべた石にあたって消えた。

「これが『マジックアロー』よ。」

わたしが先に呪文を詠唱するから、それに続いて詠唱を続けなさい。
い。

そして詠唱を終えたら、1本の矢を思い浮かべて杖をふるのよ。
これでわかったかしら、ジャン・ジャック」

「やってみるよ」

「それじゃ、始めましょうね」

にっこり笑う母さまがいた。

さて、その後は母の詠唱を1音節ずつ聞いて同じ詠唱を続けて、最後に先ほどの鮮やかな青い矢を思い浮かべながら、先ほどの石に向かうように考えながら杖をふった。

矢は見えない。失敗したのかなと思ったところで石の方で「ガキッ」と音がして石が割れていた。

「透明な矢なのね。風系統だわ。

6歳になったばかりなのにもうドットの魔法が使えるなんて、

きつと優秀なメイジになれるわよ」

そう言いながら母さまが抱きついてくる。

母さまは多分20台半ばなのだろう。しかも美人だ。

この子どもの体がうらめしいと思いつつも、自分の母だよなと半分がっかりもする。

「ところで風の矢って透明なんだ」

「そうよ。父さまの風の魔法も見えないでしょう」

「そうだったね」

「そうしたら、また『念力』の練習をしてみてね」

「うん。やってみるよ」

なんとか、ベタベタしてくる母さまから離れる口実ができた。

庭にある別な石にむかって『念力』をかけて石を浮かせていると、母さまが『ディテクト・マジック』をかけている。

半分、何をしているのだろうと思いつながら石を浮かせることの集中をときらせないようにする。

そうすると、母さまが小声でつぶやくのが聞こえた。

「この前より、大きく魔力が上がっている……まさか、ね……」

石が落ちないようにしながら、必死に考える。

もしかして、前世の記憶がもどったことによつて精神力があがつて、魔力に影響しているのか。

けれど、最後の「まさか、ね……」ってなんだろうか。

「今日の魔法の練習はここまでにして、今晚は父さまを驚かせましよう」

「はい」

「そうしたら、家の中で勉強しましょうね」

そういつて、勉強部屋にもなっている自室にやってくる。

昨日までの自分なら全く疑問に思っていなかったが、改めて自室に入ると今朝起きた時には感じなかった違和感を覚える。

石造りの部屋なもの、部屋がランプだったりするのは良いが、可動式のカーテンがあるのだ。

この時代にあつたかな？　だめだ、そんな細かいところまで覚えていない。

それと勉強だが、文字の表が貼つてあつたりしている。

確か、前世の祖父の時代にはなかったような記憶があるのだが。

そんな疑問を持ちながらも、母さまと今日からルーン文字の勉強もはじめた。

母さまが、羊皮紙にルーン文字の表をつくってくれるのだ。

なんか、小学生時代にもどったみたいって、この体の年齢からするとそうだけれど、教材として買っていたはずだよな。

今一つ中世ヨーロッパに似ている世界といわれても違和感を覚えすぎるが、まあ、やはり様子を見ていくしかないだろう。

そんなこんなで、昼食の時間は、テラスでのサンドウィッチだ。

しかも中身はハンバーグ。

絶対に時代背景は中世ヨーロッパじゃないぞと、草原であつたブリルに文句をいいたくなるがここは我慢をする。

食事中無言なのは、こういうものなのか。

母さまと二人きりとはいえ、せつかく人がいるのに話をしないのは時間をもつたいたいと思うのは前世の記憶のせいか？

いや、少し離れたところにメイドはいるけどね。

なんか、段々と感覚がならされていくというのか、今の体の記憶になじんでいつてるのだろうか。

午後は自由とはいえ、実は何もすることが無い。

記憶によると母さまといるときはたまにフルド子爵領内の町にでかけることもあるが、ほとんどは母さまと一緒にすごすという記憶しかない。

魔法の練習という手もあるが今日は父さまを驚かすということ、精神力の問題から魔法の練習は禁止だ。

かわりなのか今日は母さまからみっちり、いろいろな話をきかせ

てくれる。

しかも母さまのひざの上だ。

ひざの上を断ったら泣きだしそうな母さまの顔にまけて、結局母さまのひざの上で本を読んでもらっている。

魔法の世界だというのに『イーヴァルディの勇者』とかいう、魔法とは関係の無い物語を聞かせてくれる。

それとも、左手が光るといのが魔法に関係するのだろうか？

そうすると執事のジャンから、父さまが帰ってきたことを伝えられる。

結局、今日も母さまと1日べったりとすごしてしまったことに自己嫌悪を持ちながら、さっそく迎えにいかないかね。

「おかえりなさい、父さま」

子どもらしくかけよったら、抱き寄せられて頬ずりをしてくる。

そういえば父さまの癖だった。

それヒゲが痛いからやめと、「イヤイヤ」と叫ぶと、ようやっとやめてくれる。

そうやって、気がつくとな父さまの部下である2名のアトス、ポルトスがいた。

時々、父さまと一緒にこの屋敷にきてくれる若い貴族だ。

「こんにちは。アトス様、ポルトス様」

「ようやく名前を覚えてくれたか、ボウズ」

「おいおい、小隊長殿の前でいう言葉じゃないぞ、ポルトス」

「息子の誕生日の祝いにきてくれたのだ。そんなにかしこまらなく

てもいいぞ。

お前らの普段の武勇伝はきいているからな」

「それはいわないお約束で、小隊長殿」

なんか三銃士を思い出すな。

「あら、いらしてくれたのね。アトス様、ポルトス様」

「ええ、よろしく願います。ワルド夫人」

「色々と珍しいものをいつも楽しみにしていますよ」

母さまの問いにアトス様、ポルトス様が答えている。

さて、今晚の誕生日には何がでてくるのだろうか。
記憶が混乱している。

まあ、今晚までまてば良い話か。それよりも母さまが

「あなた、ついにジャン・ジャックがドットレベルの魔法を使える
ようになったのよ」

「おお、それはすごいな。明日にでも見られるのか」

「いえ、わたしの見る限り、今日もまだ使えると思いますわ」

「そうか。それはめでたい。可能なら今日みてるのもいいかもな」

「じゃあ、やってみましょう。ジャン・ジャック」

自分の精神力というか魔力を正確に把握していない今、まあ失敗し

てもともとと皆で一緒にいつも魔法の練習している庭にでかける。それで母さまの詠唱と一緒に『マジックアロー』の呪文を唱えて石を狙う。

『マジックアロー』は狙ったとおりに、石に向かって割ってくれた。それを見ていた父さまはなぜか渋い顔つきで、アトス様、ポルトス様は逆に楽しげに笑っている。

「この2人だから良いが……決してルーンで『マジックアロー』を詠唱しないでくれよ。」

他の人に見せると困ったことになる」

「わかっていきますわよ。それよりも人を呼ぶならもっと先に教えてくださいな。」

コックがこまっていましたわよ」

「ああ、お前の言うことは正しいのだが、もう少し世間体を考えてくれ」

「あら、その世間体を気にしなくても良いと言ってくださったのはどなただったかしら」

なんか、夫婦喧嘩がはじまりそうだ。

「おれの負けだ。それで許してくれ」

「わたしも、公にはしませんからだいじょうぶですわよ」

あっさりと終わった。

まあ、夫婦の仲はよくわからんが、こうして見てみると悪くはないのだらう。

何か、母さまが世間ずれしている感じがあるのはなんとなくわかった。

そうして、今日のぼくの誕生日パーティということで並んだ食材をみてみるとまた混乱だ。

フランス風料理はまだよいというか、ちょっと思っているのとは違う。

しかし時代が違うのだからきつと、これらが原形なのだろう。けれども、どうして中華料理がならんでいるんだ？

それだったら、羊皮紙でなくて普通の紙もありそうなものだが。

第一部 導入編 第一話 前世の覚醒（後書き）

ブリミルがヴアルハラで神様をしているのはありえない設定です。このあたりは8話まで読んでいただいても、何かしら書きたいことがあるならばお聞かせいただくと幸いです。

『キーヤン』は椎名高志先生作『GS美神』から名前を借りてきています。

ワルド子爵が身内からでさえも「ジャン・ジャック」と呼ばれていることに違和感を覚える方はいらっしやると思いますが、ライトノベル版18巻をご覧ください。

『マジックアロー』の色は、各王家の指輪の色と同じとさせてもらっています。

第二話 ダンゲルテールの新教徒

「6歳の誕生日おめでとう。ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド」

今回集まったアトス様、ポルトス様も一緒に唱和してくれた。ささやかならしいながら誕生日パーティがひらかれた。

こうやってごちんまりとしながらもパーティ形式であらためて見ると父さまとアトス様、ポルトス様は同じような制服姿でいる。

父さまは魔法衛士隊だったよなと、ようやく思い出す。

魔法のある世界だから銃士隊とか親衛隊じゃなくて魔法衛士隊なんだろうな。

父さまは金髪で口ひげをはやしているけれど、けっこう頬のひげも硬い。

あの頬ずりの挨拶する癖はやめて欲しいのだが。

母さまもやはり金髪で、昏間と違ってドレスを着ている。

こうやって、夜になるとそれほど明るいとはいえない室内だが、美人だな。

アトス様は少々小柄だが、真面目そうに見える。

しかし、先の父さまの口ぶりからすると、見た目とはちがってケンカっ早いのかな。

ポルトス様は背が高く体格もよいが、高慢ちきな面構えをしているな。

制服には金の刺繍ししゅうをほどこしているので、父さまやアトス様よりもおしゃれな感じだ。

この時代の制服は多少なりとも自由なようだな。

食事の方はともどると、記憶の中で過去に中華料理がでてきているのも思い出した。

他にも緑茶とかしょう油がでていたけれど、しょう油はタルブ産って言うていたな。けれどなぜしょう油って名前なんだろうか。

食事はもう考えるのはやめよう。

なにせ今目の前にろうそくはたっていないがケーキがでてきている。ケーキはこんなものかなと思ったたらポルトス様がいう。

「今回はケーキが特別ですな。」

他のケーキと違ってこの中のパンの部分が柔らかくて甘いですな」

大柄な見かけによらず、甘党なのか。この時代の男性も普通はそんなのかな。

そうすると母さまが

「あら、わたしの実家のアンゲル家では普通にありましたわよ。」

まだ王都トリスタニアではひろまっていなかったかしら」

「アンゲル家？」

そうすると、もしかするとダンゲルテールがある、あのアンゲル地方ですか」

「話はそこまでだ、アトス。今日はせっかくの息子の誕生日だ。」

その話題は明日以降にでもしてくれぬか」

「そうだな、アトス。そんなんだから、お前はいつまでも女性にもてないんだ」

「お前みたいに、色々な女性とつきあっているのも考え物だがな。
そう思うでしょう、小隊長殿」

ちよつと、緊迫しかかった雰囲気が霧散していく感じだな。

「いつもの酒屋で飲んでいるわけじゃないのだぞ。ちよつとは自重しろ。お前ら」

「普段なら一緒に飲んだくれてるのはどなたでしたかね。小隊長殿」

「あら、その話は興味あるわね。あなた」

「……おほん。あー、もう夜も遅いし、子どもは寝る時間だ。
早く寝なさい、ジャン・ジャック」

ちつ、完全な話題転換だ。

しかし、夫婦げんかになりそうだから素直に寝るか。

「はい。父さま」

そうして、メイドのオランプにつれられて、パジャマに着替えさせられて寝ることにした。

さて、この着替えて、いつまでメイドにしてみらうんだろうかっと思いつつもベッドに入ると、
昨晚のように双月を見ながら横になっていたがすんなりと眠ることができた。

翌日の朝食では、少々げんなりした感じの父さまと、いつもとかわりを感じさせない母さま。

やはりぼくが寝た後に多少のもめごとはあったようだな。

それと、普通に朝食をとっているアトス様と、二日酔いなのかスー
プにしか手をつけていないポルトス様がいた。

体の大きいポルトス様が二日酔いみたいな感じなのは少々意外だが、
朝食は特に会話もなく終わった。

この家の風習というよりは、領持ちの貴族全般はこんな感じと思っ
てもいいのかな。

メイドが部屋の隅にいて見られているのだが、もうなれてきたのか、
あまり違和感も覚えなくなってきた。

すべて、きちんとなれておくといいんだけどな。

さて、いつもなら少し休憩してから魔法の勉強の時間になるので、
一人で勉強しなさいとおい出されかかったけれども

「母さまの実家のことなら聞いておきたいよ」

そう言うと、父さまが少しばかり考えこんでいた。

「まだ早いかもしれないが、聞いておくのも貴族のところがまえと
して良いであろう」

なんとか一緒に話を聞けることになった。

「昨晚、話がでかかっていたダングルテールの話だが、

アングル地方の平民どもは国家を転覆させる企てを行っていた。

そういう噂が流れてダングルテールの平民が全員殺された」

たしかにむごい話だけれども、テレビのニュースではこれよりもむごい話なんか流れているしな。
そうすると母さまが、

「ダングルテールの村の平民が国家を転覆させるなんてことを考えるわけがありませんわ。わたしは、何回も出入りしたことがある村ですから」

「アングル家でも同じ見解にたっている。

それゆえにアングル家にも、国家を転覆させる企てていたのではないか

という噂も流れていたりしたのだが」

「それこそ、ありえないわ」

それにしても魔法を使える貴族が、魔法を使えない平民が国家転覆なんてさせられるんだらうか。

それとも、この魔法はそこまで強くは無いのかな。

母さまの実家に関係していたとしたら、もしかしたらワルド子爵家にも影響がでそうだ。

困惑している母さまに父さまが、

「そうだろうとも。

そもそもダングルテールの平民を殺すにしてもアングル家で行わせるか、

アングル家で対処できなければわれわれ魔法衛士隊が動くはずだからな」

「ダンゲルテールの平民を殺す話も
アングル家には命令など伝わっていないのですね」

「そうだ。ピエール……今はラ・ヴァリエール公爵だな。
別な軍が動いていないかも調べてもらったがどうもアカデミーが
動いたらしい」

「アカデミーですか？ そのようなところだとは思えないのですが
アカデミーっというところだと研究者というイメージを思いうかべるが、こ
の魔法のある世界だと魔法を研究しているところなのかな。
アトス様が、

「ダンゲルテールの件なんですがね、
魔法衛士隊の中でも変な話だというのはありましたね。
覚えていないか、ポルトス」

「その件なんだがな。
今年の春の魔法衛士隊見習いの充足では
変な動きがあったという話だったよな」

「そうだな、普段より新入隊員の質が低い印象はあったな」
「噂だったのですが、魔法衛士隊充足時のあしきりで、
下級貴族の優秀なメイジはアカデミーに行ったという噂が流れて
いたんですよ。」

その時は単なるあしきりにあった貴族の嫌がらせかと思ったので
すがね」

そこで母さまが、

「ダングルテールの平民を殺すなんて、もしかして新教徒が集まっているからかしら」

「そうかもしれないが、それだけでアカデミーが動くというのでは理由としては弱いな」

「あそこの新教徒は始祖ブリミルが神からその能力を承ったと言っていただけなのに」

「新教徒の中には、メイジなども混ざって実際に荘園などを奪ったのもあったからな」

「何回も行っているわたしにはわかりますわ。
ダングルテールの新教徒はそのような動きはしませんわ」

「実体を知っているものはそう思うかもしれないが、
そうでなければ一緒に見てしまうものだよ。」

だから新教徒狩りなんてものが10年前に行われた」

「そうでしたわね……」

新教徒か。始祖ブリミルが神からその能力を承ったというだけで新教徒として迫害されるんじゃないやブリミルとあつたなんて言わなくて正解だな。

「それはさておき、多分、動きはこれ以上無いか探りを入れておくことだな。」

悪いが、調べておいてくれ。アトス、ポルトス」

「ええ、良いですよ」

「ええ、ぼくもですね。さて、またいつこれるかしれませんが、そろそろお暇致しますよ」

「あら、もうこんな時間。昼食用にサンドウィッチでもいかがかしらう。」

「すぐに用意させるわよ」

「良いのですか。移動しながら食べられますしね」

「あなたたちは、いつもそうね。食事の時ぐらい、ヒポグリフから降りたらどうなの」

「それでもしないと、今晚は遅く着くことになりますからね」

「お前はそうだな。今晚も女性と約束しているのか。ポルトス」

「そういう言葉は、きちんと女性とつきあってから言っただな。アトス」

「まだ良い相手が見つからないだけだ」

「まあまあ、あなたたちの仲が良いのはわかってるから、子どもの前でケンカはしないでね」

「おや、いたのか。ボウズ」

「だまっていたから、居るのをすっかりわすれていたな。はっはっはっ」

単純に居るのを忘れられていたらしい。
まあ、逆に大人の素の話が聞けてよかった。
手の打ち様は無いから、とりあえず様子見の継続だな。
そうして、王都トリスタニアに戻っていくアトス様、ポルトス様を
見送った後、魔法の練習は午後に行うことにしてルーン文字の書き
取りを一人ですることになった。

ああ、一人で居られる。

子どものふりをしなくていいんだとちょっと気が楽になる。
自分の机に向かって、昨日作ってもらった、ルーン文字の一覧表の
書き取りを行うことにした。

そうして、ジャン・ジャックが自室に一人で書き取りの勉強をして
いる頃、父と母は

「昨日、今日のジャン・ジャックを見てどう思いますか。あなた」

「子どもというのは急成長するものだな。」

以前はあんなに活発だったのに、
帰ってきたらきちんとしている時はきちんとしているからな」

「それって実は昨日からなんですよ。」

それにきちんとしているといっても、

先ほどのダングルテールの話では大人しすぎじゃありませんでし
たか」

「たしかにおれが子どもの時なら、なんでそんなことするのか言
いそうだな」

そして母は、ゆっくりと告げるように

「理由はわかりませんが、わたしたち一族の血にめざめたのかもし
れませんわ」

「お前たち一族の血って、前世の記憶を持ったまま産まれてくると
いうのだろっ。

それは息子には無かったと言ってたじゃないか」

「ええ。お父さまもそう言っていたのですが昨日の様子や

今日の様子をみているといつもの息子と何か違うような気がして

……

それに、昨日みたところ1週間前よりも魔力が大きくあがって
いるのですよ」

「魔力があがったのはめでたいことだ。

それにもう、そのお義父さまも亡くなられたのだろっ。

アングル家を継いだお前の弟には、その血がめざめていないのだ
ろっ。

それでどうすればわかるのだい」

「嫁入り道具にもってきた本を見せればわかると思いますわ」

「あの東方の文字に似た本か？」

「ええそうです。あれを見て反応すれば、

わたしたち一族の血にめざめたことになるのでしょっ」

「それでもし反応したら……どうする？」

母は決意をかためたように、

「その時は……」

こうして、ぼくの知らないところで包囲網は狭まっていた。

第二話 ダンゲルテールの新教徒（後書き）

灰かぶりはラ・ヴァリエール公爵であってほしい

第三話 ラ・ヴァリエール公爵家の人々

なんで、こんなことになったのであろう。

ぼくこと、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドは思い返すのであった。

あれは、6歳の誕生日の翌日のことだった。
母さまが、

「これは、読めるかしら。ジャン・ジャック」

一冊の本を渡してきて、思わずその表紙の題名を読んじまった。

「生まれ変わりの謎」

それも日本語で。

えーと、恐る恐る母さまの方を見ると少し悲しげな感じていたが

「そう……あなたも前世の記憶をもっているのね。いったいいつからなのかしら？」

その言葉には驚いたが、簡単に前世の自己紹介をしたところで、父さまも含めて家族会議になった。

結論からすれば『きちんとワルド子爵家の嫡男として振る舞う』っ
ということだった。

ともかくにも母さまの家系は代々が日本人として前世の記憶をも
つていて、母さまは前世でぼくよりも26年前に死亡したとのこと
だ。

それを父さまが知っているというのも大きかったな。

ただ少しばかり難点だったのはワルド子爵家は代々軍人を輩出していた家系で、ぼくにもそれを期待しているとのことだった。特に父さまは。

「だいじょうぶよ。わたしの夫でも魔法衛士隊にきちんと入っていただけるのだから」

「おいおい、それはいくらなんでもないだろう。お前」

「あら、ラ・ヴァリエール公爵が魔法衛士隊に入ったところに左目にグラスをはめて、

髪の毛を銀色に染めただけで、知らん振りしていたと聞いているわよ」

「それは誰から」

「カーリー又ちゃんよ」

「お前がカーリー又様と、はとことはいえ……」

「それよりもカーリー又ちゃんが、女の子だとわかっていたのに、

ラ・ヴァリエール公爵と同棲していたのを笑って見ていたのはどなただったかしら」

「あの当時の魔法衛士隊はひどかったからな……」

公爵家の嫡男が同棲？　なんか、想像と違う世界にきている感じだな。

母さまからは、前世のことや知識をそう簡単に話さないことさえ注意していれば良いわよとあっさりしたものだっただ。

「どうせ、前世があるという話はほとんどの人は信じないし、ブリミル教の異端審問の対象になってしまいかもしれないわよ。あと、前世の知識が多少あった程度だとあまり役に立たないしね」とのことだった。

さて、そうなるとうちとちよつとばかり生活がかわることになった。

家庭教師がつくことになったのだ。貴族のことをきちんと勉強するということだが、

「それなら母さまで良いのでは？」

「わたしじゃ貴族のふるまいをしようとしてもボロがでちゃうから」

「そうなの？」

「そうよ。だから、父さまには悪いけれど、このお城に閉じこもっているのよ。」

それでなければ、トリスタニアでパーティとかにでて悪評が高まるだけなのよね。あなた」

「うむ。いや。それは、おれの口からは言えないな。」

しかし、貴族の振る舞いとして家庭教師をつけるのは悪くは無い話だ。

「そうしよう、お前」

「うー、これってどうやっても母さまが変だったことだよな。」

まあそれは良い。現状はというと、

「それでなんでぼくは母さまのひざの上のっついていなければいけないの?」

「わたしの子どもだもの、あたりまえでしょう」

「いや、だって、前世の記憶をもっているし、

もう20歳を過ぎているんだから恥ずかしいんだけど」

「あら、中身はそうかもしれないけれど、外見は子どもだし実際に産んだのはわたしよ。

男の子が可愛いのは小さいうちだけなのだからもう少しこうしていなさい」

こんなんでいいのかと父さまに助けを求めると

「あきらめろ」

そのひとことだった。

仮にも軍人でしょ。

この父さまも、母さまに毒されているような気がする。それとも元々そうという性格なのだろうか。

ちなみに父さまは風のトライアングルだが、母さまは水のスクウエアのことだ。

母さまは、普段は面倒だからまわりにはラインと称しているらしい。どう表現したらいいのやら。

あとは佐々木 武雄とかいう人がタルブ村にいるらしいが、ゼロ戦を陛下にお返ししたいとかという感じの人らしいので会わない方が

良いのではと言われた。

意外にこの世界と前世での世界は近いのかもしれないが、ゼロ戦を陛下に返すといったところでもう世代が何世代も離れている感じだ。日本が負けたと伝えるのは確かに忍びない。

ワルド家にしよう油があるのも、この日本人のおかげだという。

大豆がこちらの世界には無いので母の実家では作れていなかったのだが、魚醬ウナギソースをこの日本人が作ったそうだ。

それをしよう油として使っているので料理の幅が広がったのよねと母さまは喜びながら言っている。

ぼくの魔法の方は8歳でライン、11歳でトライアングル、14歳でスクウエアとなってオルレアン公シャルルほどの早さでは無いが天才と呼ばれている。

しかしながら、ぼくは風系統以外の魔法はほとんどできない。

火系統は発火だけだし、水系統は大気中の水蒸気を液体にするコンデンセイションしか使えない。土系統はまるっきりだ。

どうも、風系統に特化しているようだ。

本当に戦闘向けっぽい魔法だな。

魔法の特性をいかして軍人になるなら、やはりこのまま父さまが望んでいる魔法衛士隊にはいるべきなのかな。

軍事力を適正に動かすなら空海軍に入るべきだろうけれど、専門性が高い空海軍と魔法のクラスが高ければ優遇されやすい魔法衛士隊悩むところだ。

そうして、今は恒例となっているラ・ヴァリエール公爵家への移動

の途中。

ラ・ヴァリエール公爵はいようがいまいが、カリヌ様がいるという事で母さまは1ヶ月に1回ぐらいでかけるのだ。

ラ・ヴァリエール公爵がいると晩餐会になってしまふのだが。

こついで軽い晩餐会なら、母さまでもボロをださなくてすむそうだが、母さまにとっては一種の暇つぶしなのだろう。

カリヌ様もあまりトリスタニアにはでかけられないので、良い話し相手になっているみたいだ。

カリヌ様は、ぼくにとって半分は師匠みたいなものだ。

マンティコア隊長として『鉄の規律』と言われていたようだがその規律をきちんとまもっていれば、まあ、なんとかさせる相手だ。師匠としては特に低いレベルのスペルでも強力な風をおこせる方法を教えてくれたしな。

根本的には精神力のたまっている量を集中力でカバーするのだが、普通のメイジではできないそうだ。

さてぼくの肉体年齢からいうと2歳年下のカトレア様のおもわしくは無いということでも水系統のスクウェアである母さまが治療もしている。

しかしこちらの魔法では治せないらしい。

母さまは中華の薬膳の知識があるとのことでは種類か試してみているが、軽減されるだけで根本治療には遠いとのことだ。

ぼくより1歳年上のエレオノール様は、トリステイン魔法学院に入学してぼくも今度の春には入学の予定だ。

今は少々勝気な面がまさっているが、以前は結構気弱な面をよくみせていた。

段々とカリヌ様みたいにきつい感じに似てきている。

まあそのカリヌ様のきつい感じに見えるのも表だけみたいで、母

さまと2人きりだと笑い声が聞こえてくる。
エレオノール様はどうなるだろうか。

それから10歳年下のルイズ嬢だな。
なんとなくなつかれている。

もうそろそろ5歳になるから、魔法の杖との儀式を行う頃かな。

そうして今日はラ・ヴァリエール公爵家での晩餐会。

とはいっても食べているか踊っているか話すぐらいしかないんだが、
ルイズ嬢の子守をしているほくがいる。

一応、ほくも客のはずなのだがなぜだろう。

まわりはほとんど夫婦のみできているから、まあ、話す相手もそれほどいないしカトレア様も体調の関係で最近では晩餐会にも出席することは少ない。

せいぜいエレオノール様がもどっていればその話し相手や踊りの相手をするぐらいかな。

けど、今日はエレオノール様もないからルイズ嬢の面倒をみている。

適当に相手をしているだけだがまあ素直に反応すること。これくらい無邪気だと可愛い。

髪の毛がなんか変な風にはねとんでいるけれどもう最近では気にかからないしな。

ラ・ヴァリエール公爵は昔は酒豪だったらしいが最近はそのほど飲

まないようだ。

それでも、ブランデーとかのアルコール度数の高い酒を好んで飲んでいるから酒には強いんだな。

こうして、いつもの晩餐会は過ぎていき睡眠の時間だ。

しかし自宅で寝るよりラ・ヴァリエール公爵家で泊まる方が落ち着くんだよな。

なにせ、メイドの着せ替えが無い。

最近こそ週の半分まで減らしてくれたけれども、あいかわらずメイドのオランプにパジャマと普段着の着せ替えをされている。

母さまがベタベタしてくるのも減ってはきているが、こちらだと外聞を気にしてかそれが無いのも大助かりだ。

母さまもあれから9年近くたつがまだ20台といっても通じそうな感じだ。

水メイジならではの肌を若く保つ方法があるそうだ。

もしかしたら、水メイジと結婚するといつまでも若々しい妻を迎えることができるのだろうかと思ってしまうな。

そんなこんなで1泊して、帰り際には珍しくラ・ヴァリエール公爵が帰りに立ち会ってくれた。

「娘を今後ともよろしくな。ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド」

「ええ、ラ・ヴァリエール公爵様」

たかだか、こんなことを言うためにでてきたのだろうか？

まあ、いいかと思って、馬車が進みだすと父さまが

「ああ、昨晚だが、ピエールとだな」

「ピエール……ラ・ヴァリエール公爵様ですね」

「そうだ。そのラ・ヴァリエール公爵と飲みながら、

ルイズとの婚約の話を冗談でしたんだがな。ジャン・ジャック」

はっ？ 婚約？

公爵家の三女とはいえ、次女は病で結婚までできるかどうかも不明。いくら魔法主義といっても子爵家の嫡男に実質上公爵家の次女になるルイズ嬢と婚約なんてあるだろうか？

単なる冗談だよな。

「それって、本当に冗談としての話になっているんですね。父さま」

「……当然だ」

昨日の今日だ。

中世の貴族で婚約があるというのは、あたりまえのような話だがさすがに、子爵家の息子に公爵家の娘を嫁がせようとは本気では思っていないだろう。

どっかで撤回をするんじゃないかな。

こう思いながら、ワルド子爵家に帰って行った。

そうして、その夜の父さまと母さまの寝室では

「今日の息子とラ・ヴァリエール公爵家三女のルイズとの婚約の話は本当に冗談なのでしょうね」

「少なくともおれは冗談だったんだがな」

「それって、カリリーヌちゃんも知っているの？」

「ああ、横で聞いていたからな。」

しかし、ピエールの性格を考えると冗談で受けたのでないのかも
しれないな」

「カリリーヌちゃんもラ・ヴァリエール公爵が特に反対しなかったら、
なんかこのまま話がきまるかもしれないね」

「まあ、本当にきまったら、当家にとってめでたいことでは無いか」

「息子の性格を考えると冗談のままにしておいた方が良いでしょうよ。
今回のことが本気だと思ったらゲルマニアに逃げるかもしれない
んよ」

「まさか、そんなことは無いよな」

「どうも軍人になるのも本来ならわずらわしいといった感じですね。
ね。」

この上、公爵家と直接の親類関係になったなんて考えたら
公爵家まわりの親類のことを考えると嫌になってくるのじゃない
かしら。

ジャン・ジャックなら」

「とりあえず、息子から改めて聞かれたらラ・ヴァリエール公爵も冗談のはずだということにしておこう」

「それが良いと思いますわ。」

もしラ・ヴァリエール公爵が本気ならそれはそれで考えましよう」

ぼくの知らないところで人生の方向は変わっていかうとしていた。

第三話 ラ・ヴァリエール公爵家の人々（後書き）

バツカスはワルド父では無いと推測

第四話 トリステイン魔法学院での日々

フォアの月、ヘイムダルの週な半ば、ぼくはトリステイン魔法学院の入学式に参列している。

式がおこなわれるアルヴィーズの食堂には緊張の色をつかべている貴族の子弟たちがいた。

そのような中、学院長のオスマン氏が教師たちを引き連れて中2階に現れ、ぼくたち生徒を睥睨した。

「生徒諸君。諸君らは、トリステイン……、いやさ！」

オスマン氏は大仰な身振りで、とう！ と中2階の柵から飛び降りる。

そのオスマン氏から魔法が発動されるときオーラを感じる。

まわりのメイジの中には自分宛以外のオーラは見えるものということだが、その人数はすくなく、オーラを感じるというのはさらに珍しいらしい。

今では、コモンと四大系統のどれが発動したかわかるくらいだ。ただひとつの例外を除いて。

オスマン氏からはコモンマジックの発動を感じるので、飛び降りたところからみると『レビテーション』の呪文だろう。

一見華麗にテーブルの上へ着地したが、コモンマジックの発動を感じた瞬間からすると、結構きわどかったのではないだろうか。

オールド・オスマンと敬称されているくらいだから、きちんと計算されつくした時間なのだろうか。

そんな事を考えていたら

「諸君！ ハルケギニアの将来をになう有望な貴族たれ！」

立派な言葉である。皆拍手をする。

しかしながらそのあとは覚える気にもならない、延々とつまらない言葉が続いて入学式も終わり各自のクラスに分かれていく。

1学年のクラスはソーン、イル、シゲルの3つに分かれている。

ぼくはソーンのクラスに入った。ここで、ぼくは目立った。

以前から身内からは美少年だの将来は美男子になるだのと言われていたが、国と時代で美的センスが変わるから身内の身びいきかもしれないと思っていた。

自分でも自分の顔が整っているのはわかっていたが、こつやっつはつきりと知り合いのいない中で注目をあびてようやく納得がいった。これはこちらから恋人をうまく選べるかなと思っっている。

この学園に入ったひとつの理由は将来の妻を捜しにきたのだ。

いくらなんでも10歳下で5歳になったばかりのルイズ嬢を妻にとするのはあまりに好みの範囲外だ。

また、実際に結婚になったら相手は公爵家の令嬢ということもあるし、親戚関係はきつとつるさそうだと思つと益々乗り気にはならない。

魔法学院では寮の荷物を気に入つた場所においてもらうための指示をするために、入学式より1日早く寮に入った。

その時にエレオノール様と話す機会があつたが、ルイズ嬢とぼくの婚約の話には反応が薄い。

それよりもエレオノール様はなげいている。

「この魔法学院には碌な男性がない」

なぜか、付き合う男性が、数日もつきあってみると断りをいれてくるといふことだ。

今年の1年生に私とつりあう男性はいるかしらなんて感じた。

ラ・ヴァリエール公爵家では聞いたことは無かったが、どうせ同じ狭い学院内にいるのだから先に話してきたのだろう。

エレオノール様は、ぼくから見るとまだまだ可愛らしいものだが、坊ちゃん育ちの貴族では荷が重たいのだろうか。

さてソーンのクラスだがもう1人、目立つ人間がいた。

背は190センチあまりはあるだろうか。その身長のため細身に見えるが少年らしい体型ともいえる。

金髪というよりは黄金色といっても過言ではないやや癖のある頭髪に、鼻梁と唇の端麗さは名工の彫刻を思わせる。

しかし彫刻では無いと思わせるのが、その双眼でとび色の眼には力強さを感じる。

最初の自己紹介のときだ。

「俺の名前はジークフリード・フォン・ヴィターハウゼン。よろしく」

ゲルマニア人だとはつきりわかる名前で女性の半分は興味を失ったようだが、それでもその美貌に見ほれているクラスの娘はいる。

そういえばこの魔法学院は外国人も受け入れているんだよなと思っただが、自分とは単なるクラスメートで終わるだろうと思っていた。

魔法学院での食事はラ・ヴァリエール公爵家でだされるものには劣るが実家以上には美味しい。

今まで何回かは、トリスタニアで食事をしたこともあるが、入ったことのある店よりもはつきりと美味しい。

魔法学院では腕の良いコックをやとっているんだなと思う。

噂話で聞こえてくるのはコック長よりもマルトーというコックの腕が良いとかいう話も流れてきた。食べ物については、貴族といえども興味をもつんだな。授業はというと基本から始める。実際に魔法を使っている時のオーラには最初興味をもっていたが、コモンも四大系統の魔法もきちんと判別できる。

ルイズの家族から失敗したという爆発する魔法の発動時のオーラはあきらかに他人と異なる。もしかしたら虚無なのだろうか。

転生をつかさどったブリミルを思い出すとあまりにイメージが違う。

ルイズの失敗魔法の正体を探るのも魔法学院に入った理由のひとつでもある。

原因がわかれば、魔法を成功させられるかもしれないからな。

普段の魔法学院生活の環境は、良いのだがまわりの反応が微妙だ。同じクラスの人間は男性陣も女性陣も、なんとなくさげられている感じだ。

最初の挨拶は次だった。

「ぼくの名前はジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。風のスクウェアです。よろしく」

他人にはつきりとスクウェアだと、自己紹介したのがまずかったのかな。

まあ、男友達は特に期待していなかったが、女性陣からもさげられているというか、今のところは遠巻きに観察されているといった感じかもしれない。

そんな雰囲気の中でジークフリード・フォン・ヴィターハウゼンが近づいてきた。

「やあ、ミスタ・ワールド」

「やあ、ミスタ・ヴィターハウゼン。ぼくに何かようかい？」

「せっかくトリスティン魔法学院に入学したのだから、皆とお近づきになればと思ってるね」

「そうか。じゃあ、ぼくのことにはジャン・ジャックと呼んでくれ。かわりにミスタ・ジークフリードと呼ばせてもらっていいかな」

「ミスタなんていらないし、ジークフリードも長いからジークでいい。ジャン・ジャック」

「じゃあ、よろしく。ジーク」

「おお、ジャン・ジャック」

ジークは他にも、声をかけているようだ。

ぼくもジークを見習って行動してみるべきだろうな。まだ時間はある。ゆっくりやっていけば良いだろう。

それから、驚いたことがある。

この魔法学院の宝物庫の見学会で『破壊の杖』を見たときに思わず「ロケットランチャー？」っといいそうになったところだ。

ゼロ戦があつたのだ。他にも何かあつても不思議は確かに無い。

転生してきている者は今のところぼくたちの一族以外は知らないが、転生よりも実際に物がくる方がしっくりくる。

このことを聞いてみるかどうか、少し考えておくか。しかしながらぼくが前世の記憶をとりもどした時に、プリミルとの話をしたら父さまは

『あまたの命が聖地に光臨せし始祖に与えられた』

という噂がたまに流れているという話をしてくれていた。

このあたりは父さまか母さまに相談か。手紙でも書いておこう。

入学式から1週間ちよつとあとの虚無の曜日。

本来なら休みの日であるが、朝食の席では本日の晩におこなわれるスレイプニールの舞踏会の話題でもちきりだ。

「お前はいつたい誰になるんだ？」

「当ててみるよ！」

そついう会話があちこちで交わされている。

この舞踏会は、ちよつとばかり不安がある。

理想の自分というのに化けるようだが、前世の影響で明らかに日本人とかになつたらどうなるんだろうか。

そつなつたら変わり者扱いかな。服装だけでもこちらの世界風になつてくれと思いつつ舞踏会をまっていた。

夕方になりダンスホールの入り口に宝物庫からだされた”真実の鏡”で仮装するためにならんでいる。

入る順番は自由だ。これは相手が推測するのを予防するための措置だろう。

さて何に仮装するのかわからないようになってくるカーテンをくぐつて1枚の布がかけられている”真実の鏡”に立つ。

横にたっている仮装した女性の先生から

「いいですか？ 理想の姿を思い浮かべるのです。

ごまかしてもしかたがありませんよ？

この鏡は心の深い部分まで覗き込み……、あなたをその姿にしてしまふのです。

心の準備ができれば、その布をお取りなさい」

心の準備を整えて「はい」と答えてかけられた布を持ち上げた。

美しい虹色に光る鏡面が現れる。

そこに映った自分の姿が、鏡から溢れる虹色の光に覆いつくされていく。

溢れる光で視界が途切れ、不意に光は消え鏡に映った姿は、アトス様だった。

アトスさまは土のトライアングルで、魔法衛士隊では小隊長になっている。

ただ、魔法衛士隊というところではなくその親分肌みたいなところがあつて、自分に持ち合わせていない部分を感じるのだ。

ちなみに父さまは副隊長にまでいつているが、身近すぎて自分の理想とはなりそうにない。

ホールに入るとそこには色々と仮装した人々がいた。

生徒たちが集まると、学院長のオスマン氏が壇上に現れた。

「えー、諸君。改めて挨拶じゃ。

本日は、新入生との親睦を深めるための舞踏会じゃが、匿名性をも帯びている。

それは、家柄、地位、国籍、爵位にとらわれず、

この学院ではみな平等じゃということを、強く印象づけるためじ

や。

でなければ、いつしよに机を並べて学ぶことは不可能じゃからな。相手が誰か知りたかったら、こちらから丁寧にな乗るのじゃ。

姿や相手の身分にとらわれず、堂々と名乗るのじゃ。

それが貴族を貴族たらしめる礼節の1歩だからじゃ」

集まった生徒たちは一斉に頷いた。

「さて……、では今回の趣旨じゃ。よいか、きみたちは理想の姿に化けておる。

その理想の姿に近づけるよう、その理想に負けぬよう、新しい学年で学んでほしい。

立派な貴族たれ。以上じゃ」

拍手がわいた。

オスマン氏は真面目な顔で退出し、次に鏡で化けて入ってきた。若い女性の姿で、

「オスマンじゃ」

まさか、オールド・オスマンとも呼ばれる人の理想が女性とは……

” 真実の鏡 ” で仮装する前の不安が馬鹿みたいに思える。

それとも、” 真実の鏡 ” には別な使い方でもあって、オスマン氏なりの気遣いなのだろうか。

「では、舞踏会を楽しみたまえ！」

その声を合図に音楽が奏でられ始め、舞踏会が始まった。

とりあえず近くにいる多分女性、先ほどのオスマン氏を見ていると

ちよつと自信は無いが踊りを申し込む。

ラ・ヴァリエール公爵家での晩餐会での経験上、相手の踊りがうまければ爵位が高くそうでなければ爵位が低い可能性が高くなる。そうやって、何人かの女性と踊っているとなんとなくしっくりと会う女性とあえた。

こういうのはチャレンジしてみないと。さて名前を名乗ろう。

「貴女の踊りはぼくと会うようです。

ぼくの名前は、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。

お名前を聞かせていただけますか」

相手の女性は、一瞬驚いたような顔をしたあと、

「私の妹と婚約しているのに、相手に名前を尋ねるの？ ジャン・ジャック」

「エレオノール様ですか？」

「そうよ。母さまに知られるとどうなっても知らないわよ。

もう女性に声をかけるのはよしなさい」

つと小声だが強い口調でいわれた。

確かに何回も一緒に踊っているから会う感じがしたわけだ。

離れていくエレオノール様を見ながら

「ルイズ嬢との婚約って冗談じゃなかったのか？」

つと呟いた。

第四話 トリステイン魔法学院での日々（後書き）

しかし魔法学院っていったい何の勉強をしているのやら。

第五話 二つ名は……

スレイプニールの舞踏会の翌朝、アルヴィーズの食堂でエレオノール様をつかまえることができた。

エレオノール様をつかまえたのは良いが、こちらから質問するより先に

「やっぱり、スレイプニールの舞踏会では中々良い相手は見つからないわね」

「まさか、エレオノール様とは気がつきませんでしたよ。あの格好って」

「良いからその姿は忘れなさい。

それよりもあの後、自分から自己紹介とかしていないでしょうね」

思っていた本題に入れる。

「えーとその件なんですけど、ルイズ嬢とぼくの婚約って冗談だったじゃないのですか？」

「ふー！ あのね父さまと母さまが承諾していて貴方にも帰りの馬車で

認めていたと聞いているわよ。それを今さら反故しようとしているの？」

「……帰りの馬車？」

ふと悩む。何かあったかなと思ったら、

「あつ！ それ、大きな勘違いですよ！」

「どこが？」

「えーとですね、婚約のことを何も聞かされていなかったんですよ。ところがラ・ヴァリエール公爵からその帰りの馬車で

『娘を今後ともよろしくな』

と言われたので、単純に舞踏会の時のようにルイズ嬢の面倒を見てくれみたいな

意味に受け取っただけですよ。

そのあと父さまからは冗談だと聞かされていたので……」

「それは本当なの？」

「ええ、エレオノール様」

「父さまの伝え漏れね……」

貴方のお母さま経由で私の母さまに相談してみるといいわ」

「ありがとうございます。こんな朝から呼び止めてしまってますみませんでした」

「そうね。貴方が伯爵家だったら私との婚約だったかもしれないのにね」

「はっ？」

「気にしないで」

ぼかんとしている隙に、エレオノール様はさつていった。まあ、どちらにしる懸念事項はひとつ解決しそうだ。

そんなので、だいぶ気分が楽になっていたところ、今日の授業も終わって部屋への帰り支度をしていたら、教室の中で決闘騒ぎが勃発していた。

聞いているとどうも昨晚のスレイプニルの舞踏会で、ジークことジークフリード・フォン・ヴィターハウゼンが隣のクラスの女の子とくつついてしまったのが問題らしい。

その女の子の幼馴染が、水の名門モンモランシ家のモンタンだ。たしかモンタンは水のラインの上位ぐらいの力量はありそうだが、ジークの方はまだ底が見えないんだよな。

決闘が禁止なのは教師からもう知らされているから、教師たちに気がつかれないようにはやめにヴェストリの広場で決闘をおこなうということになった。

普段ならかかわらなかつただろうが、昨晚発覚した自分の問題がなくなつたので興味の方が優先してしまつたのだろう。

結局はヴェストリの広場についていつて見学をすることにした。決闘なんていつても、相手の杖を落とすだけのお遊びみたいなものだ。

そんなに物騒なことにもならないだろうという思惑もあつたのだが。

「作法どおりに名乗りをあげよう。僕の二つ名は『流水』。流水のモンタンだ。

これで勝つたら約束通りその娘は返してもらおうよ」

「女性を賞品扱いにするつもりでもないのだがこれもきみたちの作法なのだろう。」

それに従うよ。おれの二つ名は『風火』。風火のジークだ」

取り合いになっっている女の子はもうその言葉に酔っているようだ。半分ぐらいあほらしいと思いなから決闘の方を見ると、モンタンは普通にタクト状の杖だが他方のジークは珍妙だ。

左手にタクト状の杖を持ちつつ右手には両刃の剣状の杖だ。

同時に複数の魔法を使えるものは確かにいるが、知っている限りでは通常杖は一つ持っただけだ。

器用なヤツだなと関心してみていた。そうするとジークが、

「いつまでも、こないのかい。こないならこちらからいくぞ」

「減らず口もそこまでだ。今からいくさ」

モンタンが呪文を唱えて杖の先に何本もの鞭となつて具現する魔法『ウィーター・ウィップ』をもつてジークにかけよる。

水系統の魔法では、通常は近接戦から中距離戦になる。悪くない選択だ。

ジークはその場に立ち止まったままだ。何かをしかけるといふ気配も感じない。カウンター狙いか？

モンタンがかけよりつつ『ウィーター・ウィップ』の鞭を伸ばしてジークを包み込むように近づけ四方から襲いかかった。

瞬間ジークは右後方に下がりつつ右手の剣状の杖を包みこむ鞭に振りつつ左手の杖を前方に振る。

剣状の杖が『ウィーター・ウィップ』の鞭にふれた瞬間にぱっさりと鞭が切れてそこより先からもオーラを感じなくなった。

いや、そもそも剣状の杖から魔法発動のオーラさえ感じない。何が起こった？

つと考える間もなく、ジークの左手の杖からは赤い矢のような物が

でていた。

そちらの方からはコモンのオーラを感じる。

その矢のような物がモンタンの杖にあたり、杖を跳ね飛ばす。

矢のように小さいだけで、あの形状と『ウィーター・ウィップ』をさけるような動きは『マジック・ミサイル』だ。

そうして、ジークがモンタンのそばにより剣を目の前につきつけていた。

一連の動きに一見無駄な動きはあるようにみえるが、それをおぎなうてあまりあるすばやさだ。

そうしてジークが、

「さて、杖も落ちたことだしここで決闘は終わりだよな」

余計な一言を言っている。

だからからみてもジークの完勝だろう。少々不可思議な部分はあるが、そうすると、モンタンがまわりを見渡して助けを求めるようにまわりを見回している。

無駄だろうと思っていいたらモンタンが、

「こいつはトリステインの貴族を馬鹿にしているんだ。頼むこいつをなんとかしてくれ」

最初の趣旨と違うんじゃないのかと思っていいたらモンタンの視線はこちらを見ている。

まわりの連中もぼくの方をみている。

心の中では『お前らは遠巻きにしてたくせに』と思いつながらぼくは突き放すように、

「この決闘は、モンタンとジークの決闘じゃなかったのか」

「たしか風のスクウェアだったよな。」

「一度手合わせ願いたいと思っていたんだ。ジャン・ジャック」

ジークという予想外の方向から予想外の返答がかえってきた。

そうすると、まわりの視線がこちらに期待をおびてくるのがわかる。いや、ぼくはそんな戦闘民族じゃないしと思いつながらふと思いついた言葉をつむぎだす。

「校則では生徒同士の決闘は禁止されている。

本来ならとめるべきだったかもしれないが

本人同士の問題だと思って見てただけだよ」

「いや、ミスタ・モンタンは、おれがトリステイン貴族を馬鹿にしているって言うてるし、

それにこの時間ならまだ学院外にでられるだろう。

そうすれば、トリステイン貴族とゲルマニア貴族同士の決闘だ。

たしか、トリステインでは外国人貴族との決闘を禁止した法律は無かったよな」

そう言われてみれば、そんな気がする。

まわりからは、ぼくにたいする期待の目で輝いている。

せっかくルイズ嬢の問題がかたづきそうだと思っただらこれかい。

ここでこの決闘を断るとトリステイン貴族の名誉を傷つけたとか悪評が広まるんだろうな。

そうするとせっかく魔法学院にきて妻の候補を探すという意味が無い。

「わかった。魔法学院外で行おう。」

しかし、このヴェストリの広場と違って郊外にできれば広大な空間が広がっている。

しかもぼくは風のメイジだ。
空間が広ければ広いほど風のメイジが有利だというのは
わかっているんだろうね。ジーク」

「おれの二つ名に『風』がまざっているんだ。
それくらいは知っているから心配するなよ。ジャン・ジャック」

逃げ道は思いつかない。不承不承だが魔法学院外に移動することに
した。

その移動最中にも気軽にジークは話かけてくる。

「色々なメイジと決闘を試してみたが、風のスクウェアというのは初
めてだ。

「楽しみにしているよ」

「そうかい。ところでその剣状の杖は、本当に杖かい？」

さっきの戦いで不自然なオーラの消え方がどうも気にかかる。

「おれは、これが杖だなんて言った覚えは無いぜ」

「ほー、そうしたら単なる剣かい」

ジークは、ニヤリと笑いを浮かべて答えない。

やはり何か仕掛けがあるわけか。

杖さばきの実力は、さっきのでもいいはわかった。

問題は、ジークの魔法の実力とあの剣状の杖の仕掛けがわからない
ことか。

移動の間に頭の中でシミュレーションしていつてみる。

かなり変則的な動きが想定されるな。接近戦は危険そうだ。
やはり距離をとるのと、さっきの剣状の杖の謎解きが重要か。
先ほどのヴェストリの広場から魔法学院の外にでて、衛兵から見えない位置まで移動する。

約20人ほどか。

相手の実力がわからないので、全力をつくすことになるかもしれないから、クラスメートたちには100メートルほどさがってもらった。

「さて、先ほどはこちらの作法にのっとって名乗らせてもらったが、俺の二つ名は『風火』。風火のジークだ」

「ぼくの二つ名は『閃光』。閃光のジャン・ジャック」

自分でこの二つ名を言うのは恥ずかしいがこのトリスティンで二つ名があるのは普通だからな。

何せ日本人とくらべてファースト・ネームのバリエーションが少ない。

そのせいで二つ名なんてある。

たしかに軍杖の取り扱いの早さと呪文の詠唱の早さも普通より早い
が、呪文の詠唱はインチキがある。

理由はよくわからないが、別にルーンに従って呪文をとえなくて
もいいのだ。

音節を短縮できるなら同じ意味の日本語でもかまわない。

ちなみに父さまはマネをしてもできなかったが母さまはできた。

どうもルーンでも日本語でも具体的なイメージがその言語ででき
れば良いらしい。

これがわかると異端審判ものなのでオリジナルの呪文ということに
しているが、ルーンと日本語のちゃんぽんで魔法の詠唱をしている。
元々早い口述詠唱を使えるのに、音数が少なくなるので早くなると

いう。

まあ、コモン・マジックでも四大系統でも類似の魔法があることからやってみてきたというだけなのだが。

15マイルほど離れたところから、先ほどの剣状の杖の謎を確かめるために、コモンではなく風系統の呪文で不可視な『マジック・ミサイル』を放つ。

狙いは相手ではなくて、剣状の杖だ。

剣状の杖に『マジック・ミサイル』が相手の杖についての瞬間にオラが消えたことを確認した。

杖を狙っていたのを感じていたのだろうかジークが、

「ほー、この剣状の杖いや剣に気がついたか。けど対策はあるかな？」

「ああ、普通なら手が無いな。けれどもぼくも風のスクウェアだよ。風が最強といわれている所以をお見せしよう」

そういつつ、ジークの攻撃を警戒して少し下がるが、あいかわらず攻めにはこない。

その間に風が最強だと噂される魔法をみせる。

それは『風の偏在』の魔法。1種の分身ともいえるがその場でもっている精神力も魔法も技術力や服装まで全て複製される。

今は自分を含めて2体までしかだせないが、ジークがスクウェアでなければこれで十分はずだ。

そうしてメイジ殺しが持つこともあるという魔法を吸う剣に対抗してできた魔法である『エア・ニードル』を『風の偏在』が見せ付けるように軍杖に発動させた。

そうした瞬間、ジークの気の質が変わった。

ぼくの背中にゾクツとした感じが走る。

そう、時々練習相手になつてくれている魔法衛士隊員が本気にさせてしまった時よりはさすがに弱い殺気を向けてきたのだ。多分、何人かは殺している。そんな感じの殺気だ。

しかし、それも1秒とたたずやんだ。ジークの殺気が消えたのだ。

「いやー、参った。まさか『風の偏在』まで使えるとはね。今日は負けを認める」

「そうかい。ジーク」

「ああ。ジャン・ジャック」

「皆もジークが負けたと認めたから良いだろう」

まわりに声をかけてみる。

突然の幕切れに声もでないクラスメートたちだが2人3人と魔法学院入り口の方へと向かう姿が見受けられた。

「世の中は広いな。確かジャン・ジャックは15歳だったよな。

すでに『風の偏在』まで使えるとは思っていなかった」

そうは言うが決して負けた目をしていないジークを見て半信半疑ながら聞いてみた。

「もし、ジークが本気できてたらどうなっていた？」

「トリステイン貴族がそんなことを聞いてくるとはね。

見直したぜ。無傷とはいえないが負ける気もしなかったな。

そんなことになったら退学だろうけどな」

「そうか。正直に答えてくれてありがとう。ジーク」

ぼくの気分は沈みこむ。

この魔法学院にきたもうひとつの目的は、軍人になる覚悟が整っていなかったのでそれをひきのばすため。

軍人になるということは人を殺すこと。

ジークはそんな覚悟を持ちつつも決闘をさけたのだろう。

ぼくにそんな覚悟が本当にできるのであるだろうか。

第五話 二つ名は……（後書き）

領地が平和だったので、このワルドの中の人々は軍人的な方向には鍛えられていません。

第六話 決闘の後

ジークとの決闘の翌朝、アルヴィーズの食堂ではいつもとは違う視線がただよってくる。

それとともにぼそぼそと噂話が聞こえてくる。

昨日の決闘の話が広まっているようだ。

この風系統の明示の特徴である耳のよさが今は恨めしい。

普通のトリステイン貴族なら勝ったのだから良い話なのだが、昨日の気分とこの後におこることを想像すると聞きたくない内容だ。

ジークの方はというと昨日の決闘の元となったモンタンの幼馴染の娘とは違う娘と話ながら食事をしている。

まめというかよくすぐに次の娘を見つけられるものだな。関心する手の早さだ。

盗み聞きするのも、なんだからそっちに注意は向けないでとっとと食事をすませてから教室に向かうことにした。

部屋に一回もどって勉強道具をもってから教室につくと、すでに20人ほどのクラスメイトがいた。

そうすると、普段はあまり話さなかったクラスメイトたちが

「昨日のあれは、風の偏在っていうのか？」

「風のスクウェアってすごいんだな」

「あのゲルマニア人に負けを認めさせるなんて、スカッとしたぜ」

「本物の風の偏在って見たのは初めてよ。もう一回見れるかしら」

よってきては色々とピーチクパーチク話し出す。こいつらの脳天気

さにはあきれ物も言えない。

ちよつと考えて口を開こうとしたら「おい、あいつだ！」との声で教室の入り口の方を見るとジークがいる。

そこで、笑い声がもれてくる。

ジークの両頬に見事な手形が赤くのこっているからだ。

今朝の食堂では女の子と雰囲気がよさそうだったのに何か失敗したのか？

それにしても両頬とはおかしい。

ジークに声をかけようとしたらその後からもっとも見たくない人物を見つけた。

風系統のそろそろ退職すると噂されている先生だ。

「この教室にミスタ・ワールド、ミスタ・ヴィターハウゼンがいて聞いているが、

今いるかね」

ぼくはあきらめて、

「はい。先生」

ジークは振り向いてから一旦おくれて、

「なんですか？ 先生」

「昨日、決闘をしたらしいな。ちよつと学院長室まできてもらおうか」

「そうすると、ミスタ・モンタンは？」

「ミスタ・モンタン？ ミスタ・モンモランシだね。後にいるよ」

そういわれて見てみると先生の後にはモンタンがいる。
やはりあれだけアルヴィーズの食堂で噂になっていたのだから、風
系統の先生の耳からは逃れることはできなかつたようだ。

まったくこのどいつだ。噂を流したやつは。
さて昨日の決闘理由で逃げられるかなと思いつつ先生の後について
いく。

モンタンはとぼとぼと、ジークは赤く手形が残った頬をさすりなが
ら。

なんとなくジークに理由を聞いてみたいが、目の前にいるのは厳し
いので有名な先生だからな。

余計なことを話をするのはよしておこう。

そうして、学院長室に入る手前で、学院長室からは

「きゃー！ またですか。

そのネズミと視覚共有はやめてくださいって、何回言えばわかる
んですか」

「これ、これ、老人の楽しみをうばうものじゃないぞ」

「今度やったらやめます！」

声が聞こえてきて学院長室から20歳前後のスカートをはいた女性
がでてきた。

その女性は外にいるぼくたちに気がついて、学院長室の中へ誘導し
てくれた。中々できた女性だ。

しかし、これが噂にきいていたオールド・オスマンの覗き癖か。

はあ。なんでこういう人物を学院長にさせているのだろうかと思つ。
ましてやオールドだなんて敬称までつけざるをえないのだろうか。

昔の名誉の名残なのだろうか。

今回呼び出されたこととは無関係だな。

風系統の先生は授業があるからということ、オスマン学院長と女性、多分泌書の女性とぼくたち生徒3人が残っている。

「さて、今回君たちにきてもらったのは、校則で禁止されている決闘をしたからじゃ。」

それでよろしいかね」

とりあえず様子見を決め込むことにして、特に返事もしないでいると、

「ふむ。そうか。全員認めるのじゃな。それでは、まず経緯を聞かせてもらおうか」

「ええ、ぼくが、そのゲルマニア人にトリステイン貴族を馬鹿にされたことから

決闘を申し込みました」

あれ？ 本当かとジークの方を見ると特に微動だにしていない。ただ頬の手形がその美貌を台無しにしているが。

「これ、その君。国籍にとらわれずにと、

一昨日のスレイプニルの舞踏会で言ったばかりじゃろ。

それから、そちらの、えーと、髪の毛の黄金色の……」

「ミスタ・ヴィターハウゼンですわ」

「そうそう、ミスタ・ヴィターハウゼン。

トリステイン貴族を馬鹿にという発言を認めるのかね」

「ええ、異論はありません」

「そうか。それで、ミスタ・モンモランシとミスタ・ヴィターハウゼンとで決闘したのじゃな」

「ええ、認めます」

少し遅れながら、多少とまどっているようにも見えるがモンタンも

「はい」

「それで、ミスタ・ヴィターハウゼンが勝ったので、その金髪の君……」

「ミスタ・ワルドですわ」

「そうそう、ミスタ・ワルドがさらに続けて決闘したのじゃな」

「えーとお言葉ですが決闘は魔法学院内で行ったわけではなく、トリステインとゲルマニア貴族同士ということで決闘したのです」

まずは建前を言ってみる。

そうするとオスマン学院長が目をむいて怒鳴った。

「ばかもの！ 君たちはわが魔法学院の生徒じゃ。

学院の中であろうが外であろうがそのようなものは関係ないのじや！」

やはり、駄目だったか。

落ち着いて考えれば生徒なんだから魔法学院の中も外も関係ないん

だよな。

昨日はぼくの下心で流されての決闘だったからな。

「さて、他にいうことはあるかの」

「おれは特にありません」

「ぼくもありません」

「僕もです」

「そうしたら、本日は部屋で謹慎じゃ。その間に反省文を書くのじや」

そうして部屋に戻る途中だがどうやら自宅には言われなみたいなので一安心。

父さまはこれぐらいでは何とも言わないはずだが、母さまの言動の予測がつかない。

一見教育ママ風だったり、そうかと思うとベタベタと子ども離れのできない親のように接触してきたりと。

3人で寮への謹慎での帰りがてら、ジークへ気にかかっている頬の手形のことを聞くことにする。

「そつえばその頬の手形はどうしたんだ？ ジーク」

「ああ、なんて不条理なんだ。聞いてくれよジャン・ジャック」

「いや聞くからさ」

思わず苦笑していたかもしれない。

「いや今朝は食堂でさ、アニーと話をしたらさ」

「アニーって？」

「シゲルのクラスの女の子だよ。そうしたらドミニクがきて……」

「気安く、ドミニクって呼ぶな！ このゲルマニア人」

「まあまあ、さっきの学院長室でのことを反省していないのか？
モンタン。それでそのドミニクがなんで私以外の女性を誘っているの？」

「って聞いてくるのさ」

ふむ。なんとなくわかってきた気がする。

「それって、昨日のモンタンとジークの決闘の理由が
トリステインとゲルマニア貴族同士にかわっていたからじゃない
のか」

ぼかんとした、ジークの顔が見受けられる。
モンタンの方はしまったという感じだ。

「いや、わけがわからないうちにドミニクから頬を叩かれて、
アニーからも私以外とつきあっていた人がいたのねって頬を叩か
れてね」

「それは、女性のトリステイン貴族の特性を知らないからだよ」

ぼくは苦笑した。そうするとモンタンが、

「そうさ。僕の幼馴染のドミニクがゲルマニア人ごときにそうそうなびくわけがない」

モンタンの思考もこりかたまっているなと思いつつも、

「まあそういうわけだ。本来ならドミニクの取り合いということにしておけば

ドミニクも素直にひいていたかもしれないのにね。

トリステインとゲルマニア貴族の決闘に話をすりかえたからだよ」

「えーと、そうするとモンタンの話にのってジャン・ジャックと決闘したのが

今朝の頬を叩かれることになった原因なのか？」

ぼくとモンタンが同時に首を縦にふる。

「なんてこつたい」

そんな話をしているうちに寮の部屋の入り口にきたので、

「じゃあ、またあとでな」

そう言っつて部屋に入った。

さて反省文なんてどう書くのだったかな。

前世みたいにネット環境でもあれば良いのと思いつつも、四苦八苦してたらドアからノック音がする。

はて？ 謹慎中だからメイドが昼食をもってくるはずだがそれにし
ては早いなと思いつつも

「ドアならロックはかかっていないから自由に入れるよ」

「おお、そうか」

つて、入ってきた。

「おい。一応謹慎中だぞ。それに反省文はどうした？ ジーク」

「まだ、そんなもの書いているのか？ ジャン・ジャック」

「まだって、もう終わったのか？」

「ああ、書きなれているからな……」

どうも、しまったという顔をしている。

「もしかして、ジークって、ゲルマニアの首都……」

「ヴィンドボナだ」

「そのヴィンドボナの魔法学院にいたことがあるんじゃないのか？」

「まあ、そうだな」

「それで、そこでも、反省文を書かされていたと」

「その通りだな」

ニヤリと笑っているジークがいた。

なるほど、決闘の手際とか、適当にあしらうすべとか心得ているわ

けだ。

「そういえば、ジークの年齢って何歳だ？　ぼくの年齢は15歳だ
って知っていたよな」

「ああ、17歳だ」

「昼食とかはどうするつもりだ？」

「もうチップと持ち運び先を書いておいてあるから、
こっちにメイドが運んでくれるはずだよ」

「ぼくに追いだされることを考えていなかったのか？」

「そういえば、そういうこともありえるな。けれど、追いつめるの
か？」

ちよっとしゃくにさわるがジークに興味もある。

「いや、追いつめはしないだろうね。むしろ歓迎するよ」

「そうこなくっちゃ。しかし、ジャン・ジャックも変わっているな。
おれは追いつめられるかもなと思ってきたんだけどな」

「へー、どうして」

「いや、トリスティン貴族って、ゲルマニア貴族を見下していると
ころがあるだろう」

「言われてみれば、そうだな。
ただ、魔法学院内だし留学生を受け入れるところだから、
ぼくはそこまで気にしないけれどね」

「それが変わっているんだよ。男どもはまともに話をしようとする
しない。」

せいぜい女の子が話し相手になってくれるくらいだ」

「ゲルマニア貴族が嫌いつてもあるだろうが、
ジークの顔が良すぎるのもあるのじゃないのか。嫉妬とかで」

「そういうお前だって、美少年って言われそうな顔だろう」

「実際、昨日の決闘までは男女ともに遠巻きに観察されていたさ」

「自覚はあったんだ」

「そっちは無かったんかい」

「いや、おれ実際に男前だし」

「自覚があるなら、もうちょっと気をつけろよ。」

トリスティン貴族の女性は嫉妬深いといわれているぞ。

二股なんてかけたらどうなることやら。

頬をぶたれただけでよかったという目にあうらしいぞ」

「おいおい。ゲルマニアでも聞いてたけどそんなんかい」

「ああ聞いた中では、全員からワインをぶっかけられたとか
スープをかけられたとかって聞いた事があるな」

そう言っているとまたドアからロック音がする。
まだ昼食時間には早いはず。ジークに目配せをしようとしたらずで
にサイレントをかけて衣装棚に隠れようとしている。

「誰だい」

「メイドです」

「まだ昼食の時間には早いと思うのだけど」

「いえ、緊急のお手紙を預かっておりまして」

「緊急？」

「はい。緊急とのことですよ」

「ドアならロックはかかっていないから入っておいで」

ドアがあいて見知らないメイドが入ってきたがそつなく手紙を渡して
さつていった。

さてどんな手紙だろうと思って開けようとしたらジークがそばにき
ていた。

「おいおい、人の手紙を勝手に覗き見るなよ」

「ああ、悪い」

手紙は実家の執事であるジャンからだ。

中を読むと自分の顔から血の気が引いていく感じがする。

ジークからは、

「おい、どうした？ ジャン・ジャック」

「ああ、母さまが倒れたらしい。

今日明日の命かすでになくなっていかもしれない。すぐにいかなきゃ」

「おい、まて、あわてるな。まずは、学院で許可をとっていけ」

「ああ、そうだった。悪い」

ぼく自身が思っていたよりもぼくは母さまのことを気にしていたらしい。

よく考えると前世からきちんとした記憶のある限り身近の人間の死亡は初めてかもしれない。

そうして、魔法学院をあとにした。

「あれが、昨日決闘した、ジャン・ジャックか？ 思ったよりも精神面が弱そうだな」

ロックもかけられていないドアと嵐がさったあとのような部屋に一人取り残されているジークがいた。

第六話 決闘の後（後書き）

現時点でのワルドの中の人の精神はちょっと日本人よりで弱いみたいです。

第七話 母さまの死と

実家の執事の手紙を見てから馬にのってとばしたのだが、馬の限度を考えていなかった。

馬がばてて移動がゆっくりになってしまったのだ。

ここにきて初めてもっと早く実家に着く手段があったのにと気がつくが、馬をおりて手綱をひきながらとぼとぼとしばらく歩くはめになった。

少しよりみちをして村で馬を借りればよかったのだ。

もう後戻りをするにしても遠すぎる。

それだけあわてていたのをようやくと自覚したが、結局、実家についたのもう真夜中になろうとしていた。

実家についたところで出迎えてくれたのは執事のジャン

「母さまはどうしているの？」

と聞くと首を横に振られた。

そうか、遅かったか。

「奥様のところまで一緒にします。坊ちやま」

「場所さえ教えてもらえば、自分で行ける」

「奥様の寝室でございます。坊ちやま」

と、執事のジャンがいったので早速向かった。

寝室に入ると母さまが横たわっていた。

死んだようには見えないのに。

ゆっくり近づいてみるが風系統のメイジであるぼくが耳をすましても、母さまから呼吸音はおろか心臓音も聞こえない。母さまの手をとってみるが硬い。

動かないというよりは、これが死後硬直という奴かなとかすかに疑問に思う。

いつの間に来ていたのか執事のジャンが、

「よろしいですか。坊ちやま」

ぼくは振り返らずに、

「何かあるのかい？」

「旦那様の到着は明日になられるとの連絡がございました。

奥様の体には固定化と硬化の魔法をかけておりますので、

あまりさわらないほうがよろしいかと」

固定化は死後の腐敗を防ぐのに行うことがあるのは聞いたことがあるが硬化までかけておくとはね。

「それと奥様より、お預かりしたものがあります」

「えっ？」

つといつて振り返る。

そこには、手紙が差し出されていた。その手紙を受け取りながら

「これを母さまが？」

「そうです。それから食事の用意が整っておりますので、

「気分がおちつかれましたら食堂にいらしてくださいませ。坊ち

「やま」

「ああ、ありがとう」

手紙をあけてみると書いてある日付は入学式の前。

内容の1つは予測できたもの。もう1つは予測外のものだった。

1つは、母さまの嫁入り道具としてもってきた、羊皮紙のかたまりだ。

半分は日記みたいなものだったり文字が達筆すぎるので母さまとぼくと2人でも読めないものもあるが、それを父さまにいつて譲ってもらいなさいというもの。

母さまとの思い出もあるが、父さまには読めないし子どもはぼくしかいないから遅かれ早かれぼくのものになるのだが、これは一種の遺言状なのだろう。

もう1つは、全く予想もしていなかったことだ。

「あなたの父さまは強そうに見えても結構弱い人なの。」

あまりわがママを言わないでワルド子爵家を護ってあげて」

ふー、母さまにはかなわないな。

もしかしたらぼくがゲルマニアに行く可能性も感じていたのか。

しかし、あの父さまが弱い？

魔法衛士隊副隊長でその上、部下をある程度自由にさせながら何かあってもその部下をまもっているというイメージしか伝わってきていないのだが。

ぼくの目の前では見せていなかったところがあるのだろうか。

母さまを見ながらぼんやりとしていたが『グー』っとお腹の虫がないた。

そういえば、昼食も夕食もとっていなかったことをようやく思い出す。

前世では仕事の都合で時々食事を抜いていたが、こちらの世界では、抜いても1食だったよなと思ひ出す。

たしかにこのままでもどうしようもないと頭の中の冷静な部分
が言っている。

このまま、徹夜明けで父さまと会うのはこちらの流儀ではなかった
な。

前世の時はどうかよくわからない。

結局、食堂に行って軽く食事をして眠ることにした。

メイドのオランプも明日が早いだろうから、部屋についてこなくて
良いと告げて。

自室のベッドに入ってみたが、精神的に興奮しているのかそれとも
参っているのか眠れない。

母さまのことを考えていたら、そういえば死因を聞いていなかった
なと思いつく。

やっぱりまだ頭の中がパニック状態にあるみたいだ。

わがままかー。ルイズとの婚約解消の話をするのもわがままなのか
な。

ワルド子爵家を護るという意味ではラ・ヴァリエール公爵家と縁を
強くしておいた方が良いのはわかる。

頭ではわかつているのだけれども今は5歳の幼子だよな。

しかもエレオノール様と話した感じではこの婚約をラ・ヴァリエー
ル公爵家も悪い風にはとっていないみたいだし。

穏便に解決するとしたらルイズ嬢が大きくなって向こうから婚約解
消を申し込んでくるぐらいか。

魔法学院での生活が結婚相手を見つげる場所であるのは暗黙の了解
事項なんだけれど、さすがにエレオノール様にも忠告されたことだ
し無理だよな。

だからといって今すぐにゲルマニアへ行くのも生活基盤が無いから無理だしな。

なんかそんな自分の未来像やらとりとめもないことを考えていたら朝日が入ってきていた。

そうしているうちに、実家にいたところからの、いつも通りのドアからノックの音がした。

「おきているよ。オランプかい？」

「ぼっちゃま。おきているのですね」

「まだ、ベッドの上だから、今から着替える」

「わかりました。お着替えを手伝います」

「いや、自分で着替えるから」

「魔法学院では、ご自分で着替えているとか。

自宅に戻ったときぐらいは、お手伝いさせていただきます」

そう言って入ってきた。

入られたら負けだ。ロックをかけておけばよかっただけなのに忘れていた。

まあ、オランプもメイジだからアンロックぐらいはできるけれどもそういう時は気をきかせてくれるからな。

パンツだけは自分ではいてあとはオランプにまかせる。そうして食堂では1人わびしく食事をする。

母さまも、こんな感じだったのかな。

そういえば、メイドがいるけれど、もう気にすることもなくなっていたな。

食事の後は、まず、執事のジャンと話す。

「そういえば、昨晚は聞き忘れていたのだけど、母さまの死因は何？」

「医者が申しますには、心臓の病とのことです。

ようやっと、普段の顔つきに戻られたようですね。坊ちやま」

「そんなにひどい顔をしていたかい？」

「ええ。今も普段と違って目が少し赤いようですが、

お顔は普段とあまりかわり無いようですね」

「そうか。ちょっと、考え込んでいたら眠れなくてね。昼食になったら呼んでくれ。

それまで母さまのところにいるから、もう下がっていいよ」

「わかりました。それから葬儀の手配は昨日のうちにしております。葬式は2日後になります」

「ありがとう。ジャン」

そうして母さまの遺体の前にしながら、昼食を1度はさんだ後に父さまがもどってきた。

「父さま……」

「いや、何もいわずともよい」

父さまはベッドの反対側に座って母さまを見つめ続けていた。そうしていたら父さまが、

「いつまでもこうしていたら妻も安心してヴァルハラにいけないうえあるう。」

「ここは離れて久しぶりに親子2人で話でもしないか」

「父さまがそう言うなら」

よく考えてみるとこの家にいる時はいつも母さまがいて刀さまと2人きりなのは少ないことに気がつく。

王都トリスタニアの家では魔法衛士隊の若い貴族がよくきていたしな。

メイドもやとつていたがメイドというよりはメイドとその夫の老夫婦が出入りする魔法衛士隊の面倒をみていたな。

話と言っても葬式のことと、それからのはじまったばかりの魔法学院のことや母さまの事とかが主だった。

夕食はいつもの通り無言ではあったが、そのあとはリビングの方で父さまと2人きりで話す。

アルコール付だがワインではなくてブランデーをもってきている。

使用人たちには「今日はもう特に良いから自由にしていなさい」と言う。

人払い。何か重要な話でもするのかなと思ったが、しばらくは普通にはなしていたがほろ酔い加減になってきたところで、

「お前には黙っていたが妻は元々心臓をわずらっていたのだ」

「えっ？ そんなそんな気配を感じたことはなかったよ。父さま」

「普段から杖を離していなかったらろう。しかもスクウェアなのにラインと称していたのも心臓発作がおこるたびに魔法で収めていた。」

だから普段はそんなに強力な魔法をふだんは使えなかったのだよ」

「……」

「本来ならお前を産むのも危険だとの話はあったのだが、横に水メイジの先生がいてくればだいじょうぶと言って産まれたのがお前だ」

「父さまは結婚前にそのことは知らなかったの？」

「結婚を申し込んだときにその話を明かされて断られたがやはり忘れられなくてな。」

その時は家を継ぐ者がいなくなっても良いと思ったのだよ」

「けれどぼくを産んだの？」

生まれたら前世の記憶をもった子が産まれるかもしれないのに？」

「おれが気がついたときにはもう下ろすには遅い時期だったらしい。妻から言われたよ。家を断絶させるなんていけませんってな」

「そうすると前世の記憶をもつかもしれない子が産まれるかもしれないというのはいは

父さまにとっては予想外だったの？」

「そうともいえるが、何、愛している妻の子どもだ。」

たとえ前世の記憶をもっていようが同じ血が流れている。」

ましてや血もわけていない魔法衛士隊の隊員達も
今となつては俺の子どもみたいなものだ」

「……」

「そんな妻だったからこそいつ死ぬかわからないからこそ

お前と一緒にいさせてたのだが、

まさか魔法学院へ入学したそうそうに亡くなるとはな」

そつか。母さまが、ぼくにベタベタしてくるのはそんな理由があつたんだ。

思い返せば、遠くにいかないどころか、普段は走ろうともしないし、完璧とはいえなくても貴族らしい立ち振る舞いをきちんとしてたよな。

王都トリスタニアでのパーティにでもそんなに悪い線では無いだろうと思っていた。

あらためて思うと、他にもありそうだな。

「ただなあ、お前が前世の記憶をとりもどした時に
ブリミルを名乗る神とあつたといつてたよな」

「うん。そうだね」

「聖地にいけば、何か妻を生き返らせる方法があるかもしれないと、おれは思うんだ」

「そういえば『あまたの命が聖地に光臨せし始祖に与えられた』とかいう噂が

あるって言っていたよな」

「ああ、まんざら嘘ともいいきれない。しかも不完全ながら前例があるしな」

「えっ？」

「一般的には秘密事項になっているが20年ちょっと前におこったエスターシユ大公の事件では不完全ながら何百人と生き返った事例がある。

中にはかなり完成していて、
人格は異なるが記憶は完全に再現されていた者もいたそうだ」

そういえば、母さまの手紙では『父さまは弱い人』とか書いていたな。

「なんだ。その人を疑うような目は。この話は公になっていないが本当の話だ。

私も入る事はできないが王宮の奥には

この事件の記録についても残っているはずだ」

「そうなんだ」

「ああ、ダングルテールの新教徒の話もその中に入っているはずだ。魔法衛士隊の隊長になればその中に入れる。

そうすれば、少なくとも妻への花むけにはなるであろう」

「それで、魔法衛士隊にのこっているの？」

「まあ、そういうわけでもないが、今となってはそれも目的のひとつだな。

それと、妻の遺体を腐敗させないままでいれば、生き返らせるか

もしない」

前世では考えづらいがこの魔法のある世界なら確かにあるのかも
れない。

ましてや自分自身でブリミルという神とあっているのだから。
そうして、その日は終わった。

葬式はラ・ヴァリエール公爵とカリィ又様や魔法衛士隊のこれる隊
員たち。それにあまりあったこともない親せきなどもきていた。

一見、母さまに見えるのは『スキルニル』という本物そっくりに化
ける魔法人形。

本物の母さまは、家の地下室に固定化と硬化の魔法をつかって安置
されることになった。

帰りの馬車の中。

「今日のワルド子爵の様子をみてどう思う」

「思ったより冷静でしたね」

「ああ、あいつのことだからもう少し取り乱しているかと思ってい
ただけどな」

「人は変わっていくものですよ。あなたみたいにね」

「そんな、昔のことをいうなよ。カリィ又」

「わたしのことをオカマ扱いにして、まだ覚えていますわよ」

そんな具合に馬車の中は……夫婦漫才が始まっていたが、それは別な物語。

第七話 母さまの死と（後書き）

『烈風の騎士姫』のシリーズと違う話になっていっても、この世界ではそういう事件だったということにしておいて下さい。

第八話 トリスタニアにて

そんなに長く喪に服するという習慣の無いこの世界では魔法衛士体副隊長になった父さまも今は長く自領に戻ってられない。

ぼくも使用人は気がつかつてくれてはいても、貴族であるぼくと距離をとって実質1人きりでいるようなもの。

それよりは気がまぎれる魔法学院へと虚無の日には戻っていった。ジークには、

「この前は、ひとり部屋に残していつて悪かったな。ジーク」

「あれだけ、あわてていたわりには、

今は気落ちしていないようで何よりだよ。ジャン・ジャック」

「まあ、そんなに気落ちしていても、母さまがよみがえるわけではないし、

ヴァルハラで心配するからね」

軽くジークにはわびをいれてから夕食をとってみれば、エレオノーラ様とばったりと会う。

「あなたのお母様の葬式にでられなくて、ごめんなさいね」

「いえ、公爵家の長女が生徒のうちから子爵家の葬式にでるのもおかしい話ですから」

「そういえばこんな時に話すことじゃないのだけどルイズとの婚約の話はどうするの？」

もしなんだったらわたしからそれとなく母さまに聞いてみるわよ」

「ありがとうございます。母さまも願っていたようですし、あらためてルイズ嬢との婚約は受けさせていただきます。なので、この前ご相談させていただいたことは聞かなかったことにしておいていただけますか」

「そうね……貴方がその気になったなら、わたしからも言うことはないわ。」

ただし、婚約を受ける気になったのなら、
今までみたいにルイズ嬢ではなくてルイズと呼んであげて」

「……そんなことして大丈夫なんですか？」

「ルイズ嬢のままにいる方が、距離をとっていると思われるわよ」

「そうですか。そうしたら、今度からルイズと呼ばせていただきますよ」

「今度からでなくて、今から意識しておくのね」

「はい。ところで、使い魔召喚の儀式があったと思うのですが、エレオノール様は何を召喚したのですか？」

あからさまな話題転換だが、エレオノールの方もその話にはのって
くれた。

「ハムスターよ。土系統のメイジらしいでしょう」

「そうですね。使い魔の品評会はどうするか考えていますか？」

「そうなのよね。ハムスターじゃ、目立たないのよね」

ハムスターって、確か凶暴だったよな。

まさか、土メイジとしてより、そっちの相性があってるなんてないよな。

っと思いつつも前世で覚えていた場面をちょっとばかり言ってみる。

「そういえば、ハムスターに玉転がしをさせるってどうですか？」

「玉転がし？」

しまった。この世界では見かけたことがなかったな。

「ええ、玉の上のせて、ハムスターにその上で動いて、

玉を転がしながら移動させるんですよ」

「たったそれだけ？」

「たったそれだけ、といますけど難しいんですよ。

多分、他の幻獣等も純粋な肉体運動だけでは、

すぐには真似できないと思いますよ」

「ちょっと、考えてみるわ。またね。ジャン・ジャック」

「はい。エレオノール様」

そうして平凡な魔法学院での生活に戻っていったが、今までとは違うのは手紙を受け取ってくれという女の子が増えてきたことだ。

「悪いけれど婚約者がいるから、受け取れないよ」

っという残念そうにひきさっがっていくが、何回かそういつやりとりをしてたうちにジークが背後から

「よう、お前って婚約者がいたのかよ」

「後から忍び寄るのは悪い癖だぞ。ジーク」

「それに気がついていいるだろう。ジャン・ジャック」

「まあね」

なぜだかここ一年ぐらいで気配を感じることができるようになってきた。

前世の時は眉唾物だと思って読んでいた本とかにあったのだが実際にできるんだよな。

こちらの世界でも聞いてみれば気配を絶つことをできる人間もいるそうさ。

ぼくもそこまでいけるだろうか。

これだと軍人よりどつかの1子相伝の暗殺者みたいだな。

まあ気配を感じることでもできるが、わざわざ後からよってくるのもジークくらいなものだ。

「そうすると今度の舞踏会はとうするんだ？」

「舞踏会って……フリッグの舞踏会か」

「そうそう、それだ。あれって、いっしょに踊ったカップルは、結ばれるのかなんとか！」

「そんな伝説があるそうじゃないか」

「その伝説だけど、あたっているといえればあたっているし
そうでないといえればそうでないらしいよ。」

実際には3年生同士が踊っていると結婚することが多いだけで、
1年生、2年生だとそれほどでもないみたいだよ」

「そうか。そうしたら、安心して踊りを申し込めるな」

「トリステイン貴族の女性は嫉妬深いから気をつけるんだな。
付き合いが長くなればなるほど分かれ方が大変になるぞ」

「そういえば」

つといつつ、ジークは頬を触っている。

この前の両頬に手形をつけられたことを思い出してもいるのだろう。

「じゃあな。ジーク」

そうして、今日は虚無の日の前日。
特に魔法学院で用事がなければ、授業後に王都トリスタニアで父さ
まが借りている家にむかうのだが。

「なんで、一緒についてくる？ ジーク」

「単にトリスタニアに行くだけさ」

「それで、今晚の泊まる場所は？」

「おれたちは友達だよな。ジャン・ジャック」

ぼく一人でいるところならいいのだけだな。

「まあ、友達というのは認めよう。しかしなこちらにも家族がいるんだよ。」

父さまが魔法衛士隊の副隊長でしかも隊員達が集まっている。

その中にゲルマニア人が堂々と入っていったらどうなるかわかるだろう?」

「へー、お前って、魔法衛士隊副隊長の息子だったのか」

「ああ」

「本当か? それだったらもっとおれのこと敵対視しても不思議じゃないのか?」

「別に国同士が戦争することがあるからといっても」

その中の人間が悪いわけではないだろう」

「お前って本当にトリステイン貴族らしくない態度だな」

しまった。前世の思想に影響されている。

ぼくはあわてて、

「他の生徒には言うなよ」

「おれも、自分の居心地が悪くあつようなことは言わないさ」

ジークとはトリスタニアの入り口で分かれて父さまが借りている家で着替えをする。

まさか魔法学院の制服で行くわけにはいかないからな。そうしてトリステイン貴族っぽい服に着替えてとある店に行く。どんな店かって？ 子どもは気にするな。

まあ、用事も終わったら、ばったりと会った。ジークと。

「へー、ただの坊ちゃん貴族とは違ったわけだ。

こんなところで会うとはな。ジャン・ジャック」

「ぼくもまさか、他の生徒がくるとは思っていなかったよ。ジーク」

ぼくは、額に手をあてる。まさか、ここで会うとはな。

まあ、正直に言うておくか。

「ここだったら安宿と違って水のメイジがきちんといるから病気の心配も無いからな。

それよりもジークの方こそこういう店よりも女性をひっかけているのかと思っていたよ」

「トリステインの女性って嫉妬深いんだろ？ そうしたら……」

「嫉妬深いのは貴族だけで、平民はそうでもないさ」

「ふーん。まあ、どっちでもいいや。それよりもこの後、何かすることでもあるのか？」

「いや、今日は父さまもいなかったし、特にはないよ」

「じゃあ、この際だから一緒に飲まないか。

お前なら、適当な店も知っているんじゃないのか？」

少し考えてから、ゲルマニア人が入っていても大丈夫そうな店をリストアップしていく。

近くだと、チクトンネ街にある『銀の酒樽』亭だな。

あの店なら貴族はやってこないはずだし、つとというところで、

「わかった、安酒場だけどトリスティン貴族はこない店がある。

まあまあ治安も良いしな。そこでよければ、行くか？」

「そう、こなくつちゃ」

少し恰幅のよい夫婦とその娘1人がいる店だ。

見かけによらずタルブ産の良いワインも良心価格で飲める。

昔はつけもきく店だったらしいが最近はそうでもない。

どうもこのおばさんが結婚したと聞いて踏み倒したのがいたためらしい。

それから、まあ、細々と続けているようだ。

そうやって多少だべりながら一緒に飲んでいたが、ジークのゲルマニアなまりがまわりにわかると貴族なまりをのこしたメイジたちがこっちにむかって、

「おい。なんだか、店内が臭くないか？」

ちょっと若めだが杖をもっているもマントをしてないところを見ると貴族から傭兵か犯罪者にでもなった連中だろう。

ジークも酔っているのか簡単に挑発にのって「あー、なんかそつちから汚物の臭いがしてくるな。香水をつける金も無いのか？」とか安直な挑発を返している。

勝手にやってる分にはかまわないのだが、なぜかぼくも引っぱりこ

まれた。

「おい、なんでぼくを引っぱりこむ？」

「だって、相手は5人だぜ。おれ1人に戦わせるのか？」

「おまえが勝手に口げんかをはじめただけだろう。それに……」

相手をざっとみてるがこのあたりで酒を飲んでいるようなメイジなら金がかせげるレベルではなさそうだ。

相手に実践経験があったとしてもドットがほとんどでラインがたまにいるだけ。

油断をしなければ、負ける相手ではないだろう。

それに確かに殺気は感じるがどちらかというと、メイジが平民をいたぶっているような感じのレベルにしか感じない。

「ひとりで十分だろう。ジーク」

そうすると、相手のメイジたちも怒り出して

「なんだと、その小僧」

酔っていたとはいえ、考えが足りなさ過ぎた。

これは相手にしないといけないだろう。

「どうも怒らせてしまったようだ。しかたがないから一緒に戦うか」

「お前ひとりでも十分じゃないのか？」

ニヤリとジークが笑う。

完全に相手側は怒っている。

店にいた他の客や従業員も店の奥の方に移動している。

まずったな。下手をすると出入り禁止かなっと思っただらジークが、

「店の中でするのもなんだから外にでないか」

意外にも相手は素直に店の外にでていく。

とりあえずこの店の出入り禁止はなさそうだ。さて外はというと、律儀にもぼくがでてくるのをまっっている。

とはいっても、すでに見物人の輪がでかだしている。

こんな夜だというのに、チクトンネ街の夜は人通りが多い。

「そっちの2人はまかせた」

ジークはそう言って3人を相手にするつもりらしい。

まあ、見た目じゃメイジの実力はわからんが、強そうなほうを相手にする気なのだろう。

ぼくも自業自得なので肩をすくめたが、ジークには通じなかったよ
うで「ああ、了解したよ」と言い直した。

さて相手は早速詠唱しだしているのでこちらも『閃光』の二つ名に
恥じないように『エア・ハンマー』を詠唱して相手の放った魔法ごと
と丁度2人を吹き飛ばした。

動かさずうめき声が聞こえているところを見ると、まだ来るかもしれ
ないから油断はしないでジークの方をみる。

もっている剣、グラムで相手の魔法を吸って、変わりに火を風で送
って相手を燃やしている。

二つ名は『風火』か。

それにしても器用な奴だな。

相手の5人は「このガキども覚えてやがれよ」っとまるで悪役のよ

うな台詞とともに周りの人垣の間をさつていった。ジークは

「歯ごたえが無いな。おれともう一度決闘してみないか？ ジャン・ジャック」

「お前は戦闘狂か？ やめておくれよ」

「なんだ。つまんねえ」

そう言うがこいつもまだ底を見せていないのはわかる。

まあ、結局店で飲みなおしたのだが朝までつきあわされた。ジークという調子を乱されるな。

その翌週の虚無の日の前の晩も飲んでたな。フリッグの舞踏会でも結局2人でいたら

「あいつらできているのか？」

なんて噂が耳に入ってきた。

なんで、そんな噂がたつんだよ。

第八話 トリスタニアにて（後書き）

ライトノベル版とアニメ版に、烈風の騎士姫の世界観が混ざっています。

第九話 噂

フリッグの舞踏会の翌日2年生のとあるクラスにて

「ねえ、ねえ、あの2人って、本当につきあっているのかしら」

「1年生の間では、もっぱら噂らしいわよ」

「本当にそんな話があるのかしら、きゃー」

そんな中にエレオノールが加わって

「その1年生で話題の2人って、どなたかしら」

「それがね、ワルドとヴィターハウゼンって1年生らしいわよ」

「そうそう。2人とも美形でよくつれだっているから、あやしいんだって」

エレオノールがその話を聞いて頭を横にふりながら言う

「そのワルドっていうのは、わたしの妹の婚約者よ。」

ヴィターハウゼンっていうとゲルマニア貴族でしょう。

そのようなことになるわけが無いわよ」

ぴたりと噂話がとまった。

やれやれとした表情で、エレオノールも

「ちょっと、あとでワルドと話してくるわ」

一方ジャン・ジャックの方も噂の件をどうしようかと思っていたらモンタンから助けの手がさしのべられた。モンタンの幼馴染であるドミニクにちよっかいをださなければジークとも普通に話す極少数の男友達だ。

「やあ、ジャン・ジャックとついでのジークフリード」

多少ゲルマニア人に偏見はまざっているようだが話すだけでも他の生徒よりはましな方だろう。

「よう、モンタン」

「おれは、ついでだよ。ミスタ・モンタン」

「ああ、ついでだよ。2人でセットの話だからな」

「ぼくとジークでセットというところの噂のことか？」

「そう。ドミニクから聞いたのだけど、女子生徒をお前ら二人して振りまくっただろう」

「いや、ぼくは婚約者がいるって言ったよ」

「うーむ。おれはトリスティン貴族の女性は嫉妬深いって聞いて実感したから、」

自重してただけなんだけどな」

「僕からみれば、2人とも女性に対する断り方がなっていないかったんだな。」

「婚約者がいるからじゃなくて、残念ながらとか相手を誉めながら言っておいた方が良かったよ」

「次から気をつけるよ。次があればだけどね」

思わず苦笑しながら答えた。

「それから、ジークフリードはゲルマニア人に振られたっただけだからな。」

「手のうちようは無いな。」

「どちらかというとお前のせいで、ジャン・ジャックが巻き込まれたんだろうな」

「おれのせいかな。すまないな。ジャン・ジャック」

「気にするな。どうもぼくの対応も悪かったみたいだし。情報ありがとう。モンタン」

「おれからも、ありがとう。ミスタ・モンタン」

「いいよ。ジャン・ジャック。お前はついでだ。ジークフリード」

「そういつつも律儀に答えているあたりは、モンタンの照れ隠しなのか？」

「情報は受け取ったが、さてどうしたものやらと授業をそっこのだけで考えていたが思いつかない。」

そうしているうちに昼食の時間だ。

アルヴィーズの食堂に入ろうとしたらつかまった。エレオノール様に。

「今日は外も晴れていることだし一緒に外で食事でもいかがかしら」

一応、アルヴィーズの食堂以外として学園内の庭でも食事はできる。大概、恋人同士でいることが多いのだが今のエレオノール様の雰囲気から察するにジークとの噂の件だろう。

ジークはゲルマニア貴族だからな。

魔法学院生活で多少はゆるくても、ラ・ヴァリエール公爵家の人間としてはどう反応するか読みきれない。

どちらにしても断るわけにはいかないから同行することにした。

多少雑談の食事がきたので食事をしている最中に、

「今日、わたしが食事にさそったのはなぜだかわかるかしら？」

魔法学院の食事は実家やラ・ヴァリエール公爵家での食事ほど寡黙に食事をするわけではない。

どちらかというのにぎやかなぐらいだ。

エレオノール様の雰囲気はそんなにきつい感じではないから、ジークがゲルマニア貴族っということと話してやることはなさそうだ。

これがツエルプストー家だったらどんな目にあっているかわからないが。

「ええ。ぼくが男性とつきあっているんじゃないかという噂ですよ
ね」

「わたしが聞いたところによるとそれだけじゃなくて、

婚約者と三角関係になっているとか、

他にも男性とのつきあいがあるのじゃないかという話よ」

小声で話しかけてきているのでいつも予備としてもっているタクト状の杖でサイレントをかけて答える。

「そんな、噂まで流れていたのですか」

「他にもたしか幼い子どもが趣味とかいうのも聞いたわよ。はあ」

そういえば、一人しつこく、婚約者のことを聞いていた女の子がいたなと思いつく。

「ルイズのことですか。」

ルイズが趣味かっていうのはさすがに今のうちからはわかりませんけれどね」

「そうよね。あなたって、どちらかというところ、年上の女性の方が好きみたいだし」

思わず、噴きそうになった。

「えーと、そんな風に見えていましたか？」

「そうね。わたしの家での晩餐会では、

よく年上の女性と楽しそうに踊っていたでしょう」

あらためて女性というのはよく見ているものだと思いなおした。

「かないませんね。確かに年上の女性の方が好みですが

ルイズとの婚約はないがしろにする気は無いですよ」

「それならいいのよ。あとできたら友人は選ぶべきね」

そっちの話題がついにきたか。

「そうそう昨晚のフリッグの舞踏会では踊っていないみたいだから
今度の新入生歓迎の舞踏会ではわたしとおどりなさい」

「えーと、いいんですか？」

「どうも1年生にも碌な男性がないのよね。あなたとだったら踊りもなれているし、

わざわざ下手な新入生とつきあう価値もないわ」

「そうですか」

「あとルイズとの婚約はきちんと公爵家の息女と婚約していると
伝わるようにした方が良くわいよ」

「えーと、あまり爵位とか持ち出さない方が良くはないのですか？」

「今回はそうでもしないと噂は収まりそうにないわよ。」

それともルイズとの婚約はやっぱり乗り気じゃないのかしら」

そういつて、こちらの顔を覗き込むようにしてきている。

「いえ、決してそのようなことは無いですよ。」

そのうちエレオノール様にもお義姉さまと呼ばせていただく日があるかもしれないね」

「まだ、気が早いわよ」

「調子に乗ってすみませんでした」

「遅くても新人生歓迎の舞踏会が終わって2、3日のうちには、この噂も消えて新しい噂でも捜しだしているわよ」

「そうですね。この魔法学院はそんな感じのところですよね」

あとはまた雑談をしながら食事も終えて教室に戻ろうとすると、ジークがとある人物とともに近づいてきた。

「おい。今の美人はだれだよ。あのマントなら2年生だよな」

「ああ、エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールだ」

そうするとジークの横にいた同じ教室にいるが、髪の毛が緑色で変わっているのだが、性格的には比較的目立たない。

そのわりには名乗っている名前が昔の義賊であることからあきらかに偽名であるとわかるそのアルビオンなまりのある生徒が、

「ラ・ヴァリエールだって？ あのラ・ヴァリエール公爵家か？ ジャン・ジャック」

「あー、そつだよ。他には無いな。フーケ」

そうすると横からジークが、

「なんで、そんなのと二人きりで、庭で食事なんてしていたんだ？」

「ああ。婚約者の姉なんだよ。」

まあ、隣の領地なのでその辺の付き合いとかでもしよっちゅう顔をあわせていたから

幼馴染ともいえるかもな」

そうするとフーケが、

「子爵家の君が公爵家の長女とはいわなくても婚約とは珍しいね」

「へー、ゲルマニアではよくあるみたいだけれど、

トリスティンでは珍しいことなのかい？」

「ああ、わが国アルビオンでもそうだが、

トリスティンでもそのような話があったとは記憶に無いな」

「まったくもってぼくにも記憶には無いよ。ジーク、フーケ」

そうして、噂は続いていたが、新入生歓迎の舞踏会では、エレオノール様とかなりの時間一緒にすごしていた。

何かまわりからは、

「怖いもの知らずの1年生とか」

「美少年2人の話って嘘だったの」

とか聞こえてきたが気にしないでおう。

結局のところ、この新入生歓迎の舞踏会のあと、ぴたりと手紙を受

け取ってくれという女の子はこなくなった。
時々、まだ、なにやら噂話は聞こえてくるが気にするたくいもの
ではなくなった。

そうして平穏な日々が続くかと思ったら、虚無の日の前日にはジークのみならずフーケまで一緒に行動するようになった。

「いや、虚無の日に寮に残っていても暇だし」

「ぼくは一緒に入れない日もあるぞ」

「ジークもいるしだいじょうぶだよ」

「本人もこういつてるし、いつものコースでもいつてるぞ」

「それが一番心配なんだけどな、ジーク。」

くれぐれも、ジークのケンカにまきこまれるな、フーケ」

結局ジークやフーケとはトリスタニアでは3週に2回ぐらいは一緒に
いろいろいるとしている。

単に一緒に飲んでいるのはいいのだが、時々ジークのケンカに巻き
込まれる。ジークはトラブルメーカーだ。

ジークの持っている剣、グラムで相手の魔法を吸っていれば歯ごた
えがあるもないものだが。

最近はそのようになってきたのだが、それよりも驚いたのはフーケが決
闘の賭けの胴元をしているところだな。

おかげで飲み代やその他もろもろが浮いているので、文句もい
えないのだが。

そうしたある日、ジークがぼくやフーケに聞いてくる。

「そういえば、夏休みはどうするんだ」

「僕はアルビオンの実家に戻るかな」

「ぼくは実家に帰っても特にすることもないし、トリスタリアでも残って、

たまにラ・ヴァリエール公爵家の晩餐会に出席するぐらいだろうな」

「そうか。フーケは無理として、ジャン・ジャックは暇ならゲルマニアに遊びにこないか。」

実際、ゲルマニアでも東の田舎になるから暇かもしれないが幻獣退治とかできるぞ」

たしかに、ぼくは実戦不足だ。

なにせ、ワルド子爵領は比較的治安がよい。

体は子どもでも思考が戦闘向けとはいえなくても大人なので、トライアングルになったら実戦に参加したが、幻獣退治が年に1回あるかないかぐらいの頻度だ。

軍人を目指す上で動物でもいいのでそういう実戦をつむのは良いことだろう。

実際に訓練として食事用の鶏の首をはねるのにエア・カッターで首を切って、血がふきだしたまま走る鶏を見たりして血に対する耐性とかもつけてきたからな。

しかし、

「おいおい。ぼくが魔法衛士隊の副隊長の息子だということを忘れていないか。ジーク」

「そういえば。そうだったな。すっかり忘れていたよ。」

あまりにトリスティン貴族らしくないからな」

「そこまで、変人扱いするなよ」

「実際、変人だろう」

「ここでぼくをあおって決闘にでも持ち込もうとしているのか？
ジーク」

「やっぱりわかったか」

夏休みは今までの休日で父さまが居るときのように魔法衛士隊の隊員と練習させてもらっているのじゃないのかな。

時々はラ・ヴァリエール公爵家の晩餐会に出席するだろうけれども、そうして2ヶ月半に及ぶ夏休みを迎えようとしていた。

第九話 噂（後書き）

このフーケはマチルダの兄です。

第十話 聖地の話題

夏休みも目前にせまった虚無の日の前日。いつも通りに『銀の酒樽』亭でジークやフーケと飲んでた。

男3人集まって飲んでもこの時代にはそんなに話題になるようなこともなく、学校でのことと街でひろって来た情報や各自の家の話とかになる。

ジークはあけっぴろげに話すがフーケはどちらかというところ、学校のことを中心にアルビオン全体の話についてはよく話すが自分の住んでいた街の話とかはしない。

ぼくの方は前世からまないことと、魔法衛士隊の表面上の話が多くなるぐらいかな。その中で、

「そういえば、父さまは聖地に興味があるんだよな」

「へー、聖地って、あのエルフがいる聖地かい？」

「そうだよ。フーケ」

「どんなところなんだろうな」

「まあ、貴族にとってあまり触れたくない話題だから、ここでは避けられないか？」

「トリスティンでは、あまり触れない話なのか？」

「ゲルマニアは聖戦とかには参加していないからあまり知らないのだけだな」

「フーケもジークも興味があるようだしサイレントをかけてまわりと

音を遮断して知っている部分を話してみる。

「エルフとの聖戦とか言って何回か行っているけれど、毎回敗戦だしメイジが10倍いて互角とか噂は流れているが、トリアンゲルの下位クラスより上のメイジが10人いてエルフと対等に戦えるかぐらいが実態らしい」

「そうか、魔法学院の図書館で調べてみてもあまり詳しいことはのっていないかったんだよな」

「船を改造して、エルフの船のように風竜にでもひかせれば速度だけなら互角にわたりあえるのになあ」

「ワールド、お前って本当にトリスティン貴族らしくないな。そんな船なんてゲルマニアでもしようとはしないぞ！」

「まあ。内緒にしておいてくれ。下手をすればまわりの貴族を敵にまわすからな」

「しかし聖地なんてものを調べてどうする気だ？ フーケ」

「個人的な趣味だよ」

「ふーん。個人的な趣味ね。」

「それだけでわざわざトリスティン魔法学院に留学の上で偽名を使うのか？」

「アルビオン貴族っていうのは」

「フーケは多少こまっているようだ。ここは援護しておくか。」

「あまり、つつこむなよ。フーケも困っているだろう。ジーク」

「まあ、そういうことでもいいか。」

けれど、ジャン・ジャックの父親ってのも変わっているのか？

それとも聖戦でも近く発生しそうなのか？」

「いや、フーケと同じく個人的な趣味だと思うよ。」

それでもよく聞かされてある程度知っているのさ」

「やっぱり少し変わっているんだな」

建前としては言っているがよく自身も聖地に興味が無いとはいえない。

多分よくが魔法衛士隊に入って見習いから正規の隊員になった時かな。

父さまにとって必要な情報を集め終わっていたら、魔法衛士隊をやめてでも聖地にでも行くつもりであろう。

「僕ももつと、エル……いや聖地のことを知りたいのだけど、

君のお父様に会うことはできないかな。ジャン・ジャック」

少し考える。フーケがアルビオンの貴族なまりもあるし魔法学院に入っていることからアルビオン貴族であろうことは確かだ。

ただし偽名を使っている。何かあった時には素性をトリストイン魔法学院を父さまから問い合わせて答えてくれるであろうか。

まずは普通の対応をしてもらおうのが一番よさそうだな。

「父さまを紹介するならば、素性を明かしてもらえないかい。」

トリステインの魔法衛士隊で素性を問わないで偽名のまま入れたのは昔の話だよ。

今は少なくとも、魔法衛士隊副隊長までなら知らされているらしい。

なので聖地とかで混み入った話になりそうなら素性を明かしてほしいな。フーケ」

「どうしても素性を明かす必要はあるのかな？ ジャン・ジャック」

「多分ね。少なくとも今までつきあっていた感じではアルビオンの王家筋では無いだろう。」

あと、感覚的なものだけれど公爵家とも思えないし」

「そうか、君はラ・ヴァリエール公爵家とつきあいがあったんだよね」

そうして、少し考え込んでいるフーケに、

「別に今すぐ決める必要はないだろう。卒業までに考えておいてくれれば良いさ」

「いや、できたら早い方が良い。悪いけれど、ジークは席を外してくれないか」

「おいおい、おれだけ仲間はずれかい。おれたちは友だちだろう」

「家族でも話せることと話せないことがある。

友だちだと思っていてくれるなら、

ここはひとつ引き下がってくれないか。ジーク」

「わかったよ。フーケ」

ジークはカウンターの方へ行つて、珍しくこの娘と話している。そういえば最近はおくがいる時は3人でだからカウンターじゃなかったもんな、っと思ひながらフーケと2人の時はどうしたのだからと、ふと思う。

「さて、2人きりだ。あらためて自己紹介しよう。

僕はアルビオンのダミアン・オブ・サウスゴータだ」

「サウスゴータ？ サウスゴータって、アルビオンの古都だったよな？」

「ああ、その太守の息子だ。

これで紹介してもらえないだろうか。ジャン・ジャック」

「あとは、その名前の身分を証明するものはもっているかい？

フーケじゃなくて、えーと……」

「いや、今までどおりフーケの方が都合が良いから

フーケのままにしておいてくれないか。

それと、身分を証明するものは、寮においてあるよ」

「そうしたら、早い方がよかつたんだよな？」

「そうだね。できたら夏休みの始まる前が好ましいのだけど、

君のお父さまの都合にあわせるので調整をしてくれないか。頼む」

「わかったよ。今日は家の方にもどつて、父さまに聞いてみるよ。はやければ明日できめられる。」

遅くても数日中に寮に手紙が届くだろうから、それで日程をきめるで良いかな？」

「ありがとう。それで頼むよ。ジャン・ジャック」

「じゃあ、ジークが機嫌を悪くしてケンカでも始めないようにしようか」

「そうだね。けれどもまこうやって魔法を使った時って、

ジークは君をケンカに誘ったことは無いのだけど気がついていなかったのかい？」

よく考えてみるとたいしたことでないけれど、サイレントを使って話をした時にはジークがケンカをしていないことに気がつかされた。

「初めて気がついたよ。ジークもあれでいて慎重な奴だったんだな」

「実家の方で幻獣退治とかいってたからその辺で気がつくのかもね。ジャン・ジャック」

「とりあえず、呼び寄せるよ」

サイレントを解いたところ呼びかける前に気がついたのか、ジークは店の娘と話していたのをやめてもどってきた。

「おや、あの娘と話していたんじゃないのか？ ジーク」

「いや、チップの分、おしゃべりにつきあってくれていただけさ」

「以外とあの娘もしっかりしているんだな」

「フーケの本名にも興味はあるんだが……」

ジークはフーケを見てからこちらを向き、

「それはおいておくとして前の話をした時に

幻獣退治のことに興味をもっただろう。ジャン・ジャック」

「この前のジークの実家へ行く話か？」

幻獣退治に興味はあるけれどゲルマニアに行くのは無理があるよ」

「いや、ゲルマニアでなくてトリステインだよ。

しかも日程はそれほどきつくは無いらしいから

興味があるなら一緒に参加しないか？」

「即答はできないけれど多分それなら参加できると思う。

ちょっと今日は家の方に泊まるから父さまとで話してみるよ。

それで良いかな？ ジーク」

「ああ、十分だ。良い返事を期待してるぜ」

いつものニヤリとした顔で返答を返してくる。

こういう顔の時って何かたくらんでいるんだよな。

まあ、本当に危ないことをたくらんでいる訳ではないのだけどな。

「じゃあ、悪いけれど、色々と父さまに話すこともできたし、

先に帰らせてもらうよ。ジーク、フーケ」

そう言って『銀の酒樽』亭を後にした。

父さまは寝ていたので翌朝、朝食後にダミアン・オブ・サウスゴー

タと聖地の件で話すことと幻獣退治の件を話をし両方とも快諾をしてもらえた。

そうして夏休みの初日は早速フーケにせかされるようにトリスタニアに向かった。ジークとは後で落ち合う約束をして。

トリスタニアでの家があるのは貴族ばかりが住むフォッソワイヤール街でレンガ造りのアパルトメントが並んでいるがそれとは違う一軒家。

フーケは早速、父さまと応接室に入っていったのでぼくは遊びにきている魔法衛士隊の若い隊員たちと一緒に軍杖の訓練をもらっている。

純粋な軍杖を操作する速度はこちらが勝るのだが体格差なのか力負けをする。

一応ここでは、正確さが優先されているのでなるべくそういうふうにしている。

実戦的な練習の時は、軍杖の操作のきれいさよりも力負けしないようにさばく手法を多用するのが今のぼくだ。

昼食の時間はやはりにぎやかな食事だ。

貴族であることを前面に出すよりも仲間意識を重視しているらしい。普段なら最近では若手の隊員のアラミス様と横に並んで食事をしているが今日はフーケと並んで食事をする。

魔法学院や『銀の酒樽』亭に比べると粗末なものですまないけれどもね。

軍人は見栄をはる。けれども子爵家の領地ではそれほど収入はあがらないのでこの程度の食事しかだせない。

それでも母さまが嫁入り後にアングル家での土地改良の仕方を導入したとこのことで普通の大きさの領地よりは収入があがっているらしい。

それとともに全体的にこの家に来るのは、爵位も持たない下級貴族

出身が多いのでこのぐらいでも喜んでくれる。

フーケの方には事前に話してあったので食事はそれほど苦にはしていないようだ。

もしかしたら聖地の件で進展でもあったのだろうか。まあ、急ぐ話でもないよな。

そうして食事が終わったらフーケと一緒に家をでて途中で、

「じゃあ、夏休み後にな。ジャン・ジャック」

「お互いに無事でな。フーケ」

と再会を約束してからわかれる。

このあとは、ジークと会う予定だ。

今の格好は普段の『銀の酒樽』亭にでかける格好からマントを外し、あとは特注品のリュックサックを背負っている。

ここでは片方の肩にかける袋が主流だから、物珍しげにみられるがジークにも教えてあるので彼も使っている。

ちなみに父さまも知っているが軍に採用を働きかけるか悩んだままだ。

歴史があるトリスティンの魔法衛士隊というのと、今はまだエスタ―シュ大公の事件からの立てなおしが終わりきっていないので結論はいつでるのやら。

それでジークと落ち合って目的の幻獣退治のチームのいる家に向かう。

目的の家についてそのチームを見たときに、

「お前、はめただる。ジーク」

「いや、こういうチームの方が楽しそうだろう」

家の中にいるチームは20名近くと多いが、半数以上は女性で残りの男性は比較的美男子だろう。

この男性の実力はわからんが身綺麗にしている。山とか森の中に行くはずなのにこの格好ということは頭がいたい。

このチームの出迎えにはあとで知ったがチームのリーダーで、

「ようこそ、わたしたちヴァルキリーチームへ」

ぼくはまだヴァルキリー（戦乙女）たちにつれられてヴァルハラへは行きたくないぞ。

他方ヴァルキリーチーム内の女性陣内では、

「今度の新人はとびきりの美少年だね」

「そうね。今度の幻獣退治で賭けをしない」

「いつもの賭けね」

「その賭けのつた」

ぼくの好みが少ない女性陣内でそんな会話がもたされていたのだが、ぼくはこのチーム編成に悩んでいたので聞こえていなかった。

第十話 聖地の話題（後書き）

下級貴族が爵位を持っていないのは7巻からの解釈です。

第十一話 ヴァルキリーチームでの初陣

ヴァルキリーチームの契約書に目を通していたがまさか女性主体のチームだとは思わなかった。

その時、目の前の女性が、

「その4人組。この2人は1時的な戦力だ。
お前らの期待しているようなことは無いぞ」

「なーんだ」

「そう」

「おもしろくないねえ」

うん？ はてぼくの勘違いだったのか？

「戦力にならなかつたら、お前らの好きにしてもいいがな」

「やっぱり、話がわかってるね。リーダー」

「そこなくっちゃ」

えーと隣にいるジークにこっそりと聞く。

「おい、ここの評判を何か知っているんだろう。ジーク」

「ああ、知っている。だが、あとにした方がいいぜ。ジャン」

ジャンで終わるのはジークいわくゲルマニア風と名とこの名前で呼ばれることにしている。

まあトリスティンでも多いのだが。

ゲルマニア貴族だけれども魔法学院から故郷に戻っても暇だから参加したという理由にしている。

貴族というのはこのリーダー以外には知らされていないはずだ。さて目の前の女性はこのチームのリーダーらしいがその女性から、

「話の途中で腰を折って悪かったが、

契約書に書いてある通り2ヶ月あまり一緒に働いてもらう。

そつえば、そっちのボウヤは、時々抜けることがあるんだったね」

「ええ」

「だから、相場より安めで契約したんだ。なあ、ジャン」

「そうだな」

ジャンと呼ばれると実家の執事であるジャンを思い出す。

ゲルマニア貴族でないと分かったとしても、多分、気にしないだろうとはジークの話だが、はてさて、どうなるのか。

「さて、契約書に書いている魔法はどうでも良い。

実際のところお前らの戦闘能力はどれくらいだ？」

「『銀の酒樽』亭の2人組の話は聞いたことは無いか？」

「そつえば、その2人組は美男子だという噂だったな。

その話をふってくるということは、お前らがそうなのか？」

「そうだよな。ジャン」

「おお、ジーク」

「ふん。街中のケンカと、幻獣退治の実力は違う。幻獣との実戦で逃げ出すなよ」

「おれなら何回も経験があるから多分大丈夫だ。それよりもジャンの方の経験が3回だと言っているから経験をつませるのにきただけさ」

「3回もあれば十分だろう」

「ぼくの実戦は、中距離から長距離だったから、近距離の対応にちょっと自信が無くてね」

「まあ、良いだろう。おいおい、実力もわかるだろう。それまでに死んだりしなければ良いがな」

笑いながら離れていく女性、いやこのチームのリーダーか。先ほどの疑問をジークに問いかける。

「それでさっきの質問の続きだが、やたらと女性が多いチームはどんなところなんだ？」

「見てそのままさ」

そう言われて改めて見ると、メイジが先ほどのリーダーを含めて3人しかない。

女性2人に、男性1人だがその男性は美形とは言わないだろうな。女性は40台と思える者からばくよりも若そうな少女までいるが、男性はほぼ美形と言って良い少年達で占められているだろう。

「女性は大半が戦闘向けの者だと思うのだが、男性は1名を除いてそういう風に見えないんだがな。ジーク」

「その通りだよ。まあ、おれは、そっちも楽しむつもりだけど、お前は好きにすればいいさ」

「そうか。考えておくよ」

つばめを飼っていてあきたら追い出すか売るかしているのか。それにしては男性層が若すぎる気はするが。

しかしジークの趣味もよくわからないな。ざっと、女性をみてみたが良く見て十人並みぐらいかな。

そういえばジークへ春先の頬に手型を残していったドミニクとかアニーってそんなに美人とはいえなかった気もするな。

ジークって意外と女性の顔は気にしないタイプなのかな？

あるいはぼくの美的センスが狂っているのだろうか。そんなことを考えていると、

「おい、おいていかれるぞ。ジャン」

「すまん。考え事をしていた。ジーク」

「じゃあ、今、リーダーからあつた話も聞いていないな」

「うっ！ その通りだ。聞かせてくれないか」

「移動するから、その中で話していくさ」

そう言われるとその通りにするしかないので王都トリスタニアの外で馬に乗ってチームのメンバーと合流することにする。

ジークいわく、先発隊と後発隊にわかれて、先発隊は1件を片付けてから後発隊と合流し別件の仕事をするときかされた。

あとはこのチームの噂としては、火系統のメイジは雇われないということだ。

火系統のメイジも戦闘向きなのに不思議なことだ。

ジークも風系統のメイジとして契約しているので火系統が強力なのは内緒とのことだ。

ちなみにぼくは風系統のままなのは当然だけれどもトライアングルとしてふるまった方が良いとのことだ。

スクウエアなんて名乗るとすぐにあしがつくとはジークの弁だ。

たしかに、スクウエアってトリステインでも100人いるかないかという噂だったよな。

ちなみにぼくたちは先発隊だ。合流してまわりを見るとメイジはリーダーのみであとは全員女性。

ぼくらを含めても7人しかいない。しかも一人は年下の少女。どんな幻獣退治なんだろうか。

移動中は適度な速度なのでその途中メンバーの名前程度は紹介される。

その後はしゃべり声は聞こえてくるが、あたりさわりのない世間話だ。

今回の仕事とは関係なさそうなので目的のところに行くが、実践の前にテントを張って野営することだ。

食事の準備には、年下の少女があたっている。リーダーからはそれを手伝えといわれた。

まあ、近くの川から水を運んだり焚き火用の木を集めたりがまずは最初だ。

そこでちょっとしたハプニングがおきた。

ジークが木をもって少女のそばに寄ったところで、

「いやー」

っと、そんなに大きな声ではないがした。

リーダーがジークのそばにつめよって、少し離れて聞いただしていい。

風系統の耳の良いのをいかして多少は悪いと思いながら聞いてみると

「お前は風系統だけでなくて火系統も強いメイジだったのか？」

「風も、火もほぼ同じくらいで、日によって、どちらが強いか分からないんだ。

使い魔を召喚すればわかるんだろうけどね」

「とりあえず、アニエスには近づくな。これは命令だ」

「理由は？」

「アニエスは火系統が強いメイジを苦手にしていてな。

お前たちが風系統だというから雇ったのだが、

今さら変えるのも無理だからきちんと働け」

「理由がわかったから近づかないさ」

「それで良い」

アニエスは今は落ち着いているようなので持ってきた水を入れるために

「水を持ってきたから、鍋に入れるよ。名前はアニエスだったよね」

「あわてたところを見せて、ごめんなさい」

「良くわからないが、ジークが何かわるふざけでもしたのだろう」

聞こえていないはずの理由は話すわけにもいかないので適当に話す。アニエスに特に何も言わずにジークが持ってきていた木切れを鍋の下にならべていくので、まだ足りない焚き火用の木を集めに向かうことにした。

夕食は鍋とそのあたりでとってきたであろう野鳥の肉だ。調味料がわずかしか使われていないのもものすごく薄味に感じられる。

すっかり貴族の食事に舌がなれてしまったんだな。ワインも安い水でわったようなワインだが、まあ、こちらは色々な種類を飲んでいるからそれほど気にはならない。そこへアニエスが、

「夕方は、無視したようなことになってごめんなさい。ジャン」

「気にしていないから良いよ。アニエス」

「それだったら、良いの。明日の亜人退治のお仕事はがんばってくださいね」

「ああ、ありがとう」

その何気ない言葉の意味を知るのは翌朝だった。

新人だからということや夜警は慣れてからで良いとのことだったが、ジークはぶつぶつと言いながら2人用テントの中で一緒に寝ることになった。

翌朝は前夜と同じ内容の食事だ。少しばかりスープが煮詰まった感じで少しばかり美味しく感じる。

そうしてリーダーからは、

「今日は、お前たち2人の实力を見るのをかねている」

まあ、そうだろうな。实力もわからないものといきなり本格的な実戦なんて嫌だもんな。

「それで、相手は最近この辺りに住み着いたツヴァーグのツガイの退治だ」

「ツヴァーグって、ゲルマニアにもいる。」

先住の魔法で剣を錬金するがあとはその剣で戦うつというのでいいのか？

「少し種族が違うようだな。」

こちらだとその剣を中心に『ブレイド』とほぼ同じものをまとわりつかせている。

『ブレイド』で対抗するか『硬化』の魔法で強化した剣で戦うのが普通だ」

「そんな簡単な相手なのに、これだけ大勢でくるのか？」

「ついでだ。これはお前たち2人の实力を見るものだから、」

お前たち2人で戦ってもらおう。
ただし、そちらのボウズの要望通りに近接戦で戦うんだな」

「えっ？」

「何、心配するな。死ぬことは無いだろう。手足の1本ぐらいなくなるかもしれないがな」

近距離戦ができれば希望とは、言っておいたが最初からこれかい。ツヴァーグというと男性はひげが生えていて女性は生えていなくて、身長は1〜1.5メートルで筋肉の塊のような種族だったはずだな。先ほどリーダーが言っていたように近接戦でも対応できるので、平民でも相手にできるが、全体的に背が低いので逆にやっかいらしい。今回のツヴァーグという亜人の住処は、はつきりしているのでぼくとジークが2人で先行して後にはリーダーとあと2人の女性が続く。残りは留守番というか、荷物を見張っている。

さて、少し開けた空間に小さな家が1軒建っている。これくらいの空間があればトライアングルクラスのスペルである『エア・ストーム』あたりで小屋ごと吹き飛ばすだろうな。そうしてからコモンの『マジックアロー』1発づつで済むであろうが今回は近接戦か。

ジークと相談をして『エア・カッター』で家の一部を壊して出てきたところで、互いにそれぞれ一体ずつ相手にすることにした。ちなみにジークは男性型をぼくは女性型の方だ。

ジークはあいかわらず少しでも強そうなのと戦うのが好きらしい。

家に近づいて2人で『エア・カッター』を放ったあとに聞こえる足音は2人分。情報は間違えていないようだ。

そうしてジークとの打ち合わせ通りに相手をする。

ツヴァーグはその体格に似合わない大剣を錬金したあとに『ブレイド』と似たオーラを感じる先住の魔法を発動させた。こちらもタイミングをあわせて風の『ブレイド』を発動する。ジークの方も風の『ブレイド』だ。ツヴァーグからは殺気に似た気配を感じるが人間の放つ殺気とは異なる気配。

ただ見合っけていても仕方が無いので先手を打つことにする。

ツヴァーグに近寄って上段から打ち込みをいれるがこれはフェイント。そのままジークからは離れるように1対1の体制にもつていった。

ジークも同じような行動をとっている。

これでお互い何がおこったかわかるだろう。まあ、余裕があればの話だが。

再度こちらら上段からの打ち込みに行こうとしたらツヴァーグからよってくる。

下方からの横なぎされるとかって足を狙われているようで非常に戦いづらい。

そうして何合か打ち合ったあとに突然相手が離れた。

気がついてみるとジークの方が先に終わったようだ。ジークはこちらを注意しながら離れていく。

倒れているツヴァーグの手元の大剣から『ブレイド』もどきが見えないところからみるとグラムで『ブレイド』もどきでも吸ったのだろう。

まあ、やりづらい相手だが相手となっているツヴァーグの癖もわかってきた。

軍杖から『ブレイド』を消して、ツヴァーグと正対して普段の練習

時の構えよりもやや下方に向けて構える。
魔法衛士隊を目指すということから、前世の記憶が戻った幼少の頃からおこなっている基本中の基本の繰り返し。

ツヴァーグの下方からの変則な攻撃もかわしたり、さばいたりして魔法の詠唱を完成させて放つ魔法は『エア・カッター』。

それで、胸から上と下とに分かれたのに苦しがつて動いている様子から、楽にさせるために再度『ブレード』を出して頭につきさすを手ごたえはほとんどしない。

ツヴァーグの大剣から『ブレード』もどきは消えていないが数分もすれば消えるだろう。

剣と違って『ブレード』だと手ごたえを感じないのがまだ救いだらうか。

そうしているうちに後方から見ていたリーダーたちが現れた。

「そうだね。今はそっちの背の高い方はほぼ満点に近いね。」

それから、そっちのボウヤは戦い方がきれいすぎる。危なっかしくて見てられない」

「それで、近接戦の自信が無いって言っていたんですけどね」

「判断が遅いな。今はまだ近接戦はやめておいた方がよいだろう。」

まあ、ぎりぎりだが合格点はやる。今日から2ヶ月あまりよろしくな」

「よろしく願います」

「おれも、よろしく願います」

そうしてこのチームでの初の仕事は終わることができた。

この日はその後移動をして後発隊とも合流し夜警も割り当てられた。

こちらは女性12名、男性4名で残りの女性1名と男性5名はトリアスタニアの家で待機兼連絡がかりだという。
リーダーが後発隊のサブリーダーと話し合う。

「今度の仕事はオーク鬼か」

「そうです。ただ奇妙なのは、うちのチームを指名してきたところなのですよね」

「少年をつれてこいとかというわけでも無いんだよな」

「ええ、うちのチームはそっちの方が有名ですからね。」

それも無いので若干不思議なのですが、内容自体はオーク鬼の全滅だそうです」

「オーク鬼10匹を全滅か。」

ちよっときついが、住処もわかっているみたいだからなんとかなりそうだな」

「ええ、今度の新人2人は使えるなら、大丈夫そうですが、本当のところはどうですか」

「あいつらはオーク鬼1匹つつ倒してもらえば大丈夫だろう。」

それよりも場所はワルド子爵領か」

ぼくの知らないところで、動きがあったようだった。

第十一話 ヴァルキリーチームでの初陣（後書き）

ツヴァーグはドワーフの一種と思って下さい。

第十二話 夏休みと思つたら

執事のジャンが、

「なげかわしいお姿で」

そういう言葉とは裏腹に笑いをこらえているのがよくわかる。

後ではメイドのオランプと今年入ったばかりのメイドが耐えられないようにクスクスと笑っている。

ぼくもこんな姿をさらすことになるとは思っていなかった。せっかく女装までしたのに……

事のおこりは通りの道が見慣れていたので野宿をした翌朝になってリーダーにこっそりと、

「どこへ向かっていくのか教えてもらえないかな」

「ほう。なぜ、そのようなことを気にする？」

「今はゲルマニア貴族だが、親が元々はトリスティン貴族でね。

この道筋だと知っている貴族の領地に向かっているんだよ。

それでぼくの顔は父親似といわれているから顔をあわせたら……

まあ、どうなるか想像がつかうだろう」

「場所は、ワルド子爵領だ」

よりによって、実家だった？

実家ならまだ良いが領民にマントもつけないで出歩いているところを見られるとまずいな。

「そこはまずい。ぼくだけ戻るといふのは無しかな？」

「もうボウヤも計画に入れてあるので計画の変更はまいるな。

より道していく時間もないし男性の変装用の道具なんてないしね」

「男性のってことは女性用はあるのかな？」

「かつらぐらいだが……女装ならできそうだな」

リーダーがにやにやしながら答えてきている。

選択枝は無いのか。あきらめて女装することにした。

少し体格の良い女性の服を借りることにしたが腰周りがかきつい。

見た目は体格がよくても男性と女性って体のつくりが違うんだな。

それから胸があまったのでタオルをブラジャー風に縫いつけても

らって胸になる部分にタオルをまるめてあるように見せた。

このあたりではしゃいでいたのは、アニエスだった。

まあ、娯楽が少ないから、こういうのも楽しいのだろう。

ジークは離れたところから笑って見ているし。

実家の城の前に止まったらリーダーとサブリーダーは内容の確認の為に入っていったが、少しまっていたところでサブリーダーがもどってきた。

「おい、ミシエル。リーダーが呼んでいる」

ミシエルとは念の為のぼくの偽名だが中に呼ばれるという事は、

「旦那様より、このヴァルキリーチームで働くことは聞いておりま

したが、なぜ、女装などしているのですか。本当になげかわしい」
笑いをこらえているのが明らかにわかる声で執事のジャンにたしなめられる。

ぼくはリーダーの方に向かって、

「ぼくは、もう首かな」

「なぜだ？」

「普通、幻獣退治のチームとかは貴族をあまり好かないと聞いているのだけど」

「ああ、お前らが貴族であることなんて、半分以上のメンバーは気がついてる。

ただ、ゲルマニア貴族か、トリスティン貴族かはつきりしていなかっただろう。

それに本当に気に入らなかつたら、貴族の仕事をしなくて犯罪に手にそめるだろう」

「単に気にしすぎだったのか」

「まあ、そうだろう。あとは、普段はマントを外していた方が確かに良いだろうが、

必要ならマントをつけていても問題は無いからな。

今回はきちんとした貴族の格好で途中は様子を

見に来ているという風なのがおすすめたがな」

「わかった、ありがとう。着替えてくるよ。リーダー」

服は着替えてというかオランプに着替えさせられてマントを羽織って城の外に戻ると実家の衛兵もついていくことになっていた。目標がオーク鬼であることは教えてもらった。

毎回、全滅しそこねているので今回こそは全滅させて今後の憂いをたとうというのが父さまの考えていることなのだろうか？

今回はオーク鬼の巣が判明しているので夜襲をかけるとのことだ。オーク鬼の巣から少し離れたところで休憩をとっている。

その休憩中ジークが離れた時にアニエスが寄ってきて

「女装の時は、はしゃぎすぎてもうしわけございません。貴族様」

「こちらも身分を隠していたのだから気にしていないよ。皆も気にしていないだろう」

「いえ、リーダーから……あっ！」

リーダーの入れ知恵か。それほどは信用されるまではいってないよ。うだな。

「とにかく、気にしなくて良いよ。今晚も料理を楽しみにしているよ」

「今回は、食材が豊富だから楽しみにしててくださいね」

そういうとアニエスはさっさといった。まあ、食材と調味料を実家から持ち出してきたから今までよりは期待できるだろう。

今朝までよりはましな味付けになった料理のあとはいいよオーク鬼退治だ。

オーク鬼の巣のまわりに慎重に罾を張っていく。

そうして寝ているオーク鬼へ、一気にメイジからの攻撃が加わる。

ぼくは風系統で上位の魔法である『ライトニング・クラウド』を食らわせる。

ジークは今回『フレイム・ボール』を使用している。

そうして最初に6体のオーク鬼を葬った。

そう実家に戻ったことによりスクウェアでしかも『風の偏在』を使用できることがわかったので風の偏在もでている。

この巢が森でなければ『カッター・トルネード』でも使用するところだが巻き込む木で味方がケガをしかねない。

起きて逃げだす方はリーダーたちにまかせて、逃げ惑っているほうのオーク鬼をぼくとジークで担当し終わった。

逃げ出した方のオーク鬼も罠にはまったところで、ヴァルキリーチームの他のメンバーたちやメイジが全て終わらせていた。

昨年までも同様のことをおこなっていたつもりなだけども、アマとプロの違いなのだろう。

昨年までは罠を見破られていたが、今回はしっかりと罠にひっかかっている。

この後は、一度トリスタニアに戻って休養をとってから、申し込みがきている内容によってメンバーを振り分けていく。

全員が動くのは珍しいようだ。幻獣・亜人退治を中心に宝探しでの護衛みたいな仕事もしたりした。

そうして、夏休みの間にラ・ヴァリエール公爵家の晩餐会に3回呼ばれた。

毎回いく度に晩餐会の前にはカトレア様からは「ルイズが魔法の失敗で泣いているから呼んできてあげてね」と中庭の小船にいることを教えてもらう。

そうして、ラ・ヴァリエール公爵にルイズと一緒に許しを請う。

晩餐会ではルイズの面倒をみているかエレオノール様の踊りの相手

をしていた。
ラ・ヴァリエール公爵家の晩餐会へ行く度に約束事のように繰り返していた。

そのようなことをしているうちに16歳になっていた。

ヴァルキリーチームの契約期間も終わり最終日。リーダーからは、

「2、3年に1度くらい、お前らみたいなのがあの魔法学院からくるんだが

大抵はドットが良くてモラインだからな。

今度長期の休みがとれるようなら、良かったらまたうちのチームにこないか」

「そうですね。ぼくは来年の夏休みあたりにもお願いします」

「おれもお願いしたいですね」

「ああ、今度からは、正規の契約料で雇うから期待しているぞ」

「良いですね。ゲルマニアじゃあ、ここまで幻獣退治って高くは無いですからね」

「そうか、ちょっと先走りしすぎたか。

まあ、使えるスクウェアとトライアングルなら、どちらにしろ歓迎だ。じゃあ、またな」

「ええ、今度もよろしくお願いします」

「おれもお願いしますね」

そうしてヴァルキリーチームとも分かれジークは「一回は故郷にもどってこい」と呼び出しをくらったらしい。

見送りにトリストニアの外まで行ったら、飛竜とその乗り手がまっついて、それによってゲルマニア方面の方へ向かって行った。

さてそうすると半月弱あまりは暇になるのだがトリストニアの父さまの家でいつものように泊まる。

住み込みの老夫婦から父さまはしばらく帰ってこないと聞いた。

時々ある遠征だ。

トラブルが発生すると直轄領ならば王軍が動くのだが、直轄領以外の各領地では魔法衛士隊が使われる。

魔法衛士隊が昔こつむつた不人気をなくす為に、おこなっていると父さまからは聞いている。

貴族からの支持をとりつける為らしい。

実家に帰っても2ヶ月あまり前の女装の件で執事のジャンに何か言われそうだしな。

また魔法学院の寮に行ってもまだ帰ってきている者は少ないだろう。

あてにしていた魔法衛士隊との訓練も無いのでヴァルキリーチームで2回ほど仕事をさせてもらった。

小遣い稼ぎとしてはまあまあ、戦闘訓練としてはさすがに現役の貴族の嫡男ということで近接戦はさせてもらえなかったのは残念だ。

そして血を見ることに禁忌感を感じなくなってきた。

どちらかというと、生き残ったという喜びみたいなものを感じだしてきているのかもしれない。

ジークが求めているのはこれなのだろうか。

夏休みを終え魔法学院の寮にもどって、普段通りの学院生活に戻るかとの矢先にメイドから緊急の手紙と寮の部屋で手紙を開いた。

中身は父さまがランスの地で戦死したことをつけるものであった。

母さまのときとは違い、父さまにはその可能性があると思っていたのでそれほどあわてなかった。

問題はランスの地というのがゲルマニアと隣接している領土だ。はたしてジークと顔をあわせて冷静でいられるだろうか、というのが頭の中で浮かび上がる。

たしかに国同士の間は悪いがその国に存在している人間が全て敵対するわけではないと、理解しているつもりではあった。

けれども肉親を実際に殺されてみるとどうだろう。ぼくにはジークと直接顔をあわせる自信がなかった。

結局は逃げたのかもしれないが爵位と領地の相続の手続きがあるので、一度実家にもどることにした。

実家の地下室で母さまの遺体を見続けながら、これからどうするべきか自問自答していた。

ランスの戦いも終わり普通ならありえないがアトス様が実家にきてくれた。

アトス様からは父さまの軍杖と母さまの肖像画がのっているペンダントを手渡されながら、

「ワルド副隊長殿より、このペンダントを息子にと伝えられたので……」

「わざわざ、丁寧にありがとうございます。アトスさま」

父さまの願いは母さまの生き返りか。

父さまが聖地の情報を集めていたのもその件だ。

ぼくは違った意味で興味はあったがこの件はどうするべきだろう。

こうして悩みながらもぼくはひとつの結論をだした。

魔法学院をやめて、魔法衛士隊に入ること。
可能な限り早く魔法衛士隊隊長を目指して、聖地の正確な情報入手すること。

その為ならば親の七光りでもなんでも利用する気になった。

そうして魔法学院は退学をして、ちょうどラ・ヴァリエール公爵家の晩餐会がまた開かれるというのでそれに参加することにする。

これは魔法衛士隊に入隊する為にラ・ヴァリエール公爵の紹介状と可能ならば、烈風カリンの紹介状をもらうことだ。

ラ・ヴァリエール公爵の紹介状はうまく入手できたが、烈風カリンの紹介状をもらうのは無理だった。

まあ、それにしても晩餐会でルイズの面倒をみることになったのだが、これも利用できるならばだ。

他方ラ・ヴァリエール公爵とカリィヌの間では、

「ワルド子爵の息子、いや今度から子爵を継承したんだっただな。彼を見てどう思う」

「以前は大胆なところがありながらも繊細さをもっているように見えたのよね」

「今は？」

「わたくしから見ても今はわかりませんわ。

ただ恐怖から目をそらしていないことだけは変わりないと思えますわよ。あなた」

「そうか、勇気と無謀をわきまえているならば良いのだが」

親馬鹿だけではなく、弟子馬鹿な面もある二人であった。

父さまが借りていた家は大きすぎる。

今後の生活を考えてチクトンネ街の裏手にあるアパルトマン（集合住宅）で3部屋を借りた。

1部屋はぼく用として、もう1部屋は今まで父さまが借りていた家の老夫婦に面倒を見てもらったためだ。

残りの1部屋は、ぼくの体調管理のために専属の水メイジを雇うことにした。

魔法学院では仲が良かったジーク、フーケ、モンタンの3人に新しい住所を知らせた。

まあ、モンタンは魔法学院の中だけでのつきあいだったので、家にくるかどうかわからないけれどな。

それから、魔法衛士隊に入隊するためにアトス様を尋ねて行った。陛下は戦死した父さまのことを覚えていてくれた。

そのまま魔法衛士隊に入隊することが認められた。わざわざお願いをしてもらったラ・ヴァリエール公爵の紹介状も不要なぐらいだった。

最初は魔法衛士隊の見習いだけだな。

見習いの間には世話をしてくれる人がつく。直属の上官といったところだろうか。

父さまのところをよく軍杖の相手をしてもらっていたアラミス様だった。

アトス様が気をつかってくれたのであろう。

見習いとしては騎乗用の幻獣であるヒポグリフ、マンティコア、そしてグリフォンの世話、餌やり掃除などをする。

何十人かの見習いはいたが、幻獣は爪で引っかいてきたり、噛んでこよつとするらしいがぼくには舐めてくる。

その見習いたちには、ぼくのような爵位持ちもいるが爵位もとれない下級貴族らもいた。

見習いの期間は世話をする人について遠征することが多いが、それだけでは早く出世はできない。

他の隊の遠征でもついていった。同じように考える者もいるようで、何人かの見習いは一緒に行動することが多かった。

どちらかというと、実戦の実力は下級貴族の方に強い者が多い。

必然的に下級貴族と一緒にすごすことが多くなった。

そうした中でも、たまには羽根をのばすのにジークや、フーケと飲んでいた。

そうして、スクウェアの魔法と6歳の頃より培ってきた軍人の基本動作のおかげで功績を積んでいくうちに魔法衛士隊の正隊員になれる日がきた。

アラミス様から言われる

「3隊の衛士隊からきてもらいたいと言ってくれているぞ」

「光栄なことです。少し考えさせて下さい」

「まあ、あまり無いことだからな。ただ、僕はヒポグリフ隊に来てくれると思っているけれどね」

考える時間をくれた。

普通なら父親が副隊長をしていて、知り合いも多いヒポグリフ隊なら優遇されるだろう。

けれどもヒポグリフ隊の隊長がバツカス様で、魔法衛士隊としての実力はともかく隊をまとめる手腕が劣っている。その分をフォローするためなのか優秀な隊員が多い。

マンティコア隊の隊長はゼツサール様で烈風カリンがキャリア又様であることを知っている。

なおかつ、ぼくがキャリア又様から魔法の手ほどきを受けたことも知っている。

この隊のモットーは『鉄の規律』だったが今はそこまではきびしくは無い。しかしながら自由に行動するのは制限される。

もうひとつのグリフォン隊はトレビル様。

ここには、エスターシュ大公の事件のころに入った傭兵あがりの隊員たちと、それについていける下級貴族が多い。

そのためか柄が悪いのが多い。しかし逆に自由度は高い。しかも年齢から考えるとここ数年でやめていく者も多いだろう。

生前の父さまの話では通常はひとつの魔法衛士隊に入ったらそのあとはその隊に居続けるか、王軍の方へ向かうかという話だったな。もともと考えていたこともあったし、そんなに結論まで時間をかけずに、

「アラミス様。希望を聞いてくれるということなら」

「それで、ヒポグリフ隊かな？」

「いえ。グリフォン隊への配属を希望いたします」

アラミス様が信じられないというような顔をして

「その隊で本当にいいのか？」

「ええ。ぼくの夢は早く魔法衛士隊隊長になることですから」

「苦勞することになると思うが、そう自分で決めたなら
グリフォン隊隊長のところに行ってくるんだな。」

マンティコア隊隊長と僕のところの隊長には伝えておくさ」

「いえ、せつかくのお誘いを断るのですから、

ぼく自身からも直接話をさせていただきたいと思います」

結果、ぼくはグリフォン隊に配属された。

第一部 導入編 完

第十二話 夏休みと思ったら（後書き）

本編前はこれで終了です。

第二部 精霊石の島 第一話 トリステイン魔法学院再び

今はヴィンドボナのとある酒場にいる。

正面にいる人物以外には話をきかせたくないの、サイレントをかけている。

手紙のよりとりをしていたが、ジークと実際に会うのはトリステイン魔法学院を卒業して以来だから8年ぶりか。
かんたんに昔話をしたところで本題に入る。

「それで、頼んでいた調査の方は、どうだ？ ジーク」

「そつちこそ、用意してきてあるんだろっな。ジャン・ジャック」

「恥ずかしくて渡すのがつらいようなものだがな」

あまり渡したくは無いが、ジークの商売の件もあるからこれしか手が無いだろう。

トリステイン貴族の中に、アルビオンでは貴族派と名乗っているレコン・キスタと接触している者達がいる。

その者のリストだ。

かわりにジークからは、トリステイン以外のレコン・キスタに関する情報が入ってくる。

中を読むと実質はアルビオンのレコン・キスタに加盟している貴族の情報だけでゲルマニア、ガリア、ロマリアにはレコン・キスタが接触をしていない。

ぼくにはトリステインの間諜の情報も入ってくるが、アルビオンのまともな情報さえ入ってこないような状態だ。

まったくトリステイン貴族は気位ばかり高くて平民をうまく使いこ

なしていない。

そこにいくと、ゲルマニアは貴族と平民をうまく使い分けているな。ジークから受け取った書類を眺めながら考えていると、

「それで、もう一つの方なんだが、予想通りにあった。本当にあったんだな」

「まわりは気がついていないのか？」

「いや。今のところ、おれだけだ。」

一応出入りは禁止して、物品だけの受け渡しにしている」

「それだったら、ダイヤモンドの商売には影響は無いんだな？」

「なんとかな」

そう言いながらも魔法学院時代の快活だった様子はひそみ、黄金食に見えていた髪の毛も白髪が混じっているように見える。あまり長居するのも精神的な負担が大きいか。

「できたら、鉦山も気づかれないうちに閉鎖して、忘れることにするんだな」

「忘れることができればな」

「今度はいつあえるかわからないが、達者でな。ジーク」

「そつちこそな。ジャン・ジャック」

ぼくはリキュールをあおるように一人で飲んでいるジークをおいて

外にでた。

レコン・キスタからの接触があつて、3ヶ月がたったかな。思えばおかしな戦争だった。

たかだか2年あまりで1ヶ所で始まった戦闘から、アルビオン王家がおいつめられるなんてな。

何か魔法の力が影響しているだろうということ、調査を開始したが間諜では進展がしなかった。

一方、人的なつてのあるヴァルキリーチームや情報屋の方がよっぽど情報をもつてきてくれたが、決定打にはかけていた。

今回のジークからの情報では、一度死んだのに生き返ったという情報を入手し、さらに体温は冷たいという情報だった。

やはり、完全に蘇らせる魔法では無かったか。

エスターシュ大公の事件も確かに正常な生き返りではなかったしな。

聖地の奪還をかかっているわりにはレコン・キスタがトリステインとしか接触してきていないのも、本気かどうか疑わしいところだな。レコン・キスタからの情報だと『土くれ』のフーケは、マチルダ・オブ・サウスゴータと伝えられた。

マザリーニ枢機卿からは、可能な限りレコン・キスタから情報をひきだしてほしいといわれている。

マチルダ・オブ・サウスゴータを脱獄させてでも、レコン・キスタに信用をなるべく多くさせて情報収集につとめてくれとな。

ダミアン・オブ・サウスゴータの妹だと思えば、たしかに脱獄させてやるのは個人的心情としては良い。

まだ聞いていないが、ダミアンとの手紙のやりとりがなくなったのも、土くれのマチルダ・オブ・サウスゴータの実家が無くなったころだったしな。

土くれのフーケことマチルダ・オブ・サウスゴータへの尋問では、ルイズの使い魔が『破壊の杖』こと『ロケットランチャー』を使って土のゴーレムを破壊したと答えた。

しかもその使い魔は、世界からきたと言う。

タルブ村の佐々木とかいう人物はゼロ戦できていたはずだが……興味をもってマチルダからえたルーンの情報を王立図書館で調べたところ始祖ブリミルの使い魔『ガンダールブ』にたどりついた。

ルイズの魔法は四系統魔法と異なるのは確かだが虚無なのだろうか？ こうしながらトリスティンとゲルマニアの同盟、もといアンリエツタ姫殿下とアルブレヒト3世の婚姻のとりきめで建前ばかりの警護をしている。

城の周辺にいるだけだがそこにいる風の偏在と入れ替わるために戻っていった。

少し時間はさかのぼるが、ぼくは魔法衛士隊にの副隊長にまであがった時の頃だ。

色々な土メイジにあちこちでジャイアントモールがどれくらい深くもぐれるかをためさせていた。

その情報が流れたのか、1年ほど前にマザリーニ枢機卿には、のことについて聞かれた。

単純に「地下に何らかの鉱脈が無いかを探ってもらっていただけですよ」と、答えたがその嘘は簡単に見破られた。

まあ信じないだろうと思って、

「風石の鉱脈が地下に眠っていると聞きましたね」

そうすると、掘り葉掘りと聞かれた。普段なら信じられないような

脅しなども含めて。

結局は判明していること全てを話すことになった。

ダミアン・オブ・サウスゴータから、アルビオン王国はハルケギニアの一部であったこと。

アルビオン王国の地図が年代ごとに小さくなっていくことを教えてもらったこと。

アルビオン王国のジャイアントモールは、決してアルビオン王国の中心部では深くもぐらないのに、周辺部では自由に動きまわること。ジークフリード・フォン・ヴィターハウゼンのダイヤモンドの鉱脈では、ジャイアントモールを使用している。

しかし、深く潜らなかつたり深くもぐっても大きく迂回したりすること。

最後にはぼくの一族に残っている文書、日本語とはいわなかったが、

「ぼくの一族には、地下の風石が徐々に大きくなっていくが、

聖地にはそれらをどうにかできるといふ伝承が残っています」

と伝えた。

そうするとマザリーニ枢機卿が、

「おお、神よ。始祖ブリミルよ。

なぜロマリアにもどらないときめたわたくしに試練を与えようとするのですか」

そう言いだして、室内のブリミルの像に向かって祈りをささげていた。

酒の席で、ジャイアントモールの話をダミアンや、ジークと話していた。

それで、ジークも気がついてしまったのであろう。

この大地に風石の鉱脈があちらこちらにあることを。

それをたしかめられずにいたジークの性格が災いをもたらしたとしかいえない状況だな。

ジークからの問いには、おとなしくぼくは認めた。

ぼく自身もだが、母さまも、母さまから聞いた祖父も取り乱しはしないようだった。

一度死を経験しているからなのか、それとも、人類が何回も全滅するほどの核兵器のある世界になれてしまったせいなのか。

ゲルマニアからトリステインの帰りになぜだか、トリステイン魔法学院へよることになっている。

通り道だから王族として名門貴族の子弟たちに顔をだすようにさせたのだろう。

ただ、それもゲルマニアと婚姻のとりきめ後にわざわざ立ち寄りななければいけないというのは王家も大変なものだと思う。

先に風の偏在にマチルダこと土くれのフーケを連れ出しに行かせている。

最悪マチルダの兄であるダミアンの友人だったことを話せばついてはくるだろう。

その場合レコン・キスタにまでついてくるかは微妙だな。

今は風の偏在と落ち合うまで心配しても仕方がないか。

他にも現在住んでいる家の中の処分や実家の整理をふくろう便でたのんでいる。

何せ土くれのフーケをつれてレコン・キスタに入る予定だ。

一度は実家に不名誉印が押されるのは覚悟のうちだ。

もどってきたら不名誉印は取り消されるだろうが、嫉妬深い宮廷貴

族からはなんていわれるかと思うと少々頭が痛いところだ。

そう考えながらグリフォンに乗り、姫殿下とマザリーニ枢機卿の馬車を囲うようにグリフォン隊をならばせながら進行する。

他のヒポグリフ隊、マンティコア隊よりもマザリーニ枢機卿のそばにさせられる事が多い。

悩みを聞くというか実際には愚痴らしいのだが、ぼくの風の偏在相手に愚痴を言っているらしい。

仮にもブリミル教の枢機卿だろうにブリミルの像にざんげをするのではなくて、風の偏在に愚痴をこぼすだなんてあまりブリミル教には重きにおいていないようだ。

先ほど姫殿下の馬車に、マザリーニ枢機卿が乗ったので、その斜め後方に控えるようにしてグリフォンを進行させている。

そうしていると、窓のカーテンが開いた。

まあ、呼んでいるのだろう。

「お呼びでございますか？ 枢機卿」

場所の窓に騎乗したグリフォンを近づける。窓が心持ち開かれ、マザリーニ枢機卿が顔を出し

「ワルド君。殿下のご機嫌がうるわしゅうない。

なにかお気晴らしになるものを見つけてきてくれませんか？」

「かしこまりました」

この街道ならうまくすれば花が咲いている時期か？

そうして、花をみつけたので、グリフォンを走らせて近くまでよって、腰にさした軍杖を引き抜いて短くルーンをとなえる。

かるくつむじ風が舞い上がり、ぴん、ぴん、と街道に咲いた花を手元に摘むことができた。

そうして、馬車のマザリーニ枢機卿がいた方に近づくと、窓から枢機卿に手渡そうとしたのだが、マザリーニ枢機卿は口ひげをひねりながら呟いた。

「隊長、おん手ずから殿下が受け取ってくださるそうだ」

「光栄でございます」

と少々戸惑いを覚えながらも答えた。このようなことは初めてだったからな。

一礼をして、馬車の反対側に回った。すると窓が開き、姫殿下より手が差し出されたので、摘んだ花をその手に手渡した。

そうすると今度は左手が差し出された。これはお手を許すということだろう。姫殿下の手をとって、そこに口づけた。

物憂いっぽく聞こえる声で姫殿下が、

「お名前は？」

「殿下をお守りする魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、

ワルド子爵でございます」

恭しげに頭をさげたが、もう1年はそばで警護していたんだけどな。覚えてもらえないとは前王とは大違いだ。

まあ、花よ蝶よと育てられたらしいからしかたがないか。

これからゲルマニアに嫁ぐことになるであろう姫殿下だからつくすこともなくなるであろう。

「あなたは貴族の鑑のように、立派でございますわね」
リップサービスぐらいはしておくか。

「殿下のいやしきしもべに過ぎませぬ」

「最近はそのような物言いをする貴族も減りました。祖父が生きていた頃は……」

ああ、あの偉大なるフィリップ三世の治下には、
貴族は押しなべてそのような態度を示したものですわ！

「悲しい時代になったものです。殿下」

「あなたの忠誠には、期待してもよろしいのでしょうか？
もし、わたくしが困ったときには……」

「そのような際には、戦の最中であろうが、空の上だろうが、
なにをおいても駆けつける所存でございます」

姫殿下が頷いたので一礼をして馬車から離れることにした。
こんなことを言ったが、実際のところゲルマニアに嫁いたら、この
ようなことは無いだろう。

次の王は誰になるのだろうか？ とは王宮でのもっぱらの噂だ。
今となつては、グリフォン隊から古参の隊員がいなくなったり、結
婚をしているのと、若手の名門貴族が入りだしている。

そのためか、グリフォン隊もぼくが入った頃よりも人気がでてきて
いる。

入るのがあと1年遅かったら、名門貴族が先に上司になって魔法衛
士隊隊長にはなれなかったかもしれないな。

ただ、こうやって魔法衛士隊隊長になつたが、そうそう自由に諸外

国にいけるわけではない。

マザリー二枢機卿からレコン・キスタへ潜入してレコン・キスタの実態をつかむこと。

それに可能ならばレコン・キスタと内通しているトリステイン貴族のリストを入手するように指示を受けている。

とりあえずマンティコア隊長のゼツサールは信頼ができるので、この件に関してすでに伝えている。

なんだ、かんだと言って実際の戦で一番信頼できるのは烈風カリンと一緒に戦ったことのあるこの人だ。

そうしてトリステイン魔法学院が遠くに見えてきた。

ひさしぶりだな。そういえばルイズが通っているはずだったな。

ルイズと最後にあつたのは5年ぐらい前だったかな。

桃色がかった金色の髪の毛が印象的だが、おなじような髪の色のカトレアさまと似ていれば良いのだがな。

噂では魔法はあいかわらずまわりから失敗つと呼ばれているようだが、あの魔法のオーラの感覚はどの魔法とも異なる。

虚無なのだろうか？ それともいまだめぐりあっていない禁呪に連なるものなのだろうか。

そうすると普通の方法では、わからないだろうな。

ルイズのこともわからないが、始祖ブリミルの虚無についても謎がやはり多いな。

地下の風石の鉱脈をなんとかできるものを作ったというのならば、土か風の系統の魔法も強かったのであろうか。

そうして、ひさしぶりに魔法学院をくぐることになった。

馬車からマザリー二枢機卿が先におりたちアンリエッタ姫殿下が降りてきた。

生徒たちの歓声は耳に響く。

夜になり、アンリエッタ姫殿下が宿としている来賓用の宿舎から忍びだす。

漆黒の頭巾とマントで変装しているつもりらしい。

昼間、女官にルイズの部屋の場所を聞いていたというので見張っていたらこういうことか。

三年前のラグドリアン湖での園遊会でも抜け出したつもりらしいが、魔法衛士隊では全て把握している。

当時の王様は若いうちだから好きにさせてあげなさいとのことでアルビオンのウエールズ皇太子と密会は監視しているだけだ。

アルビオン側でも事情は似たようなものらしく、お互いの監視していた者は苦笑してたらしい。

ひそかに気配を消してついでと途中で私服の男子生徒がアンリエッタ姫殿下に気がついたらしい。

危害を加えるつもりが無いので様子を見ながら、そういえば魔法学院の女子寮の中に入るのは初めてだ。

ぼくが通っていた頃もそうだったらしいが、女子同士の交流は少ないようだ。

誰ともあわずに進んでいける。

アンリエッタ姫殿下は聞いていたルイズの部屋に入って行った。

この生徒に害意はなさそうだが、姫殿下に万が一があったら困るので、気配を消しながらもルイズの部屋の声に集中する。

中では姫殿下がルイズに幼いころの話や人である使い魔の話、そうしてゲルマニア皇室に嫁ぐことになったことを説明していつている。

しかしそのあとの話はやつかいごとだ。
レコン・キスタに入ったと思わせるには良いチャンスだが、ルイズを巻き込むのはまずい。

アルビオンのウェールズ皇太子への手紙をとりかえさなければいけないというほどの重要事態なのに魔法衛士隊に任せないのは困った姫殿下だ。

しかし魔法衛士隊に任せないのは恋文だけというわけではなく、ラグドリアン湖での愛を誓おうとした件だろうか。

まさか、そんなものを手元にウェールズ皇太子が手元に残しているとは思えないが、万が一ということがあるな。

中で土くれのフーケを捕まえた話をしているが、あれは『破壊の杖』という名前の『ロケットトランチャー』のおかげだろう。

あの異世界からきたという平民の使い魔『ガンダールブ』の実際の実力はどれくらいあるのだろうか？

そうすると中では「お手を許す」と聞こえてきた。

こついつところは姫殿下の世間知らずの良いところか。

貴族も平民も特に変わることなく接する。

中に目の前にいた生徒が突入して行ったが「お手を許された」ことに怒りをぶちまけているようだ。

しかも以前『ガンダールブ』に負けているらしい。

ただしグラモン元帥の息子か。

グラモン元帥の息子ならほっておいても名誉の戦死ですまされるだろう。

問題はやはりルイズだ。ルイズがアルビオンに行くのなら、あの親馬鹿なラ・ヴァリエール公爵にどう説明するかだ。

何せエレオノール様が婚約を解消されるたびに、エレオノールさまの機嫌をなんとかしてやってくれと頼み、もとい命令してくるくら

いだからな。

エレオノール様の鞭使いは最近磨きがかかってきているし、以前魔法衛士隊の隊員からも紹介したのにしばらくしてからその隊員は言った。

「もう耐えられません。

このままエレオノールさまと付き合うぐらいなら、

魔法衛士隊を辞めさせていただきます」

魔法衛士隊の訓練だって、そんなに軟弱じゃないはずだが、真性のMでないと耐えられないのか？

最近は一バーガンディ伯爵と婚約したらしいが、いつまで持つか魔法衛士隊の中では賭けが成立しているくらいだ。

とうぜん、続けるに賭けるのは”ゼロ”で、何ヶ月もつかにしか興味が無いようだ。

最近は一ラ・ヴァリエール公爵も王都にめったにこないから隊員達への忠告する気も無い。

そんなことを考えながらもルイズの部屋では、姫殿下がルイズへ手紙を渡したようだ。

明日の朝の集合場所が話されて、グラモン元帥の息子……ギーシュ・ド・グラモンが、姫殿下を送るようだ。

仮にもグラモン家の息子だ。王家に馬鹿なことほしないだろう。風の偏在にあとをつけさせ、自分はどうするべきか、自分のテントに戻って行った。

自分のテントに入って考えていたら、姫殿下の女官がやってきた。姫殿下とこの時間から謁見とのことだ。

そうして姫殿下に、ルイズ達との同行を申し付けられた。

「魔法衛士隊、グリフォン隊隊長であるわたくしめだけで

任務をさせていただくことはできませんでしょうか。 姫殿下」

「……」

「無理を申しあげましたようですみませぬ。ご命令のままに」

ルイズをいかせないために遠まわしながら姫殿下に考えを改めるよ
う言ったが無理か。

第二話 魔法学院からの道

これから、姫殿下に指示された場所に行くところだ。予定よりわずかに遅れている。

昨晚のうちに必要な処置はしていたが、今朝の処置に思ったよりも時間がかかったためだ。

あとは、うまく行くことを祈るだけだ。

目的の場所にいくと桃色と金色の髪の毛が特徴的な女の子、ひさびさにあうはずのルイズがジャイアントモールと戯れている。

いや、ジャイアントモールは戯れているつもりだろうが、ルイズは嫌がっているな。

腰から軍杖をひきぬき軽く『ウィンド・ブレイク』の呪文でジャイアントモールを吹き飛ばす。

「誰だッ！」

昨晚みかけた男子生徒、ギーシュ・ド・グラモンがわめいていた。内心では女子生徒に使い魔を襲わしているのを理解していないことにヤレヤレと思いつながら近づいていく。

「貴様、ぼくのヴェルダンデになにをするんだ！」

「ぼくは敵じゃない。姫殿下より、きみたちに同行されることを命じられてね。

きみたちだけではやはり心もとないらしい。

しかし、お忍びの任務であるゆえ、一部隊つけるわけにもいかぬ。そこでぼくが指名されたってワケだ」

いつもかぶっている羽帽子を取って貴族の礼式にのっとって一礼をする。

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

ギーシュ・ド・グラモンがうなだれているのを見て、そこに反省の色をみた。

「すまない。婚約者がジャイアントモールに襲われているのを見て見ぬ振りはできなくてね」

ルイズのそばに寄っていくと、ちょうどルイズも立ち上がり震えるような声で言ってくる。

「ワルドさま……」

「久しぶりだね！ ルイズ！」

軽くルイズを抱擁する。

「お久しぶりでございます」

「彼らを、紹介してくれたまえ」

ルイズを放して、帽子を目深にかぶって言う。すでに名前は知っているが紹介を求めた。

「あ、あの……、ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のサイトです」

ルイズは交互に指をさして言った。

ギーシュ・ド・グラモンとサイトは頭を下げている。
ぼくはサイトに近寄った。

「きみがルイズの使い魔かい？」

ぼくの婚約者がお世話になっているよ」

「そりやどうも」

あまり友好的な雰囲気ではないな。
とりあえずは馬を確保しないと。

この馬を借りる書類を書くのに時間を書けさせられた。あのオスマン氏に。

秘書をしていたフーケがいなくなったのだから新しい秘書をやとっておいてほしかったものだ。

魔法学院の馬舎にいる馬を借りる準備をしているとギーシュ・ド・グラモンが尋ねてくる。

「子爵、グリフォンはどうしたのですか」

「ああ。お忍びの任務であるゆえ、グリフォンではここから行けなくてね。

ぼくの風の偏在がグリフォン隊にいる。

ラ・ロシエールの港町で落ち合うことになっているよ」

すでにマザリーニ枢機卿には伝えてある。

随分と悩んだようだ。ルイズに預けられた手紙の中に、手渡される相手としてルイズが直接指定されていることも考えられるので連れて行くしかないとのことだった。

ぼくにはルイズを守りながらも、最終的には現場判断ができるだけレコン・キスタに入るように言われた。

「風の偏在があるだろうから期待をしている」

って泣きが入りそうだ。

まわりを見渡すと、まわりの準備も整っているので馬に跨って手綱を握り声をかける。

「では諸君！ 出撃だ！」

馬を少々はや足にして出発する。

アンリエッタ姫殿下は出発する一行を学院長室の窓から見つめている。

その学院長室には、ぼくの風の偏在がたたずんでいた。

港町ラ・ロシエールは王都トリステインから早馬で二日、魔法学院からならもう少し短くなる。

どうせ『スヴェル』の月夜なので、急いでもアルビオンへは出発できない。

それに方策を打つのに時間がかかるだろうからな。

ルイズとは馬を横に並べながら話をしているうちに、昔の丁寧な言い方から口調がかわってきた。

こっちが今の素なのだろう。それと後の方を気にしているようだ。グラモン家の息子と恋人関係なのか？ それとも、あのサイトという少年は相性が合う使い魔なのだろうか。

そのあたりも多少は気にかかるが、途中の駅で昼食とする前にひとつ確認をすることにした。

「諸君。任務の再確認だがあくまでルイズの持っている手紙を
ウェールズ皇太子に渡して、ウェールズ皇太子が手紙を持ってい
たならば

持って帰ってくることだ。そこできみたちの实力を知りたい。

ミスタ・グラモンとミスタ・サイト」

「ぼくは土系統のドットですが、父からは命を惜しむな、
名を惜しめと言われています」

「そうか。さすがグラモン家の息子だ」

「そうしてサイトは、そんなぼくに勝った平民です。
単なる平民ではありません」

ほう。『ガンダールブ』とはいえ貴族にそういわしめる實力がある
のか。

「そうか。そのあたりの話は昼食の時にでも聞かせてくれないか」
フーケから決闘があったことも聞き及んではいた。

昼食の場として駅のある街に馬をやすませようとしたら、上空から
風竜が降下してきた。

ルイズが驚いた声をあげる。

「シルフィード！」

「シルフィード？ 知り合いの使い魔の名前かい？ ルイズ」

そうして風竜が地面につくと、赤い髪の少女が風竜からぴよんと飛
び降りて髪をかきあげている。

「お待たせ」

その赤い髪の少女が言うと、ルイズが怒鳴る。

「お待たせじゃないわよッ！ 何しにきたのよ！」

「朝がた、窓から見てたらあんたたちが馬にのって出かけようとしているもんだから、

急いでタバサを叩き起こして後をつけたのよ」

その赤い髪の少女が風竜の上にいるパジャマ姿をした女の子を指差している。

そのパジャマ姿の女の子がタバサなのだろう。まるで、犬かネコにつける名前のようだ。

ただ、そのパジャマ姿の女の子は気にした風もなく、本のページをめくっているが、特徴的なのは青い髪だ。

「ツエルプストー。あのねえ、これはお忍びなのよ？」

ルイズ！　そこでなぜ、お忍びだと言うんだ。せつかく馬できた意味が無いではないか。

しかも、ツエルプストーだって？　ぼくはがつくりときさそうだ。

「お忍び？　だったら、そう言いなさいよ。」

言ってくれなきゃわからないじゃない。けれどそのお忍びってのも面白そうね」

ルイズは腕を組んでツエルプストーをにらみつけている。

まあ、ツエルプストー家の人間に対してはそうだろうなと思っているとそのツエルプストーがしなをつくってぼくの方ににじり寄って

くる。

「おひげが素敵よ。あなた、情熱はご存知？」

ぼくは左手でにじり寄ってくるのを制した。

「あらん？」

「すまないが、これ以上近づかないでくれたまえ」

「なんで？ どうして？ あたしが好きだって言っているのに！」

好きななんて言ってたか？ そんなのはどうでも良い。

「婚約者が誤解すると困る。それにゲルマニアの香水は苦手だね」

ジーク曰く香水の話はゲルマニアでケンカを売るための言葉だと言っていたが、トリステインではそのような意味を知っている者はほとんどいない。

実のところは、ツエルプストー家の人間でなければルイズに誤解された方が良くないのだが、ツエルプストー家だけはさけないとカリーヌ様が怖い。

なぜカラ・ヴァリエール公爵よりもカリーヌ様の方がこの件に関しては口うるさく言う。

ルイズを見つめるとルイズの頬が染まる。

「なあに？ あなたの婚約者だったの？」

ツエルプストーはつまならそうに言う。ぼくは頷くがルイズは困ったようにもじもじし始めている。

婚約者だとは、はつきりとは言わないんだな、ルイズ。もしかすると良いタイミングなのかもしれない。そうしていると、ツエルプストーはサイトに抱きついた。

「ほんとだね。ダーリンが心配だったからよ！」

そうしてサイトとツエルプストーが楽しそうに騒いでいる。タバサという女の子がパジャマ姿でいるから、この街のもので良いから何か羽織れる物をすすめたが「気にしない」とにべもなく断られた。

しかし、青い髪というとガリア王家につらなるはずだがその格好と態度からはそれらしさを感じない。

ガリア王家とは関係無いのだろうか。

もしガリア王家に関わる者だとしたらかなりまずそうな展開だ。ここで下手を打つとガリア王国に攻める口実を与えるかもしれない。無能王として聞こえてくるが王位についてから両用艦隊の増強をしている。

このことに注意を向けなくて魔法の面だけを見て、無能王とばかり言っているトリステイン王国の宮廷貴族にはため息をつく思いだ。明日の計画は変更だな。今晚ふくろう便で風の偏在に手紙を送ろう。

とりあえずは昼食にして、その間にサイトとグラモンの決闘のようすを聞かせてもらった。

最初こそサイトがグラモンのワルキューレという青銅製のゴーレムに殴られていたが、青銅の剣をもつと7体の青銅製のゴーレムを切ったという。

青銅製のゴーレムを青銅製の剣で切るといふのは異常だ。

これが始祖ブリミルの伝説の使い魔『ガンダールブ』というものだろうか。

そして、ルイズがそれを使い魔として召喚した。

ルイズが虚無の系統であるかは不明だが、強力なメイジとしての素質をもっていることは間違いがなさそうだ。

ただ『ガンダールブ』が、ぼくが使い方を知らないロケットランチヤーを使ったのは気にかかる。

そうしてサイトを見直してみても、背中に背負った大剣ぐらいしか見当たらない。

短銃も持っている様子は無い。やはり剣の実力を覚えておくか。今晚泊まる予定の宿のそばには人が立ち寄らない広場があったはずだな。

この食事の最中に名前と呼ぶことにして、グラモンはギーシュに、ツエルプストーはキュルケにとなった。
昼食後の馬へ乗る前に

「サイト。土くれのフーケを捕まえたのは知っているが
一回しか使えない『破壊の杖』でゴーレムを倒したとは聞いていた。

フーケを尋問した限りではメイジでは無いと聞いているが、
きみの実際の実力を見せてもらいたい」

「ワルド、そんなことをしているときじゃないでしょう？」

「ああ、予定している今晚の宿のそばには広場があったはずだ。
そこで、ちょっと手合わせを願おうと思っている」

「手合わせって？」

サイトの方から質問がきたので軍杖を引き抜いて答える。

「つまり、これだよ」

「殴りつー?」

サイトはにやつと笑って言う。

へー、自信がありそうだな。ぼくも笑いながら答える。

「そのとおりさ」

そうして、今晚泊まる予定の街へと、馬と風竜とで向かって行った。

今晚泊まる予定の宿では、こまったことになった。

予約していたのは、3部屋。4人で泊まるつもりだったのだが、キユルケとタバサがついてきている。

6人を3部屋だとすると、ぼくもルイズに話しておきたいことがあるし、こういう割り振りにするしかないだろう。

「今日の部屋は、キユルケとタバサが相部屋だ。

そして、ギーシュとサイトが相部屋」

サイトがギーシュを睨んでいるが、あきらめてもらおう。

「ぼくとルイズは同室だ」

「そんな、ダメよ！ ワルドは婚約者だけど、

まだ、わたしたち結婚しているわけじゃないじゃない!」

「しかし、部屋は3部屋しかあいてはいない。

それに大事な話があるんだ。2人きりで話したい」

これで部屋はきまつたが、その前に行っておくことがある。

「さて、昼間の話だが覚えているかな？ サイト」

「殴りつこのこと？」

「そう。まだ、夕食までには時間があるから、今から行おう」

この宿のそばの寺院の裏には広場があつたはずだ。

そこに到着すると誰もいない。

他の皆はついてくるが、タバサだけ本を読んであまり興味は無いようだ。

「さて、本来なら作法というものがあるのだが、平民であるきみはあまり気にしなくてもよい」

「俺は不器用だから、手加減できませんよ？」

「かまわないよ。全力でこい」

仮にも魔法衛士隊隊長まであがつてきたほくだ。

昼食のギーシユとサイトの話を聞く限りでは少々速度と腕力があつたとしてもなんとかなるだろうと思つていた。

サイトは背中から片刃の長剣を抜いたが錆びている。

ルイズも随分かわいそうなものをサイトに持たせているなとは思つが青銅の剣よりは役にたつかと思いなおす。

サイトは思つたよりも素早くせめこんできたが軍杖で受け止める。

ガキーンと、火花がちつた。その隙に一旦まわりこんで、突きを放つ。

それをサイトが剣で切り上げて払ったので、ぼくは右斜め後方に飛び退り、構えを整えなおした。

「なんでえ、あいつ、魔法を使わないのか？」

言葉を話す剣？ インテリジェンスソードか？ 聞いたことはあるが初めて見るな。

「お前が錆び錆びだから、舐められてんだよ」

「いや、舐めているわけじゃない。

今の切りつけてくる速度も速かったし、

ぼくの突きも切り上げて払われたのはひさしぶりだよ。

確かにそのあたりにいる大半の軍人でも、

きみの速度についてくるのは難しいだろう。ただ、きみからは殺気を感じない」

「えっ？」

「アルビオンに行ったら、どうなるかは分からない。人を殺すこともあるだろう。」

本当にアルビオンへ行くのか出航まで考えておいた方が良かったらう」

自分の身も守れない様なら帰ってもらうしかないが、単に剣をもっているだけの平民ならメイジも油断をするだろう。

単なる高校生らしき日本人が『ガンダールブ』のルーンを持つだけでメイジ殺し級の力を持つとは、実際に鍛えたならどうなるのだろうか。

そうして、ぼくは宿に一人向かって行った。

第三話 出航前に

サイトと手合わせした後に夕食をとった。

サイトは命のやりとりをすることになれているのか、それとも単純に脳天気なのかキュルケにかまわれている。

26年後の日本は、ぼくの知っている日本と大きく違うのであろうか？

そういえば、母さまともベルリンの壁が無くなった話とかしたら驚いていたもんな。

ロケットランチャーを使えるということはそういうことなのかもしれない。

一方、ルイズの方が緊張しているな。

ぼくと一緒の部屋に泊まるということにとまどっているのか？

一応、護衛なので夕食時にはワインを一杯飲んだだけだが、ルイズも一杯しか飲んでいない。

古典的な手だが、もう少しアルコールを飲んでもらってリラックスしてもらおうか。

そうして、ぼくとルイズは同じ部屋に入った。

左側の部屋にはキュルケとタバサが、右側の部屋にはギーシュとサイトが入っている。

ルイズは先ほどより緊張しているようだ。

テーブルには食堂で頼んでおいたワインと陶器のグラスが置いてある。

ぼくはルイズにむかって昔のように手をさしのべて

「ミ・レディ。ソファで一緒にワインでも飲まないかな？」

そんなぼくの手を軽くにぎってきたのでソファにつれていく。そんなに距離はないのだけれどね。
そうしてルイズが腰掛けたあと反対側にまわりルイズの横に座る。
ワインの栓を抜き2人のグラスについて掲げた。

「2人に」

ルイズはちょっと俯い、杯をあわせた。かちんと陶器のグラスが触れ合った。

実のところを言うと馬を並べて話をしていたので話す内容もすでに少なくなっている。

今まで触れていなかった、ギーシュとサイトのことを聞いてみる。

「そういえば、今日はぼくと一緒に馬を並走させていたけれど、後ろの方を気にしていたよね」

「あれは、使い魔がキュルケと騒がしくしてたからよ」

「おや、そうかい？ 午前中から気にしていたように思えたけれど」

「あの……」

「ギーシュが恋人だからかな？」

「いえ、違うわ」

「そうしたら、サイトかい？」

ルイズの頬が赤くなっていく。

「ま、まさか。使い魔よ！」

意識しているかどうかはともかく、悪い気はしていなさそうだ。公爵家の三女が身分違いの恋をしているかもとは思うが、こちらとしては都合が良い。

それにこれで緊張がとれたのも丁度良い。

「その使い魔だけど、彼は『ガンダールブ』だ。きみのメイジの力を示している」

「ガンダールブ？」

「おや？ 魔法学院で教えてもらっていないのかい？」

「初めて聞くわ」

何をあの魔法学院を教えているんだ。

ガンダールブのルーンのことなら、図書館の教員用のところにあるだろう。

魔法学院にいた頃に聖地関係を調べていた時の記憶がよみがえった。

「『ガンダールブ』というのは、始祖ブリミルが用いたという伝説の使い魔だよ。

誰もが持てる使い魔じゃないよ」

「信じられないわ」

「ぼくの言うことを信じないのかい？ ルイズ」

「でも、でも……」

「でも？」

「あの、その、わたしの魔法はいつも失敗ばかりして……」

魔法の失敗を気にしているのか。それだったら、先に生徒であるルイズに教えてやるべきだろう。

それとも、見つけていないのか？

「きみの魔法はたしかに失敗していたけれど、誰とも違うオーラを放っている。

それは、きみが他人にはない特別な力をもっているからさ。

ぼくも並のメイジじゃない。だから、色々調べてみたよ」

「えっ？」

「残念ながらなぜ魔法が失敗するのかとは分からなかった。

しかし、他の四系統魔法とも違うオーラを放っているのはわかる」

「わたしを安心させる為の嘘じゃないの？」

「ぼくはきみの婚約者だよ。調べてあげたくなくなるじゃないか」

「あ、ありがとう。ワルド」

「だから、あの使い魔……サイトは大切にした方がよいよ」

別にこんな話をしたかったわけじゃないのだが、話の方向がおかしい。

ここまできては逆にきりだしにくいのが、本題にいくか。

「それで、ここからが本題だけど」

「大事な話って、今の話じゃないのね？」

「ぼくたちの将来のことだよ」

「将来のこと？」

「少し長くなるけれど、聞いてくれるかな？」

「ええ」

「まずはエレオノール様だけでも、

今の婚約者がバーガンディ伯爵だと言つのは聞いているよね？」

「聞いているわ。それとわたしたちの将来と何が関係するの？」

「怒らないでほしいのだけど、

多分、エレオノール様との婚約はまた解消される可能性が高いそうだよ」

「エレオノール姉さまって、またなの？」

「そうすると次の婚約者探しになるのだけれど、見つかりそうに無いんだよ」

バーガンディ伯爵が何をとちくったのか、エレオノール様と婚約という話が流れたときにはぼくのまわりではあきれていたものな。

「それで？」

「そうすると、ラ・ヴァリエール公爵家を継ぐ可能性がある
あるのはきみだよ。ルイズ」

「えっ？ わたし？」

「そう。気がついていなかったのかい？」

「だって、わたし、魔法だつてろくに扱えないのよ」

「貴族が貴族たる所以は、王家を守ったからだよ。
決して魔法があつたからだけではないよ。」

魔法があつたから、力があつたから守れたというのも確かだけれども」

「……」

「けれども、その公爵家の婚約者は、たかだか子爵だ。
これがどういふことかわかるだろう。ルイズ」

「あ、ありえないわよね……」

「そうだよ。これが、二人きりで話したかった、大事な話だ」

これには、ちよつとばかりの嘘が入っている。
公爵家に婿入りした例が1000年ほど前の資料に1回だけだがみ
つがっている。

そして、あの親馬鹿なラ・ヴァリエール公爵だ。
エレオノール様の相手として、ぼくを最後の砦にしようとしている

節がある。

いくらなんでも、ラ・ヴァリエール公爵家をまともについだら、親戚関係や宮廷貴族、それに他の公爵家からどうなることやら。

だから、ワルド子爵家に一度不名誉印を押される仕事を行う気になつたのだ。

「もしかして、先に『ガンダールブ』の話をしたのは、私との婚約を解消するためのつくり話なの？」

そこまで自信が無いのか。

外に心配がする。壁とすれている音がするから空をとぶメイジではなくてサイトだろう。

おかしな気になられては困る。サイレントをとなえた。

「いや、それは本当に関係ないよ。むしろ逆な話にする気もある。この任務が終わったら結婚してくれないか。ルイズ」

「それって、公爵家に入るってこと？」

「本当に最初の話さ。ワルド子爵家のぼくのところにきてくれないか」

ルイズが驚いている。

突然のプロポーズだ。驚くのも無理は無いよな。

「婚約者だといってもずっとほったらかしだったことは謝るよ。

しかしぼくは軍人だ。覚えているかい？ ぼくの父がランスの戦で戦死して……」

ルイズがわずかながら頷く。

「ぼくもいつ死ぬかは不明なんだ。ぼくが死ねば跡継ぎがいなくなる。」

そしてこの任務が終わってこのままならまたしばらくはルイズとあえる事もなくなるだろう」

「わ、わたし……。まだ……」

「もう、子どもじゃない。きみは16歳だ。」

自分のことは自分で決められる年齢だし、父上だって許して下さいる」

「ワルド……」

「きみには突然のことだっただろうから、今、返事をくれとはいわないよ。」

ただ、この旅が終わるまでにきめてほしい」

ルイズは頷いた。サイレントを解除すると、外からは2人の小声が聞こえてくる。

「それじゃあ、もう寝ようか。疲れただろう」

子爵家から公爵家に婚約の解消なんて申し入れることなんかいまさらできない。

公爵家からならすぐに了承、あるいは一方的の反故さえできる。

ルイズには、まだ話が早すぎたのだろうか。

もしかして、最初に『ガンダールブ』の話をしたのがいけなかっただろうか。

どちらにしても、このような遠回りな方法でしか言えないぼくが恨

めしい。

ルイズは小声がきこえたのか、窓際に行っている。

「野良犬同士」

とか聞こえてくる。これがルイズの素か。結構エレオノール様の生徒時代と性格が近いかもしれないな。

翌朝も早めに出発してルイズと並走したが、昨日ほどには話はずまない。

ほったらかしてあったのに、まだ脈があるということなのか。サイトとの関係を勘違いしたのだろうか。

それとも断りを入れるのに悩んでいるのか。

まあ、アルビオンまでにきまっていってくればいい。

そうすればどちらに転んでも、なんとかなる。

港町ラ・ロシエールに近づくとサイトの方では

「なんで港町なのに山なんだよ」

とか聞こえてきたが、キュルケやギーシュから説明されているようだ。

ラ・ロシエールでは、グリフォンとぼくの風の偏在が待っていた。簡単な報告と荷物を受け取って消えてもらった。

「えっ？　今のが風の偏在？」

キュルケが言う。タバサもこれには興味をもったのか視線を感じたが、タバサを見るとまた本を見始めた。

サイトは純粹に驚いていたようだな。

ちっ！ 悪い報告だ。フーケを脱獄させたのは良いが、フーケにつけた風の偏在がレコン・キスタの者に見張られているらしい。

予測の悪いほうになるな。まだレコン・キスタから信用を失うのは早い。仕方がないが、風の偏在は例の作戦で行くようだ。

ラ・ロシエールで一番上等な宿となっている『女神の杵』亭に泊まる。

すでにふくろう便を使って、明日の船も押さえているが念のためルイズと確認に行く。

サイトはきたがっていたようだが、キュルケにたわむられているのでルイズがへそを曲げているようだ。

やれやれ、これくらいの子の気持ちはよくわからないな。

今晚の部屋も、キュルケとタバサ、ギーシュとサイト、ルイズとぼくとなっている。

そして夕食後の夜、宿の1階の酒場で飲むことになった。

アルビオンへは明日ということになっているので、それを酒の肴にしているが、ルイズは2階に行っている。

作戦ではそろそろ、傭兵とフーケが襲ってくるはずだから、サイトにルイズの様子を見にいかせた。

ルイズが悩んでいるのは結婚のことだろうが、それにしても、引きずっていきすぎるような気はする。

何かを見落としているのだろうか。

そうして、その瞬間は来た。

外から集団の不規則な足音が聞こえてきたが、気がついていないふりをする。

玄関から傭兵の一隊が現れたので、魔法で応戦して、第一波を撃退

した。
二階でも破壊音がする。フーケがゴーレムでもあやつっているのだらう。

その間に手早く、床と一体化したテーブルの脚を折り、それを立てて盾にした。

その間にぼくは風の偏在を一体だしておく。

一応確信は無いが、タバサという偽名らしき名前にガリア王家にかいないと言われる青い髪の色から、タバサはガリア王家ゆかりのもの仮定しておこう。

それで何かあった場合、レコン・キスタから見て次の攻略地である、トリストインが先にガリアに乗っ取られている可能性を示唆すれば自己弁護としては充分だらう。

さらに傭兵隊の第二波がきたが、第一波でこちらの魔法の射程距離を把握したようだ。

こちらの射程外から弓矢を射掛けてくる。

その中で二階からルイズとサイトも降りてきた。

第一波の射程はわざと短くしているのでまだ射程距離内だが、まずは不要なメンバーをおいて行く必要がある。

ルイズが降りてきたので、低い声だが、外のゴーレムの上ののっているはずの風の偏在には聞こえる程度の声で言う。

「いいか諸君。このような任務は、

半数が目的地にたどり着ければ、成功とされる」

言葉を続けようと思ったら、こんな時でも、優雅に本を読んでいたタバサが本を閉じた。

そして、ぼくの方を向いて、ぼくとルイズとサイトをさして「棧橋へ」と呟き、残りのメンバーをさして「オトリ」と呟いた。

サイトではなくて、ギーシュをつれていこうと思ったのだが、サイトがギーシュから、ルイズがキュルケからさとされている。タバサからは「今すぐ」と言われ、入れ替えを説得すると、逆にあやしまれる可能性がある。

まあ、風の偏在がいるから、こちらは心配は無いだろう。

酒場から厨房に出て通用口にたどりついたところで、酒場から派手な爆発音が聞こえてきた。

「……始まったみたいね」

ルイズが言う。

ぼくは念の為にドアに身をよせて、ドアの向こう側の音と気配を探った。

「誰もいないようだ。棧橋はあっちだ。ついてこい」

ぼくが先頭で、ルイズを真ん中にして、サイトはしんがりを受け持った。

グラモン家のギーシュを連れて行くことと思ったのに、ぼくの構想と異なる展開に頭痛がしてきそうだ。

第三話 出航前に（後書き）

ワルドの中の人の認識ではサイトは26年後の人ですが、この作品ではサイトは中の人5年ほど前の人としています。

第四話 白の国へ

『女神の杵』亭の襲撃から脱出後、棧橋に向かった。サイトが何か言ってきたが、後ろから誰かがつけてくるのを感じる。

ぼくの風の偏在のはずだが、それともレコン・キスタか。丘の上にある棧橋へ向かい、樹の根元に近寄る。

そして、階段にかかっている鉄のプレートで目当ての階段を見つけたので、念のため前方も含めながら後ろを気にする。

後ろから、聞こえてくる足音は聞き間違いない自分と同じリズムを持つ風の偏在の足音だ。

気がつかないふりをして上にむかって駆け上がるが、ルイズにあわせているので本来の速さでは駆け上がれない。

そうしてサイトの足音が止まったことに気がいたら、サイトが叫ぶ。

「ルイズ」

ルイズの悲鳴が響く。

「きゃあー！」

後ろを振り向くと、黒尽くめの男がルイズを抱え上げていた。

ぼくの風の偏在の変装姿だ。マントも服装も黒く、こちらから顔は見えないが同じく黒い仮面をしているだろう。

髪の毛は今のぼくと違って短い。これだけで、ぼくのこの長い髪の毛と一緒に気がつかれない。

そして風の偏在が持っている杖は軍杖ではなく、ぼくがいつも予備

としてもっているワンド状の杖。
滅多に見せることが無いので、最近ではぼくが予備の杖を持っている事を知っている人間も少ない。
サイトが剣を振り上げているが、そういう場合は足元を狙うべきだろう。剣の戦いは素人か。

風の偏在はルイズを抱えたまま、ジャンプして下に飛び降りようとしているので『エア・ハンマー』の呪文で、風の偏在とルイズを分離させる。

そうして『フライ』でルイズを助けて、近くの階段に向かう。
レコン・キスタはどこまで情報を掴んでいるかは不明だが、一人消えてもらうしかない。

ましてや『遠見』の魔法でここを見られているかもしれないからな。ルイズの使い魔である『ガンダールブ』は残念だけれど。

その間にサイトは風の偏在に向かって剣を振るうが、それよりも早く『ウインド・ブレイク』で吹き飛ばした。

そしてサイトが立ち上がるうとしたところでインテリジェンスソードが「相棒！ 構えろ！」と言う。

そうして、こちらが階段につく頃にインテリジェンスソードが叫ぶ。

「『ライトニング・クラウド』！」

「ぐあああああああ！」

サイトは叫ぶが『ライトニング・クラウド』と剣のぶつかった瞬間に、オーラは大幅に減少したことに気がついた。

もしかしてジークがもっていたグラムと同じ類の剣か？ それにしては不完全だ。

『ウインド・ブレイク』程度の呪文は吸えないで『ライトニング・

クラウド』をかなり吸うとは。
ルイズは「サイト！」と叫ぶ。

ぼくは『エア・ハンマー』で、風の偏在を吹き飛ばす。
そのまま、下に落下していったが、風の偏在との接続が切れた感覚は無い。

無事着陸して、フーケの方にも行くのであろう。

さて、サイトだが、呼吸音も心臓音も聞こえてくる。

普通は『ライトニング・クラウド』をくらったなら、心臓停止するのにな。

ルイズがサイトの胸に耳をあてている。

そうしているうちにサイトの目が開いた。

「な、なんだあいつ……。しかし、いてえ……。くっ！」

インテリジェンスソードが言う。

「今の呪文は『ライトニング・クラウド』。

風系統の強力な呪文だ。あいつ、相当の使い手のようだな」

「くっ！ つう……」

サイトは苦痛なのだろう。顔をゆがめている。

「しかし、腕ですんでよかったな。

本来なら、命を奪うほどの呪文だぞ。

このインテリジェンスソードが、不完全とはいえ魔法を吸ったよ
うだ。

よく、こんな珍しいものを見つけてきたな。ケガの方はどうだ。

サイト」

そうすると、サイトは

「腕がいてえ」

「まあ、そうだろうな。大した役にはたたないが、水だ」

大気中の水蒸気を液体にする『コンデンセーション』を使ってサイトがケガをしている左腕に上着を濡らした。そうして、風の偏在をだしてしんがりにして、登って行った。ルイズからは

「最初からもう一体だせなかったの？」

「風の偏在を何体も出すのはつらいんだよ。」

今日はこれで昼と、先の宿と、今度ので3体目だ」

実際には先ほどの風の偏在もいるから4体を扱っている。

風の偏在は距離が離れると精神力をより多く使用するので、いつ魔力のタンクである精神力が空っぽになるのかは正確な把握をできない。

こういう長距離の時にはあまり精神力を使いたくないんだよな。

ちなみに、この棧橋につく前に一体が消えた感覚があるので、宿の方は無事解決しているのだろう。

そうでなければ、こちらにむかってくるはずだ。

登っていく先は『マリー・ガラント』号だ。

ルイズと一緒に棧橋で交渉した時に明日用には普通の客船を、レコン・キスタがいつ襲ってくるか不明なので、その時用にと選んで事前に風石を積み込んでもらった船だ。

もし風石を使わなかったら風石そのものも荷物扱いになるので、そ

の費用は前払いで払っている。

まあ、アルビオンでの硫黄の値段に比べると安いものだ。そうして、無事『マリー・ガラント』号にたどりついて、最初に交渉していた値段で出発だ。

グリフォンを呼びサイトの傷はこの船には水の秘薬はないとのことなので、水でしばらく冷やした後には包帯を巻く。

『マリー・ガラント』号の船長に改めてアルビオン王家、今では王党派の代表と言われているウェールズ皇太子のことを確認する。どうもニューカッスル城にもついているとのことだ。

レコン・キスタからきかされている最終情報も同じなので、そのあたりの情報は確かだろう。

そうして休息の為に、眠りについた。

朝起きて、この後のことを考える。

この船の目的地はスカボロー。そこから馬なら1日だが、グリフォンなら半日。

サイトは確かに速いが、戦い、特にメイジ相手についての戦いは確かに素人のようだ。

時間が無いことを理由に、スカボローからラ・ロシエールの『女神の杵』亭か魔法学院にでも戻っていてもらおう。

そうすると「アルビオンが見えたぞー！」との声がする。

ルイズがサイトにアルビオンの説明をしているようだ。

確かに壮大で優雅な眺めだが、またそのうち、どこかが欠けて落ちるんだらうなと思うと、あまり楽しい気分で見れるものでもない。

船長のところに行って、正確な到着予測時刻を確認していると、見張りの船員の大声が聞こえる。

「右舷上方の雲中より、船が接近してきます！」

黒くタールを塗った船体だが、舷側から20門以上もの大砲を積んでいる。軍艦か。

「空賊」との声が聞こえてくるが、通常空賊はここまでの装備を持たない。

レコン・キスタからの情報も軍艦を空賊として使っているという話は聞いていない。

考えられるのは、王党派の船か、王党派または貴族派から脱走して空賊をおこなっているぐらいか。

やっかいなのは、王党派から脱走して空賊になっている場合だな。しかし、それならば単純に貴族派に寝返れば良いだけか。

王党派ならそれでよし、貴族派からの脱走兵なら、予備の杖を隠しておけば、軍杖だけを杖と思われるだけであろう。

『ディテクト・マジック』をかけられたら、この船には悪いがルイズだけつれてグリフォンで逃げ出すか。

とりあえず、帆を破れば、おいかけてはこれまい。

隣にたつた船長からは、助けを求める視線を感じる。

「あの船と戦ってメイジがいた場合、長時間戦になる。

その間にこの船が落とされないとはい限らない。あの船に従うんだな」

船長は「これで破産だ」と呟いたが、死ぬことは考えていないようだな。

ルイズが気にかかったので、探すとサイトに寄り添っていた。

ルイズは無意識にサイトを扱っているのか。

恋か使い魔との相性かは不明だが、そちらの公算が高そうだな。

黒船には、弓や銃を持った男たちがいる。

貴族派からの脱走兵の可能性も消えた。あとは、王党派だが、確信

がほしいところだな。

そんなところで、サイトが剣を握っている。サイトに近寄って言った。

「やめておけ。敵は武器を持った水兵だけじゃない。

あれだけの門数の大砲が、こちらに狙いをつけているんだぞ。

戦場で生き残りたかったら、相手の力量と己の力量を天秤にかけ、わきまえることだな。おまけに、向こうにはメイジがいるかもしれない」

前甲板につなぎとめられているグリフォンの頭は青白い雲で覆われた。グリフォンは甲板に倒れ、寝息を立て始めた。

「眠りの雲……、確実にメイジがいるようだな」

頼みの綱にしていたグリフォンがやられた。ルイズをつれて逃げ出すとしたら、中につれていかれた後での室内戦だな。

いっぺんに相手をしなければ良いのと、それに知られていないが風石を使えばわずかだが風系統の魔法は威力を高められる。

地下に眠っている風石の研究をしていた先祖に気がついたものがない。

空賊たちが船に降り立って歩く足音は、軍人の癖を消そうとして消しきれしていない足音だ。

「船長はどこでえ」

空賊の頭に化けているらしい人間を見る。

ぼくは、その男のある特徴に気がついた。

そしてルイズに指示をしたが「なぜ？」「時間がないからすぐに」ということであるものを受け取った。

船長と話しているうちにその男が近づいてくる。

男が近づいてきて、ルイズに手を伸ばそうとした瞬間、ぼくは右手をその男の右手に伸ばした。

そうすると、ぼくの手の中にある水のルビーと男の手にある同じカ
ットで透明な石が、共鳴しあい、虹色の光を振りまいた。
驚いている男を相手に、ぼくは羽帽子をとって礼をする。

「これは失礼をいたしました。」

わたくしはトリステイン王国魔法衛士隊、グリフォン隊長、ワ
ルド子爵。

アルビオン王国ウエルズ皇太子ですね？」

「なぜ、きた、そうそうに、わかったのかね？」

その前にこちらからも名乗りを返さなければいけないな」

まあ、気がついたのは3年前の園遊会で風のルビーを目撃していた
のと、マザリーニ枢機卿に本物の見分け方を教わっていたからだ。
変装に使っていた、カツラや眼帯、作り物のヒゲを外して現れたの
は、凛々しい金髪の若者であった。

「アルビオン王国皇太子、ウエルズ・デューダーだ」

ポカンとしているルイズに、訳がわかっていなさそうなサイトを横
に、ウエルズ皇太子にはこのトリステイン籍の船の物資は正規で
の取引をお願いする。

船長には別に口止め料を支払った。

『マリー・ガラント』号から荷物が運びこまれている間に、王党派
の船である『イーグル』号の船長室に通されて、改めてルイズから
目的を話すことにする。

「アンリエッタ姫殿下より密書を言付かってまいりました」

ルイズは一礼して、手紙をウェールズ皇太子に手渡す。

ウェールズ皇太子は、手紙を受け取った後、真剣に手紙を読んでいますが、そのうちに頭をあげた。

「姫は結婚をするのか？」

あの、愛らしいアンリエッタが。私の可愛い……、従妹は」

ぼくは、無言で頭を下げ、肯定の意を表した。

「了解した。姫は、あの手紙を返して欲しいとこの私に告げている。何より大切な、姫から貰った手紙だが、姫の望みは私の望みだ。そのようにしよう。」

しかしながら、今、手元にはない。ニューカッスルの城にあるんだ。姫の手紙を、空賊船につれてくるわけにいかぬのでね」

ウェールズ皇太子は、笑って言う。

「多少、面倒だが、ニューカッスルまで足労願いたい」

そうして、船の開いている部屋へ通されることになったが、ぼくは伝えなければいけないことがあるのでその場に残った。

「まだ、何か御用がおりかな？ 子爵殿」

「恐れながら、アンリエッタ姫殿下とは別に

マザリーニ宰相より密書を言付かってまいりました」

そうして、あらためて手紙をウエールズ皇太子に手渡して読んでいたが、表情が苦しそうになっている。
ウエールズ皇太子から

「きみは、この手紙の中身を知っているのかね？ 子爵」

「はい。おおよそでございませうが。ウエールズ皇太子」

そうして、短いが中身の濃い時間が始まった。

第四話 白の国へ（後書き）

このサイトはタイミング的に、ワルドからルイズがプロポーズをされたことを知りません。

第五話 ウェールズ皇太子とニューカッスル城

ウェールズ皇太子は密書の内容について質問をしてくる。

まずは軽く2件ばかりの受け答え、多少しづられたがこれからが本題だ。

「このレコン・キスタで、死者が蘇るといふのは本当かね。子爵」

「はい。しかも、虚無だと申しております」

「虚無。まことに虚無なのか？」

「いえ、わかりませぬ。

ただし、わがトリステイン王国でも同様に死者が蘇る事件が30年以上前におこりました。

その時は水系統の禁呪であると言われております」

「言われているとは？」

「その件に関しての資料はロマリアに持って行かれました。

このことは異端とのことで、わが国ではこれ以上の情報を持っておりませぬ」

せっかく魔法衛士隊の隊長にまで登りつめたのに、蘇った事件については情報がほとんど残っていなかった。

しかし、このレコン・キスタの件について、ロマリアが動いている気配は無い。

レコン・キスタの総司令官であるクロムウェルが虚無の使い手であることは公になっていないが、異端であるならば何かを言ってくる

はずだ。

虚無であれば、ロマリアが動かないのも不思議ではある。今は、動向を探っているところなのだろうか。

マザリーニ枢機卿もこの件については固く口を閉ざしている。聖地にはやはり蘇りに関する何かがあるのであるだろうか。

「風のルビーに関しては、あとでラ・ヴァリエール嬢にお渡ししよう。」

しかし、始祖のオルゴールは持ってはいないのだよ。財務監察官の城に残っているはずだ」

「ありがとうございます。その情報を手できたばかりでも十分でございます」

「きみは本当にレコン・キスタへ間諜として入っていくつもりなのか？」

直球できたか。ルイズのことはさておき、聖地を目指しているレコン・キスタに興味はある。

「はい。それがわたくしめの任務でございます」

「なるほど！ きみのように立派な貴族が、私の親衛隊にあと十人ばかりいたら、

このような惨めな今日を迎えることもなかったであろう」

どちらかというところ、こちらの任務の方が、ラ・ヴァリエール公爵家に入るより楽だと思えただけなんだがな。

勘違いしているなら、それを訂正することも無いだろう。

「しかし、トリステイン王国は何を考えているのだ。私に亡命を勧めてくるとは」

「理由は手紙に書いてあるはずですが」

「よりにもよって、姫の婚姻後には、私をトリステイン王国の王にと?」

「殿下もご存知のはずです。わがトリステイン王国の前王は、

現アルビオン王の弟君でございます。それゆえ、わが国では反発も少ないでしょう」

王位につけるほどの優秀な人間がいれば、今頃はそのものが王になつていたはずだ。

わがトリステイン王国には、その王になる素質を持つ者が欠けている。

いまだ、アンリエッタ姫殿下の手紙をもっているような皇太子よりも劣る。

「それと、姫殿下がゲルマニア皇室に嫁ぐまでは、亡命も公にはできませんぬ」

「私がトリステイン王国で王になれば、トリステイン王国に攻めてくるのであろう?」

「レコン・キスタの狙いは、貴族の連合によるハルケギニア統一と、聖地を取り戻すことです。遅かれ早かれ、トリステイン王国は狙われます。」

逆にガリア王国とゲルマニア帝国、それにわがトリステイン王国の3国から

貿易封鎖をおこなえば、レコン・キスタは1年ともたずに塩が不足するでしょう」

「我々は勇気と名誉の片鱗を貴族派『レコン・キスタ』に見せておらぬ」

「貴族とは、王家を守ってこそその貴族でございます。」

レコン・キスタの貴族は、貴族の風上にもおけぬやからでございますしょう。

また、王家がなければ、貴族も存在しないのでございます。
わがトリステイン王国に亡命を。殿下」

「しかし……」

「最後は、どうなさるおつもりですか」

「私は、真っ先に死ぬつもりだよ」

「そして、蘇らされて、何かをさせられるのでしょ」

「……しばらく、考えさせてくれ」

2通の密書は焼かれて、船の中での密談は終えた。

船長室での密談を終えて甲板にでたら『マリー・ガラント』号を曳航していた。

ニューカッスル城から女性・子供を脱出させるためだと言う。

レコン・キスタからの情報では、事態はそこまで逼迫していなかつ

たはずだが。

皇太子の副官がよくできた人物だな。この『イーグル』号の本来の船長か。トリステイン王国の艦隊に組まれたら、どれだけの機転を効かせてくれるだろうか。

『マリー・ガラント』号の船長もほくほく顔だ。よっぽともうけたのだろう。

2隻はアルビオン大陸の下側をもぐるようにして、ニューカッスル城の地下に作られた港に到着した。

到着までにウエールズ皇太子は何気ない顔をしていたが内心はどうなのであるうか。

港にいたバリーと呼ばれた老メイジが語る。

「栄光ある敗北ですな！ この老骨、武者震いがいたしませんぞ。

して、ご報告なのですが、叛徒どもは明日の正午に、

攻撃の開始する旨、伝えて参りました。

まったく、殿下が間に合って、よかったですわい」

「してみると間一髪とはまさにこのこと！

戦に間に合わぬは、これ武人の恥だからな！」

アンリエッタ姫殿下の手紙が、ウエールズ皇太子のところにあるかもしれないと、レコン・キスタには情報を流しておいたのだが、信じられなかったのだろうか。

それとも、部下の戦意を抑えることができなくなってきたのか。

だと、するとレコン・キスタも所詮は烏合の衆といったところか。

ウエールズ皇太子から、バリーにぼくたちのことを伝える。

「トリステインからの大使殿だ。重要な用件で、王国に参られたの

だ
」

「これはこれは大使殿。殿下の侍従を仰せつかっております、バリーでございます。

遠路はるばるようこそ、このアルビオン王国へいらっしやいました。

たいしたもてなしはできませんが、今夜はささやかな祝宴が催されます。

是非とも出席くださいませ」

そのあとは先に寝室となる部屋に通され、荷物を置いてからウエールズ皇太子の居室に通された。

ウエールズ皇太子は、封筒と風のルビーをルイズに手渡した。

「これが姫からいただいた手紙だ。このとおり、確かに返却したぞ」

ルイズが戸惑っている。

「それと、風のルビーはトリステインの次なる王に渡るようにしてほしい」

「ありがとうございます」

ルイズが深々と頭を下げると、その手紙と風のルビーを受け取った。そのあと、ルイズは言うかわないか迷っていたようだが、ウエールズ皇太子に戦争のことやら、恋文のこと、そして亡命を勧めている。

ウエールズ皇太子は動揺したそぶりもなく、笑いながら戦死することや、恋文であることを認めて、アンリエッタ姫殿下から亡命を勧

められたことを認めない。
最後にルイズの肩を叩いた。

「きみは、正直な女の子だな。ラ・ヴァリエール嬢。
正直で、真っ直ぐで、いい目をしている」

ルイズは、寂しそうにうつむいた。

「忠告しよう。そのように正直では大使は勤まらぬよ。
しつかりなさい。しかしながら、亡国への大使としては適任かも
知れぬ。」

明日に滅ぶ政府は、誰より正直だからね。
なぜなら、名誉以外に守られるものが他にないのだから」

ウェールズ皇太子が「名誉」と言ったところが悲しげに聞こえる。
亡命を決めていただけてくれたのであろうか。

「そろそろ、パーティの時間だ。
きみたちは、我が王国が迎える最後の客だ。是非とも出席して
ほしい」

ルイズたちは部屋の外にでた。ぼくは居残って、ウェールズに一礼
をした。

「きめたよ。子爵殿」

ぼくは、その内容を確認した。

パーティーは城のホールで行われた。明日は、多分玉砕を覚悟しているのだろう。

このアルビオン王国のジェームズ1世の演説にも、動じずに貴族としての名誉を守ろうとしている。

王のいないトリステイン王国に、ぼくはそこまでの覚悟ができるであろうか。

その中でも明るく振舞っているパーティーの中を、ルイズとサイトが抜けて行った。

ルイズは、こちらの普通の女の子の感性をもっているのだろう。

サイトがよくわからないな。ロケットランチャーを扱えるのに、これぐらいのことで動揺しているようにも見える。

ぼくの前世の死後、日本はどのようにかわったのであろうか。ぼくの子どもが、前世の記憶を持つとは限らないらしい。

今までは、母さまの前は男性ばかりが前世の記憶をもって産まれてきた。

それに対して、ぼくは6歳になってから記憶を取り戻した。はたして、結婚したときに産まれて来る子はどのようになるのであろうか。そういえば、ルイズの方もそろそろ決着をつけておかないと。ただ、明朝かな。

パーティーをぬけだして、サイトを探す。サイトの寝室となる部屋をたずねたがいなかった。

ルイズといるのか。無理をして今あうこともなからう。時間かせぎのつもりで風の偏在をレコン・キスタへ走らせ手紙があることを伝えにいかせた。

翌朝食の後、ルイズを誘った。単刀直入に聞く。

「結婚のことだけれど、考えてくれただろうか。ルイズ」

「え？ 姫さまの任務が終わるまで待っていてくれるんじゃないの？」

うかつだった。ぼくは、このレコン・キスタに入る時点が実質この任務を抜け出す期間だと思っていた。

「すまない、ルイズ。ぼくは、もう少しここに残らなければならぬい。

きみの護衛には風の偏在をつけよう」

ぼくがもどらなければレコン・キスタに通じていたこととするために、レコン・キスタとのやりとりをした羊皮紙がぼくの家から見つける手はずになっている。

「もう、しばらく会うことも無いだろう。

虫の良い話だったよ。ごめん、ルイズ」

「わたしの方こそ、ごめんなさい。ワールド。憧れだったのよ。もしかしたら、恋だったのかもしれない。でも……」

「でも？」

「あなたは家のことばかり。

わたしのことを気にしてくれているのはうれしかったけれど、あなたが見ているのは家だわ」

うん。その通りだ。ぼくは少しばかり考え、少々、後は怖いが

「婚約は解消させてもらおうよ。」

そのうち行けたら、君の父上、母上にも婚約の話は断りにいくよ。ルイズ」

「そんなことは、させられないわ。これでも公爵家の娘よ。子爵家から断られるなんて……」

いや、エレオノールさまの例もあるからな。

ルイズとは婚約を解消することになった。

ぼくは、レコン・キスタに潜入するために別行動とすることにした。風の偏在を護衛のためにルイズのそばへおいて。

ルイズたちが、船への乗船をまっけているころ、その近くの地面が盛り上がった。

「なんだ？」

サイトが地面をみつめた。

「敵か？ 下からきやがったか？」

まわりの女・子どもがその声に驚き、まわりに散っていきこうとしたところで茶色の生き物が顔を出した。

「あああああん？」

「お前……、巨大モグラのヴェルダンデじゃねえか！ たしかギーシュの使い魔の！」

その茶色の生き物はジャイアントモール。ルイズを見つけるとうれ

しそつに近寄っていったが、風の偏在にふきとばされていた。ヴェルダンデがでてきた穴からは、ひよこつとギーシュが顔を出した。

「あれ？ 鍾乳洞？」

ギーシュに続いて、キュルケがでてきた。

ここがニューカッスル城の秘密の港だとわかると、キュルケが穴にもぐって、タバサとシルフィードがやってきた。

2隻の船は混んでいるので、シルフィードに載って6人はトリストニアへ向かって帰って行った。

そんな間にぼくはレコン・キスタへ行く準備をすすめていた。

第六話 虚無なのか？

現在シルフィードにのった一行は、王都トリスタニアにある王宮に直接向かっていた。

魔法衛士隊のマンティコア隊隊員から、現在飛行禁止であることを大声でつげられたが、タバサに「無視してかまわない」とつげる。タバサは何も反応せず、元々その気だったようだ。

風竜の速度は速いが、昨晚レコン・キスタから受けた命令が気になる。

8-2で、多分大丈夫だと思うが、なるべくなら、風の偏在であるぼくの身を早めに消して、本体への精神力の消費を減らしたかった。こうして王宮の中庭へと着陸すると、当然のことながらマンティコア隊にかこまれたが、マンティコア隊隊長であるゼツサルがいた。運が良い。

「ゼツサル殿。悪いがこの者たちを姫殿下の元へ案内してやってくれ。」

もしくはマザリー二枢機卿へ先に聞いてもらってほしい」

そう言うっておけば、ぼくの本体が間諜として、レコン・キスタに入るかもと告げているゼツサルなら大丈夫だろう。

そうして、風の偏在であるぼくは消えた。

王宮までたどりついたギーシュが「どうして、ぼくの知っている過去と違うのだろうか」と小さく呟いたが、まわりでは誰も気がつかなかった。

ニューカッスル城では、ぼくはやるべきことを終えて、レコン・キ

スタの元に走る。

昨晚レコン・キスタからもどってきた風の偏在は、本日の戦いは正午ではなくて10時間開戦とのことだった。

レコン・キスタが攻城に要した時間はわずかだった。

最初はウェールズ皇太子が攻撃をしかけて、魔力がきれたら、黒色火薬の上で敵もろとも自爆する予定だった。

それをかえざるを得なくなったのだ。うまく行くようにと思いつながらの實行。多少賭けだが、分の悪くは無賭けのはずだ。

しかし、ルイズの使い魔であるサイトの持っていたインテリジェンスソードが気にかかっていたのに、調べられなかったのは残念だ。

古い魔法具の中には、ショックを与えれば元の機能を取り戻すことがある。

あのインテリジェンスソードもそうだったかもしれないのに、時間の関係で忘れていた。

戦果の報告をしにこの戦場での司令官に、アンリエッタ姫殿下からウェールズ皇太子へあてた手紙を封書にて手渡した。

「トリステイン王国の大使からスリ替えました手紙でございます」

「そなたは、下がってもよろしい。ワルド子爵」

「御意」

手紙だが、別にスリ替えたわけではない。マザリーニ枢機卿からの依頼の中で、ウェールズ皇太子にアンリエッタ姫殿下の手紙を半分にしてもらっただけだ。

冒頭のあいさつ部分がこちらで、肝心の危ない恋文の部分はルイズが持って行った。

昨晚のレコン・キスタからの依頼事項も達成していることになるが、どうなることやら。

こうして下がり、風の偏在につれられてくるはずの「フーケ」を迎えにアルビオンの首都、ロンディニウムへと馬で向かった。

途中で、風の偏在が一体消えた感触はあったが、時間的にはトリスタリアへ向かった方だろう。

気が早すぎる奴だな。けれども、元はぼくかとも思う。

翌晩、約束していた酒場に行くと、ぼくの風の偏在とフーケがきた。ぼくの風の偏在はまだ黒い仮面をしている。どれくらい話したかというとも何も伝えていないと言う。

そうして、風の偏在には外へでてもらった。今晚は特に用事もない。風の偏在にも意思はある。

今晚限りの消えるまでの自由だが、元はぼくだ。最後まで自由には遊ばせてやりたい。

酒場ではフーケことマチルダには、ダミアン・オブ・サウスゴータと魔法学院時代の悪友だと言う話をしたがピンとはきていなかったようだ。

魔法学院時代の偽名に「フーケ」という名前を使っていたと言ったから「知っていたらこの名前は使わなかった」と言う。

まあ、そうだろうな。ダミアンとマチルダは特に仲の良い兄妹というわけではなかったようだが、今となつては懐かしい思い出なのだろう。

マチルダも『聖地』の話ではわずかに反応するが、ダミアンほどではない。

何か『聖地』に関する情報を持っている可能性があるので、サイレントをかけてあらためて話をした。

「ところで『聖地』に関して、ダミアンは情報を

集めようとしていたのだけど、何か知らないかな。マチルダ」

「別に。エルフが好きにいるだけでしよう。

「だいたいこの何百年も『聖地』を奪還しようとして兵を送ったのに敗北ばかりよ」

「けれども、ダミアンが、興味を持っていたのだけれどね」

「魔法学園での偽名が「フーケ」というのも知らなかったのよ。

「兄が何で『聖地』に興味を持ったなんかは知らないよ」

「そうか」

言葉の韻に嘘が含まれているのを感じるが、今は追及しても仕方がないだろう。

「そういえば、さっきの黒い仮面の男といい、あなたは魔法衛士隊長だろう。」

「いったい、トリステイン貴族ってどうなっているんだい」

「ああ、あの黒い仮面の貴族は、まあ、今は教えられないな。

「それともこれ以上、深くレコン・キスタの中枢に入りこむ気かな」

「どういうこと？」

「レコン・キスタの表面だけで抜け出せる状態にいるか、中枢に近づいて抜け出すこともできなくなるかだよ」

「ここまで引つ張り込んでおいて、今度は抜け出せる？」

「トリステイン貴族って本当に命令できないのね。そんな男は嫌い

だわ」

風の偏在も同様に選択をせまったのか。命令すれば、マチルダはついてくるのか？

身近にいれば、うまく一緒に抜け出させることもできるだろう。

「それならば、ぼくと一緒に来い。

それとあの黒い仮面の貴族は、ぼくの風の偏在だ」

「……通りで、背格好とか、口調とかにしていたのね。ついていくわよ」

「契約成立だ」

「ところで、レコン・キスタを抜け出せる状態とかってどういうこと？」

「ぼくも今の段階ではマチルダを完全には信用できない。

「ああ、普通に考えれば、トリステイン王国までは簡単に落とせるだろう。」

「次のゲルマニア帝国も何とかなるだろうが、ガリア王国だけは無理がある」

「それじゃあ、やっぱり無理じゃないの？」

「あそこは、無能王と貴族からは軽んじられている。

そして、どうも内紛の火種を抱えているという噂がある。

そこをつけばレコン・キスタにつくかもしれない」

「意外と簡単そうじゃない」

「実際には、素直にそう動いてくれるとは限らない。

まあ、そこまでいけるのは五分五分といったところかな」

「そんな賭けに貴方はなぜのつたの？」

「『聖地』だよ」

「そんな風には見えないけれどね」

「そちらも隠し事をしているのだろう。お互い様さ」

そうして酒場で、食事をした後には宿へと戻った。

翌朝、シート上の血の跡を錬金で消しているマチルダがいた。

「ほくも土系統を少しは使えるようになってきたが錬金ではない。

「そういえば、この世界で素人は初めてだったよな、と改めて考え込んでいるとマチルダにけりを入られた。」

「こんな恥ずかしいところ、いつまでも見ているんじゃない！」

ニューカッスル城に向かうと、兵士たちが未だに財宝漁りにいそいでいる。

その中へぼくはいつもの羽帽子とグリフォン隊の制服姿で「フーケ」はフードを目深にかぶった姿で入っていった。

戦跡の検分だ。フーケの方を見ていると王党派の死体から装飾品や武器を奪い取っているところを見て、舌打ちをならした。

「アルビオンの王党派は仇だろっ？」

「そうね。そうなんだけどね」

そしてだまつたまま、礼拝堂の跡地に近づいて行く。

ぼくは少しはなれたところから『ストーム』で小さな竜巻をつくり、辺りの瓦礫を飛び散らす。

「あらら。懐かしのウェールズさまじゃない」

フーケが驚いた声をあげた。そうだよな。フーケは元アルビオン貴族だから顔を知っていても不思議ではないな。

始祖ブリミル像と、椅子のはさまれた間にウェールズのなきがらがあつた。

つぶれない頑丈なところを探していたら、ここがちょうどそのような配置だった。

なにせ、なるべく傷を付けないようにとの注文だったからな。

このあと、レコン・キスタの元総司令官、今は皇帝であるオリヴァー・クロムウエルがくるはずだ。

単純にクロムウエルを殺して終わりなら楽なのだが。

そうしているうちに遠くからぼくたちに声がかけられた。

「子爵！ ワルド君！ ウェールズ皇太子は見つかったかね？」

手紙の方はすでにクロムウエルに渡っているはずだが、特に何も言われないな。

普通に考えれば、そんな危険なものをいつまでも持っているだなんて、本気で考えていなかったのだろう。

「閣下！ ウェールズ皇太子ならば、そちらに」

「おお。親愛なるウェールズ皇太子じゃないか。彼は、ずいぶんと余を嫌っていたが……」

こうして見ると不思議だ、妙な友情さえ感じるよ。

ああ、そうだった。死んでしまえば、誰もがともだちだったな」

そう。そうして、このウェールズ皇太子を蘇らせようとするのだろ
う。

多分、成功はしないと思うのだが。

クロムウェルにはフーケの紹介をし、長々とレコン・キスタの意義
を聞かされている。

そして、肝心な話がきた。

「魔法の四大系統はご存知かね？ ミス・サウスゴータ？」

フーケは頷いている。

「その四大系統に加え、魔法にはもう一つの系統が存在する。

始祖ブリミルが用いし、零番目の系統だ。

眞実、根源、万物の祖となる系統だ」

「零番目の系統……、虚無？」

「余はその力を、始祖ブリミルより授かったのだ。

だからこそ、貴族議会の諸君は、余をハルケギニアの皇帝にする
ことを決めたのだ」

クロムウェルは、ウェールズの死体を指差す。

「ワールド君。ウェールズ皇太子を、是非とも余の友人に加えたいのだが。」

彼はなるほど、余の最大の敵であったが、だからこそ死して後は良き友人になれると思う。

異存はあるかね」

ぼくは、多少の不安をかかえながらも首を横に振る。

「閣下の決定に異論が挟めようはずもございません」

「では、ミス・サウスゴータ。貴方に『虚無』の系統をお見せしよう」

クロムウエルが杖を引き抜き、低い、小さな詠唱を行っているのが聞こえてくる。

しかし、オーラが増量していく感じはしない。

虚無の系統というのは先住魔法と同じなのであるうか？

先住魔法の場合、人間の魔法に近いと人間と近いオーラを感じるが、異なるとオーラを感じない。

詠唱が完成したらしく、クロムウエルがウェールズの死体に杖をふる。

しかし、何もおこらなかった。あせったように再度、クロムウエルが魔法をかけたが同じ結果だ。

「閣下！　もしやお疲れなのでは？」

「うむ。そうだな。ミス・サウスゴータに見せられなかったのは残念だが、また後日お見せしよう」

そうして、クロムウエルがふと、立ち止まり、振り向いて言った。

「ワルド君。手紙の件だが、安心したまえ。同盟は結ばれてもかまわない。

どのみちトリステインは裸だ。余の計画に変更は無い」

ぼくは、手紙の件は無しとしてくれたかとほつとしながら会釈をする。

「外交には2種類あってな、杖とパンだ。

とりあえずトリステインとゲルマニアには暖かいパンをくれてやる」

「御意」

「トリステインは、なんとしてでも余の版図に加えねばならぬ。

あの王室には『始祖の祈祷書』が眠っておるからな。

聖地に赴く際には、是非とも携えたいものだ」

そう言つて、クロムウエルは去つていったように見えたが、壁の向こう側からクロムウエルと女性の声が聞こえてきた。

耳をすませると「私を使い魔として紹介しなさい」と言うのが聞こえる。

クロムウエルについていた謎の女性だが、彼女の方が立場は上のようだ。

しかし、使い魔？ そう思っているうちにクロムウエルが20台半ばと思える女性をつれてきた。

こちらの世界では見たことも無い、細いぴったりとした黒いコートを身にまとっている。

「ワルド君。彼女は、ミス・シエフィールド。

私の秘書となっているが、実際には私の使い魔だ」

「人間が使い魔とは珍しいですね」

横でフーケはだまっている。

「主の虚無の魔法が効かぬというのは異例なこと。そこでわたくしめの出番です」

そうやって、シェフィールドはウェールズの死体へと近づく。ぼくも半分興味をもちながら近寄ったが特に何も言われない。

そして、ウェールズの死体に近寄って手で触れていると、シェフィールドの額が光りだした。

サイトが剣を持ったときのように古代のルーンが光っている。

クロムウエルとの先の会話を聞く限りでは、クロムウエルの使い魔では無い。

このシェフィールドを使い魔として呼び出した主人が、レコン・キスタの本当の支配者なのだろう。

どうやって、そこをさぐるのかと置いていたら、ウェールズの死体が急速に小さくなって、人形になった。

小さな魔法人形であるスキルニルだ。

ウェールズ皇太子との会見で一番最初に頼んだのは、ウェールズ皇太子から血をもらうこと。

理由はあとで話すからと、しぶしぶながらも、貰い上げた血を入れた。

万が一、スキルニルが蘇らせられたときに、理由を知られてはまずい。

また、その時に、この蘇えらせる力の方が強いのか、スキルニルへ血を入れた人間からの命令を聞く力と、どちらが強いかわからないから

だ。
ここで、スキルニルの口から本当のことが漏れたら逃げ出すしかないだろう。

しかし、スキルニルを人形に戻すにはルーンで戻すしか手が無いのに、それをとれないで元に戻すとはこのシェフィールドという使い魔はどんな力をもっているのだ。

シェフィールドからは「どうも、ウェールズ皇太子には逃げられたみたいですね」と言われる。
ぼくは頷くしかなかった。

「ワールド君。そのようだね」

多分、信用度は落ちてても殺されることは無いだろう。

「閣下。ウェールズ皇太子がスキルニルと気がつかなかったのは、私のミスです。

申し訳ありません。なんなりと罰をお与えください」

「なに。余も気がつかなかったのだ。君だけの責任ではない。

それよりも、『結束』だ！ 鉄の『結束』だ！

『結束』には、なによりも信用が第一だ。

だから余は子爵、きみを信用する。些細な失敗を責めはしない」

ぼくは、その演説に心をうたれたふりをして深々と頭をさげる。
クロムウェルとシェフィールドが去っていったのを確認するとフリーケが尋ねてくる。

「一体全体何があったのさ。わたしにはさっぱりだよ」

「ああ。本当なら、閣下が虚無の魔法でウエルズ皇太子を
生き返らせようとしたのだが失敗した。

閣下の使い魔がウエルズ皇太子はスキルニルであることを
見破ったということだろう」

スキルニルを見破られるとは予想外だったが、結果オーライか。

さて、レコン・キスタはウエルズ皇太子がどこに行ったかわかる
だろうか。

第七話 変装の術は

サイトはブリミルの使い魔のルーンで左手に現れた。『ガンダールブ』は『武器』を使いこなす。

シエフィールドは額にルーンか。『魔法具』を使いこなすのと、『獣』を操るのが始祖ブリミルの使い魔だったよな。

王立図書館には『ガンダールブ』のことしか残っていなかったのに、魔法学院にあった本ではそんなことが残っていたのを思い出す。

しかし、本当に魔法以外の体系化はすすんでいないよな。考え込んでいるうちに、フーケがたずねてきた。

「ウエールズ皇太子はスキルニルであることを見破った。

あなたは、そう言ったわよね。ワルド」

「ああ。言ったよ」

「もしかして、あなたは知っていたのかい？」

まずい気がする。しばらく、まともな女性とつきあっていなかったから、女の勘が鋭いというのを忘れていた。フーケの目が獲物を狙っているように見える。

「いや、知らなかったよ」

「今、返事をするまでに間があつたね」

確信をもたれていそつだ。覚悟を決めてみるべきか。

「……………今晚まで、その話は待ってもらえるかい？」

せめてサイレントがかけれるところで」

「案外、簡単に決めたね。それくらいなら夜まで待つわよ」

ひとまずの危機は脱出したようだ。

けれども、今晚までに話すべきことをまとめられるだろうか。

夜になってアルビオンの首都、ロンディニウムで指定されているアパルトマンへ入った。

フーケとは隣の部屋だ。部屋へ訪れるのは男の役目。

結局考えたも良い手はうかばず、フーケの部屋をたずねる。

盗聴の危険性を考えて、サイレントをかけた。

「ウェールズ皇太子がスキルニルだった話について聞きたいか？」

「命令できない男は嫌いって何回言わせるの？」

そう、言われるということとは、まだ嫌われていない？

どこまで話すかだ。最悪の場合は、フーケに気絶してもらって、風の偏在にどこかへつれていかせるか。

「ウェールズ皇太子は生きている」

「それくらいは、わかるわよ」

「今はしかたがなく貴族派についていると思われる貴族の説得をおこなおうとしているよ」

「馬鹿だね」

「ああ、馬鹿な行動だ。

けれども、ウェールズ皇太子が目撃されたら、どうなると思うっ？」

「レコン・キスタが動き出して、それで捕まえるか殺して終わりじゃないの？」

「それがスキルニルだったらどうだ」

「ややこしくなりそうね」

「そういうことだ」

「そうすると、ウェールズ皇太子はどこにいるのさ」

「ぼくも知らないよ」

少し間をおいてからフーケが言うてくる。

「ここまできたら、つきあうわ。

だからわたしにも、もう少し本当のことを話してくれないかい」

「そちらでも『聖地』に関して隠していることを話してくれるなら話してもいいぞ」

「さあ。それは本当に知らないよ」

「今は裏切らなければいい」

「信用されていないのかい」

「『聖地』に関する隠し事をしていなければね」

「お互い様ってことかい」

「その通りだ」

フーケが裏切らないことがわかっていれば良い。

フーケも元は貴族だ。どんなに嫌っているかもしれないが。

ダミアンから聞いていたのは、アルビオン貴族の女性は情に厚いと聞いている。

そうして、フーケことマチルダの部屋で一晩を過ごした。

翌日は、正式にアンリエッタ姫殿下とゲルマニア皇帝アルブレヒト

三世との婚姻が発表された。

婚姻は1ヶ月後で、軍事同盟も締結された。

まあ、ここまではマザリーニ枢機卿から聞いていた規定路線だ。

その翌日にはアルビオンの新政府、アルビオン帝国初代皇帝クロムウエルから公布された。

クロムウエルはトリステイン王国、ゲルマニア帝国へ特使を派遣して不可侵条約の締結を打診した。

両国からの返答に多少の時間はかかったが不可侵条約の締結を受ける旨の連絡があった。

トリステイン王国、ゲルマニア帝国が不可侵条約の締結を受けるまでにウエールズ皇太子が現れたという報告が新政府であるアルビオン帝国に流れだす。

いざ、つかまえようとして移動すると、別な領地の町でみかけたという噂が流れ出してきた。

そうしてウエールズ皇太子のスキルニルの行動だが、それほどにはアルビオン帝国では脅威にみられなかった。

ぼくとしては残念だが、化けたスキルニルを戻すルーンが公布されたのだ。

シエフィールドにウエールズ皇太子がスキルニルであることを見破られたのが、ここにきて大きい。

こういう情報もゲルマニアのジークから買った報告書で記載されていた情報屋経由で、マザリーニ枢機卿に届く手はずになっている。

風の偏在がウエールズ皇太子から教えてもらった元財務監察官の城だったところから、始祖のオルゴールを見つけたのでマザリーニ枢機卿に送ってある。

元々を考えたのはマザリーニ枢機卿だしな。

ぼくにはそこまで考えることはできないし、道具も用意はできない。ぼくにできるのは実際の戦場での攻防だけだ。

さてシエフィールドだが、アルビオン空軍工廠の街口サイスにこもっている。

どうやら新造戦艦の新兵器を担当しているらしい。

マチルダに接触をさせてみようかと思っただが、相手は魔法具使いだと思われる。

下手な接触は、逆に監視される羽目になるかもしれない。監視されるだけならまだしもだが。

マチルダは、ぼくがおこなっている毎日の鍛錬を暇そうにながめている。

「毎日、訓練していてあきないのかい？　ワルド」

「軍人の業みたいなものだな。」

「こうしないと肉体と精神のバランスがとれないのさ」

「ふーん。わたしには、理解できないね」

「あー。理解できない方が幸せだと思うよ」

もういつたい何人を殺したのだろうか。敵の死にとってしか成り立たない命。

軍人になるときめたとはいえ……最初の殺人をおかす時に、自らの命を絶つだけの勇気を持てなかったから……。

さて、情報を一方的に送るのは良いのだが、マザリーニ枢機卿から返事がこない。

最初の現場判断優先で良いのだろう。

戦術的なことならわかるが、魔法衛士隊では戦略的なことは習わないからな。

アルビオンでトリステインの間諜活動をしながらも困っているところで、アンリエッタ姫殿下とアルブレヒト三世との婚姻に対する『親善訪問』の中身を説明された。

『親善訪問』での祝砲に対して実弾を撃たれたとして、攻撃をするとのことだ。

マザリーニ枢機卿に報告をするが、間に合うだろうか。

マチルダが地理に不案内なアルビオン軍のために、斥候隊に派遣されるという。それなのに、ぼくはクロムウェルについて歩けとのことだ。

地理なら、マチルダよりぼくの方が知っていると自負はある。まだ、レコン・キスタに信用されていないのだろうか。長らくトリステイン空海軍は戦っていない。アルビオン空軍には知られていない秘密がある。それだけで今回の『親善訪問』に対抗できるであろうか？ トリステイン王国を守るなら何か手をうたないといけないな。

本日は『レキシントン』号へクロムウエルとやってくる。

まるで隙だらけだが、実際にはシエフィールドを呼び出した人間のクグツなのだろう。

シエフィールドを倒しても、その呼び出した本人を倒さなければどうにもならない。

しかし、シエフィールドには、その主人らしき人物と接触している気配が伝わってこない。

あの額にうかんだルーンは、ブリミルの使い魔である『魔法具』を使いこなすルーンとは違うのだろうか。

そうしてこの船の偽装主任で、次期艦長予定のヘンリ・ボーウッドが『ロイアル・ソヴリン（王権）』を言ったことに気がついた。

クロムウエルも気がついたのか『ロイアル・ソヴリン（王権）』は存在しないとこたえている。

ヘンリ・ボーウッドは「祖国を裏切るつもりか」などとつめよったが、クロムウエルはのりくらりとレコン・キスタの演説を始めてその場はおさまった。

クロムウエルがヘンリ・ボーウッドをあしらった後に、ぼくへ話しかける。

「子爵、きみは竜騎兵隊の隊長として『レキシントン』に乗り組みたまえ」

「目付け、というわけですか？」

先ほどのヘンリ・ボーウッドの様子から見ると純粋なレコン・キスタ派ではなさそうだ。

しかし、クロムウエルは首を振ってぼくの憶測を否定した。

「あの男は、決して裏切ったりはしない。

頑固で融通はきかないが、だからこそ信用できる。

余は魔法衛士隊を率いていた、きみの能力を買っているだけだ。竜にのつたことはあるかね？」

ジークが召喚した火竜を載りまわさせてもらった記憶はある。

そうして魔法衛士隊に所属する隊員の幻獣とは、なぜか好かれることも思い出す。

「火竜ならばあります。

しかしわたしがトリステインを狙うならば風竜がよいでございます。しょう。

風竜でものりこなせる自信はあります」

「だろうな」と言っただけでクロムウエルは微笑んだ。それから不意にクロムウエルはぼくの方を向いた。

「子爵、きみはなぜ余に付き従う？」

「わたしの忠誠をお疑いになりますか？」

「そうではない。ただ、きみはあれだけの功績をあげながら、何ひとつ余に要求しようとはしない」

「功績と申しあげていただけますか」

「そうだ。あれは余でも見抜けなかったものだ。しかたがあるまい」
ぼくはにっこりと笑い。半分は本音ながら答える。

「わたしは、閣下がわたしに見せてくださるものを、見ただけです」

「『聖地』か？」

ぼくは頷く。

「わたしが探すものは、そこにあると思いますゆえ」

「信仰か？ 欲が無いのだな」

そういわれた後に、父の遺品となった首から下げられた小さなペンダントをいじった。

そこには、母さまの若い頃の肖像画が描かれている。

少しばかりその肖像画をみたあとに言うかわらないか悩んだが簡単に答えることにした。

「御意」

こうして、いつもの『親善訪問』までに時間が無い中で作戦をたてていくことにした。

マチルダを含めて。サイレントをかけた後に、作戦そのものへの異

論はでなかった。

しかし「ゲルマニアに用意をしてある隠れ家で隠れていれば良い」というところで簡単にOKするかと思っただら躊躇をしている。

「なぜ、行けない？」

「ちょっとアルビオンを離れるわけにはいかないわ」

「今までだって、トリステイン王国で盗賊をしていたらどう？」

「アルビオンにはたまにだけ戻っていたのよ」

「だがこのままだと、経済封鎖でこのアルビオン国内は今よりも荒れるぞ」

そう。このアルビオンは革命戦争で田畑が荒れている。

その上、塩が入手できなければ、致命的だ。

今から塩を集めればここに残っていられるだろうが、その間は他の物資が滞るはずだ。

やはり、ここに残るのは無理があるだろう。

あらためて、マチルダに状況を説明するとあきらめたように言う。

「わたしは孤児院となっている村へ仕送りと、

たまに様子を見に行っているのよ」

「何人ぐらいだ？ ゲルマニアの隠れ家は一軒家だが、

郊外でそれなりに広い家だから今のうちなら自由に往来が可能だぞ」

「ちょっと、訳有りの子がいるのよ」

「訳有りの子？」

マチルダは考えていたが、口を開く。

「あなたは『聖地』に興味をもっていたわよね」

「ああ。それと今回の話と何の関係する？」

「いいから、まず、わたしの質問に答えて。」

それでその『聖地』にいるエルフのことはどう思っているの？」

「敵にはまわしたくは無いな」

「それだけ？」

「ああ。軍人をしているからといっても、

別に殺し合いをしたいわけでは無いからな」

「それは、始祖ブリミルに誓って言えるかい？」

「なんだったら、今、ここで誓うよ」

「そう」

マチルダは再び考え込んでいる。ぼくが『聖地』に興味をもっているのは知っているはず。

たしかに『聖地』にエルフがいるので、エルフとうまく話をつけて『聖地』に近づくのか考えなくてはいけないだろうとは思っている。

「ねえ。ワルド」

「うん？」

「あなたって、ハーフエルフが居るっていったら信じる？」

「ハーフエルフって？」

「人間とエルフの子どもよ」

ちよつと、まった。その展開はなんだ。

この『聖地』からはなれたアルビオンで人間とエルフの間のハーフエルフだと。

「それって本当か？」

「ええ。だから、ここを離れることができないの」

「見た目は人間と違うのか？」

「まず耳ね。それと、ちよつとばかり胸が大きいわ。」

それから性格はとっても良い娘よ」

ぼくはあまり気にしないが、ジャン爺はどうだろうか。

執事のジャン爺もメイドのオランプもメイジだ。

気にする可能性は大きいな。

いっそのこと、ワルド子爵領内の村に隠れてもらうか。

エルフを怖がっているのは貴族ばかりで、平民はほとんど実感が無かったはずだ。

ぼくが死ななければそれが一番だが、そうすると、勝ち組に残る必要がでてくる。

そうすると残る手はこれか。

「ゲルマニアでも金さえつめれば匿ってくれる村はある。

そこならハーフェルフであつても問題ないだろう」

「えっ？」

「もともとゲルマニアは『聖地』遠征にさえまともに行っていないからな。

貴族でもそこまでエルフに拒否感は高くないらしい。

ましてや平民なら問題ないだろう」

マチルダが驚いている。

「もし、ぼくから連絡がなければ、フォン・ヴィターハウゼン侯爵家の

ジークフリードをたずねていけばいい。

東の辺境で開拓もしているから、

幻獣や亜人を退治できるメイジなら歓迎されるはずだ」

「フォン・ヴィターハウゼン侯爵家？　どんな関係なのさ」

「ぼくやお前の兄の魔法学院時代の悪友さ。

あいつのことだから、ダミアンの名前より

フーケの妹だといった方が良いかもしれない」

ジークの心労を増やす結果になるかもしれないが、信用できるのはあとモンタンぐらい。しかし、あいつはエルフを嫌いそうだからな。

マチルダには手紙を書いてもらって、風の偏在を2体だしウエスト
ウッド村へ送り出した。

ぼくがもっている水石も、風の偏在にも複製されてもっている。

ぼくのわずかな水の魔法でも力を増して『フェイス・チェンジ』が
可能になるから、耳程度ならだいじょうぶだろう。

そうして、ぼくは竜騎兵隊の実力を見るために、竜騎兵隊の訓練風
景を確認することにした。

第七話 変装の術は（後書き）

一部分に新谷かおる先生作「エリア88」からの言葉を使わせてもらっています。

第八話 誤算と虚無と胎動と

ぼくはアルビオンの竜騎兵隊の訓練風景を確認した。

実戦なれはしている。ただし、実戦を繰り返した結果か、基礎技術で粗が目立つ者も多い。

ぼく自身は与えられた風竜で訓練を開始する。

元々は野生の風竜だったらしいが、手なずけるまでには時間はさほどかからなかった。

本来なら風の偏在の人数分をもらえるのがベストだが、この風竜以外にあいてはいなかった。

竜騎兵隊を統率するといっても、本気ではない。

チーム編成だが、副隊長がいたので適当に小隊長になれるものを3人選びださせて、その小隊長たちに自分たちの部下を4人づつ選ばせる。

残ったものは副隊長にまかせる。20人ばかりの竜騎士達だが、時間がかかる基礎訓練をおこなわせることにした。

たいがいの若手はこれを嫌がるから、訓練を続けなくなる方が丁度良い。

長い目でみればこれは良い訓練なのだが、今回は短期だからな。

グリフォン隊では、もう少し特殊な方法をおこなっている。

今はぼくの後任になっているであろうギトーがひっぱっているのであらう。

あいつの戦略眼には、ぼくも舌を巻く。

それを貴族は背中をみせないとか言って”疾風”のギトーの疾風は、逃げ足が疾風だなんていつてた奴らがいたなと言つてたのを思い出す。

ギトーも自信を失いかけていたが、ぼくと組んで彼の戦略を覗んだ

戦術を組み込んだら、うまくまわりだした。

彼がいなければ、ぼくもここまで早くグリフォン隊隊長にはなれなかっただろうし、彼もどうしていたのやら。

そんなことを思い出しながら、各竜騎士の長所と短所を覚えていった。

そうしていよいよ、アンリエッタ姫殿下とアルブレヒト三世の婚姻に対しての、いつもの『親善訪問』の日がやってきた。

上陸作戦全般の指揮まで、ぼくにまかされることになった。

いやはや、アルビオンも、革命戦争で人材不足と思われる。

表向きの司令長官はジョンストンだが、彼は政治家。実際の戦争でどれだけ役にたちであるうか。

役にたたれては、ぼくはこまるんだが。

このいつもの『親善訪問』の出航後に『レキシントン』艦長であるヘンリ・ボーウッドと話すことにした。

「ボーウッド艦長。君は今回の作戦を本音のところはどう思っているのかね」

「軍人としての職務を全うするだけです。ワルド子爵」

「そうか。かりそめの司令長官であるジョンストンが事故にでもあった場合は、ぼくの指令を聞いてくれるかな」

「祖国の為でしたら」

ふむ、祖国の為か。まだ、ボーウッド艦長には完全には信用されていないようだな。

そうして、ぼくは1つ目の札をさらしてみる。

「そういえば、ウェールズ皇太子が生きているという噂があったね」

「スキルニルを元に戻すルーンが公布されてからは、でなくなつたようですが」

ぼくは、その言葉を聞いて魔法人形であるスキルニルをだす。ポーウッド艦長は、なぜ、このタイミングで人形を出しているのか気がついていないようだ。

ぼくは風の偏在によつて、もっている土石を増やすことができる。その土石を使うことによつて土系統の魔法の増強ができるようになり、固定化をかけて保管していたウェールズ皇太子の血をスキルニルに埋め込んだ。スキルニルは、その姿を変える。

「ウェールズ皇太子！」

「そう。ぼくがウェールズ皇太子に協力をしていただき、スキルニルを使ってアルビオンのあちこちに出現してもらつた」

「ほ、本物のウェールズ皇太子は今どこにいるのですか？」

「トリスティン王国にいる。」

そのスキルニルのウェールズ皇太子はトリスティンへ誘う前に血をもらつたから、

そのことを知らないが本音で答えてくれる。
希望するかね？」

「……ええ」

「ウェールズ皇太子。お話いただけますようお願いいたします」

スキルニルであるウェールズ皇太子とボーウッド艦長の話はすすんだ。

問題は、本物のウェールズ皇太子がどこにいるのかを証明できないこと。

なにせ本人へ知らせる前の血ゆえに、このスキルニルのウェールズ皇太子もわからない。

ただし、今回のいつわりの『親善訪問』に関しては、ボーウッド艦長も本音は反対なことはわかったが、ウェールズ皇太子の居場所や生存も証明はできない。

なんとか妥協点をひきだした。これだけで満足するしかないだろう。降下していく際に、風向きを理由に1隻づつだけ、併走時に前方と後方になるように船を入れ替えた。

レコン・キスタに対して本音では反対派の艦長を後方に下げたのだ。もしかすると、うまくとりこめる艦を1隻でも多くと思ったが、このあたりが限度らしい。

あとは、マザリー二枢機卿への連絡がきちんとされていれば、どうにかなるはずだ。

トリステイン艦隊が見えてきたところで、こちらのアルビオン艦隊は併走するように移動する。

旗流信号でやりとりをしている。

『レキシントン』号から実弾はこめられていない礼砲を11発撃つ。少し間が空きトリステイン艦隊から返礼の答砲を待っていた。

こういう儀礼での最小である7発目で艦隊の最後尾で一番小さな旧型艦で、火災が発生する。しかも固定化も硬化の魔法も解いた船だ。戻ってきたのは、7発で8発目がもどってこない。

どこで失敗したのか、9発の答砲がもどってこない。国同士のいざこざに発展しかねないので、この礼砲の数はきまっている。

いつもの『親善訪問』を聞いた時には誰がこの『親善訪問』の名前がでてくるかは不明だったので、9発の答砲を依頼しておいた。ぼくが描いていた関係する作戦は失敗だ。

やはり時間がたりなさすぎたのか、どこかでマザリーニ枢機卿かその先で連絡が滞っているようだ。

ぼくはボーウッド艦長に向かって第2の計画へ移行することを伝える。

「答砲は普通なら11発だよな？　ボーウッド艦長」

「その通りです。こちらには、サー・ジョンストーンがおりますゆえに。ワルド子爵」

あらかじめきめておいた返答をしてくる。

その隙に、ぼくは目立たずに風の偏在をだすために一度船の中に入る。

狙いは、この船で待機している5人の竜騎士だ。全員が天然の火竜を操っている。

使い魔の火竜ならば、言うことを聞かない可能性はあるが、天然の火竜ならば乗り手の腕しだいだ。

普段からレコン・キスタには2体しか見せなかった風の偏在だが、今回は出せるだけ出す。

5体を竜騎士へ、もう1体は甲板へ移動する。ぼくは、ここの風石の倉庫へ移動する。

この艦にのっている竜騎士達の弱点はわかっている。それぞれの風の偏在にまかせておけばよいだろう。

この『レキシントン』号は、今後の味方にできれば心強い。その為、甲板に上がった風の偏在は『トルネード・カッター』で、帆とそのマストを切り裂いていく。

帆は単に固定化で燃えにくくなっているだけだが、刃系である魔法にはめっぽう弱い。

それに対してマストは硬化の魔法もかかっているが、この硬化の魔法をこえる力を超えた魔法がかかると、固定化の魔法も広範囲に解ける。

そうして発火となるが、この魔法主義の世界では、だれもそれを不思議に思っていないらしい。

ぼくもこの世界で幼少の頃から船乗りになるかならないか、考えていなければ気がついていなかったであろう。

ぼくは、軽い風の竜巻を風石の倉庫でおこして、風石にショックを与えて活動を開始させる。

『レキシントン』号は、風石を放出しだすまでは上昇していくだけだ。

本体であるぼくは、風竜にのり火竜にのった5体の風の偏在を確認した。

『レキシントン』号の長距離砲さえなければ、竜骨だけにしか硬化の魔法をかけていないトリステイン艦隊への心配は少ない。

硬化の魔法がなければ簡単に装甲を打ち抜かれるであろうが、火災になる心配はない。

火薬庫が撃ち抜かれれば一緒だが、気がつくまでには時間はかかるであろう。

風の偏在たちは1体を除いて、あきらかに今回のいつわりの『親善訪問』へ反感を抱いている艦長達の船のマストに向かって『トルネード・カッター』を使用する。

移動できない船は上には逃げられるが、早く下方へ移動するには風

石を放り投げるしかない。

普通ならば遅い上下移動しかできない固定砲台もどきだ。

彼らにこの戦線からの離脱を即す理由を見つけ出してやればあっさり上昇するだろう。

レコン・キスタ派の船にそんなことをしかけたら、上の位置にいる優位性を利用して何をしてくるかは不明なので、きつちりと船にとどめをささなければいけない。

風の偏在は、船の弱点である真上からの攻撃をしかけていった。

1体の風の偏在はマチルダへの伝言とともに、他の斥候隊のメンバーを火竜によって全滅させるのが目的に向かっている。

ぼくは、この間に上空で待っていた。

ぼく自身の精神力がどこまでもつか不明なために、風の偏在を大量にだしている間は積極的に動けない。

幸いなことに船は他に4隻を上空へ非難させて、副指令になる船を含んで2隻の船の火薬庫で火を放つことに成功したようだ。

自爆攻撃といわれるブリミル教では禁止されている行為だが、風の偏在だからこそできる芸当だ。

副隊長を含めた竜騎兵隊も3人を落としたことも確認してから、ぼくは空高く風竜を舞い上がらせて戦線を離脱し、トリスタニアの王宮へ向かった。

離脱時に風の偏在は2体まで減らされていたが、トリステイン艦隊も反撃を試みているようだし、もう少しは戦果も期待できるであろう。

ぼくは城の西に建てられた塔の一室に監禁されていた。

貴族用の牢屋だ。本来なら外に衛兵がいるはず。しかし、今はその衛兵もいない。

全員がタルブ草原での対レコン・キスタ戦に向かっている。

トリステインとアルビオンの艦対戦の場から王宮についたら、今回はヒポグリフ隊隊長であるアトスがいる隊だ。

アトスもレコン・キスタに接触をはかれていたが、ぼくがレコン・キスタに入ったところで、断られていたという情報は掴んでいる。当然のことながらマザリー二枢機卿にも連絡していたのだが、返ってきた言葉は

「なぜ、ここにいいのかね？　ワルド元子爵」

「なぜって？　アルビオン帝国が攻めてきたのを知らせにきたんだ」

「それは、すでに聞きおよんでいる」

少しばかり安心をした。そうして、ぼくはあらためてアトス隊長に話しかける。

「元子爵と呼ばれることはマザリー二枢機卿から聞いていないのか」

「いや、何も。それよりも、君は祖国を裏切ったと聞いている。

おとなしく杖を離すんだ」

ぼくはその言葉でようやくアトス隊長に話を通じていないことに気がついた。

軍杖と今では知る人間も少ない予備の杖も手放した。

「せめて、マザリー二枢機卿にひとこと伝えてくれないだろうか」

「今は会議が開かれている。その後なら伝えておこう」

「5隻を上空へ避難させたと伝えてくれ」

「わかった」

そうして、本来なら、王宮の中でも、あまり良くはない牢屋へつれていかれるのであろうが、アトス隊長の配慮か最上級の貴族向けの牢屋に入室していた。

ぼくは、このまま数日をこの牢屋で過ごすことになるうとは、この時点では思ってもいなかった。

第二部 エピローグ

トリステイン艦隊とアルビオン艦隊の戦闘は、実戦を重ねていたアルビオン艦隊に分があった。

それでもこの時点では最初にワルドが与えたトップを切り離す作戦で混乱を招いたアルビオン艦隊は中破、小破を含んだ船を含んで10隻にまで減っていた。

そうして、艦隊同士の戦闘からタルブ村での戦いは、地上戦力こそ

トリスティン王軍の優勢であった。

しかし、空中戦では数を減らしたとはいっても、トリスティン竜騎士隊とアルビオン竜騎兵隊では実戦の錬度が異なったために、トリスティン竜騎士隊は全滅。

アルビオン竜騎兵隊はわずかながらも残った。

その中に一騎のトリスティン竜騎士と間違われた、サイトが操るゼロ戦がアルビオン竜騎兵隊を全滅させた後の数分後に、まるで太陽のような光の塊が輝いたという。

その光が輝き終わったところで、次々とアルビオン艦隊が落ちてくる姿が見受けられた。

伝説のフェニックスが味方になったという掛け声とともに、トリスティン軍はアルビオン軍を攻めてタルブの草原での戦いはトリスティン軍の勝利に終わった。

その時間とあわせるかのように、ゲルマニア東端にあるフォン・ヴィターハウゼン侯爵家ではある異変がおこった。

ジークが見つけた風石の鉱脈。フォン・ヴィターハウゼン侯爵家の東の森が空中に浮かび上がっていった。

第八話 誤算と虚無と胎動と（後書き）

ライトノベル版3巻と7巻とで船の破壊状況が異なるのでこう解釈させていただきました。

しばらく考えていましたが、20巻で聖地が判明したので場所的なこともあり、ライトノベル3巻およびアニメ第一期相当の完了ですのでこの話はここまでといたします。

皆様ここまでお読みいただきありがとうございますとございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5601k/>

ワルドの日々【ゼロ魔】

2011年3月10日20時55分発行